二次元
ドリームマガジン
2D DREAM MAGAZINE
カラーイラストギャラリーは痴漢特集!
cover illustration by
桐島サトシ
成年向け雑誌
立ち読み版
特別企画
本当に興奮するエロ小説が知りたーい!
お願い!ファッキング
変
カラーピンナップポスター
竜胆
桐島サトシ
いるまかみり
大人気えっちマンガ&カラーマンガ
MISS BLACK
ぱふぇ/おおたたけし
NO.ゴメス/の歯
嘉納あいら
大好評連載&読み切り小説
表紙で登場!
アリシア 淫獄の姫騎士
斐芝嘉和×桐島サトシ
対魔忍ユキカゼ
蒼井村正×竜胆
酒井仁×SAIPACo.
狩野景×牡丹
壱状什×水月あるみ
久々登場! 分岐小説
淫魔教師シエル・ブランフォード
新居佑×綾枷ちよこ
表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス
vol.64
2012 06
DIGITAL EDITION
デジタル版

退魔師ギルドで耳にした噂を思い出した。最近、とある私鉄の車両に突然現れては、女性客に痴漢行為を働くゴーストが出没している、という噂だ。

（ということは、こいつらは）

先ほどから乳房をまさぐっている右横の男をキッと睨んだ。ひるんだように動きを止める男。

見た目は若いサラリーマン。だが、半透明をした陽炎のようなエネルギーがその体に折り重なっているのを、イレーネの霊眼が見抜く。

（ゴーストに憑依されてる。他の男も多分そうね）

ゴーストが単体で人間に憑依することは稀だ。だが死霊使い（ネクロマンサー）という特殊な能力者がそれを可能にすると聞いたことがある。

（それが今回の黒幕かもしれない。だとしたら、きっと近くにいるはず。車内のどこかに――）

霊眼を発動させたまま車内を見回す。

「……んっ」

が、その間も男たちの痴漢行為は継続していた。唇を噛んで耐え忍ぶ。目立つ行動をして敵に気づかれてはならない。

敵の気配を、霊力を探る。そちらに意識を向けているうちに、いつの間にかブレザーのボタンを外され、前をはだけさせられていた。

「えっ⁉　ああっ……！」

ブラジャーもずらされて乳房をあらわにされ、さらにスカートまでむしり取られる。公共の場所にあるまじき破廉恥な格好。だが密集した乗客が壁になり、大多数はその格好に気づいていないようだ。

「やぁっ、な、何これっ……⁉」

ふいに、信じられないほど熱く硬いものが右手に触れる。慌てて目を向けると、初老のサラリーマンが剥き出しにしたペニスを握らされていた。

肉棒の脈動や亀頭から竿までを濡らすカウパーのヌメリが手のひらに伝わり、無垢な乙女の脳髄を痺れさせる。

（嘘。男の人のって、こんな……す、すごい）

背後から回された手が胸元をまさぐってきた。

ねっとりと汗ばんだ手のひらによって、みち、みちぃい、とたわわな乳房を押し潰され、桃色の乳首をコリコリとつままれる。

「あっ、そこ、弱いの、ぉ……あうんっ」

とうとう耐え切れずに愉悦の声を漏らしてしまった。車内がわずかにざわつく。

半裸に剥かれた上、痴漢されていることがバレてしまう――それはプライドの高いイレーネには耐えられないことだ。

もはや敵を探すどころではない。退魔師としての意識が、女子校生としての羞恥に塗り潰される。

さらに背後から剥き出しのペニスを押しつけられ、黒いショーツの上から尻の谷間をなぞられる。

「あ、ああ……」

薄い布越しに感じる熱く硬い亀頭に、被虐の心を刺激された。前方の男の手がショーツの中に差し入れられると、股間からヌルリとした粘液がこぼれ、内腿をツーッと伝っていく。

（あたし、いつの間に濡れて……⁉）

「へへ、感じてるのか？　いやらしい子だ」

「なっ⁉　ち、違う――」

背後からの囁きに、カッとなって言い返した。

しかし言葉とは裏腹に、乳房は甘く蕩け、下腹部は熱く疼いていた。

男たちの手が発育のよい肢体を間断なくまさぐる。性経験のない肢体に初めての肉悦がさざ波となって広がった。ぱっくり開いた膣孔から、愛蜜がとめどなくこぼれ落ちる。

「ん、ふぁぁぁぁぁぁっ……！」

ここが電車の中だということも忘れて、イレーネは喜悦の声を上げた。上げさせられた。

「はぁ、はぁ、はぁ……き、気持ちいい……」

快感と気だるさで意識がボウッとなり、荒い息を漏らす。涙で濡れた視界に先ほどの小学生が映った。ニヤニヤとこちらを見ている。

唐突に、気づいた。エクスタシーの衝撃で意識が活性化したのだろうか。あまりにも近すぎて見落としていた、彼女と同じ霊能者の気配――。

「あなた……まさか、あなたが⁉」

「こんなに近くにいるのに気づかないんだ？　そう、僕が死霊使い（ネクロマンサー）さ。あの世とこの世を繋ぐ力を与えられた、選ばれし存在――」

少年が目を見開いた瞬間、空気が異質に変化した。背筋がゾクリと粟立ち、全身の毛が逆立つ。

大気そのものを淀ませるほどの、強烈な瘴気。

「こいつらに力を与えるために、女の人を襲わせてたんだけど、今日は極上の獲物が手に入ったよ」

周囲が、闇に包まれる。

「Ч то это Такое⁉（こ、これは何⁉）」

思わず母国語で叫んだ次の瞬間、光が戻った。

強烈な違和感を覚える。ない。この車両と連結しているはずの両隣の車両が、忽然と消えている。

乗客たちが戸惑いのざわめきを漏らした。

「僕の力でこの車両だけをこの世からあの世に転移させたのさ。これで邪魔は入らないね」

車両ごと空間移動させるなど、信じられないほどの霊力だった。自分と相手では霊能者としての格が違う。違いすぎる。

「さて、それじゃ始めようか、みんな♪」

少年がぱちんと指を鳴らすと、無数のゴーストが車内に入ってきて、乗客に憑依する。

「Ｗｏｏｏ

魔法少女エクセルアスナ 淫辱の電車

小説：天草白
イラスト：紙コップ

「エクセルアスナ、マギステルフォ――ゼッ！」
加賀美明日奈の胸元で、魔法のブローチが真紅の輝きを放った。
制服が弾け散り、女子校生離れしたグラマラスな肢体が露出の多いレオタード状の衣装に覆われる。
「人に仇なす闇の魔物！　このエクセルアスナが浄化するわ！　肉は塵に、魂は闇に、還りなさい！」
駅前のロータリーに高らかな宣言が響いた。
目の前にはムカデと人の中間のようなグロテスクな魔物の姿。エクセルアスナが『純真な心』を力の源とする魔法少女なら、魔物は『邪悪な心』を糧に生まれたモンスターだ。
「エクシードフレイム！」
魔法少女の放った火炎呪文が戦いの火蓋を切った。二発、三発と魔物に炸裂する。しかし魔物はダメージも気にせず突進し、巨大な爪を振りかぶる。
「この距離なら呪文は使えん。終わりだ！」
ザンッ！　しかし魔力光を刃に換え、振り下ろされた爪を真っ二つに断ち割るエクセルアスナ。
「あいにく私は近接戦闘型の魔法少女なの。得意距離は――クロスレンジよ」
告げて、そのまま魔物の懐まで飛びこんだ。
「エクシードスラ――ッシュッ！」
魔力の刃を収束し、必殺の一撃を放つ。
魔物は苦鳴を発して、大きくよろめいた。背を向け、一目散に逃げだす。
「逃がさない！」
巨大な体を光球状に変身させ、駅のホームを駆け上がる魔物。追うエクセルアスナ。
ちょうど発車寸前だった電車の中に逃げこんだ魔物を追って、魔法少女も車内へ飛びこんだ。
「えっ、いない――!?」
満員に近い車内に魔物の姿はなかった。魔力の気配がある以上、すぐ近くにいるはずなのだが……。
がたんごとん。車内を揺らし、電車が発車する。
と――そこで、周囲からの奇異の視線に気づいた。
今の明日奈は、Gカップの豊満な胸やむっちりとした尻のラインもあらわな扇情的すぎる衣装に身を包んでいる。
「……なんだあれ、もしかして痴女？」
乗客の間から嘲笑が聞こえ、頬が熱くなった。
性体験すらない少女にとって耐えがたい屈辱だ。
（違う、私は痴女なんかじゃない。これは魔法少女のコスチュームなのっ）
そう叫びたい気持ちをグッと堪える。
魔法少女の正体が明日奈であることは、誰にも秘密にしなければならない――それが魔法の力を得る際に果たした契約だった。
変身を解除して制服姿に戻ったところで、もしこの中に知人でもいたら、正体がバレかねない。
とにかく、今は乗客の中に紛れこんだ魔物を見つけるのが先決だ。恥ずかしさに耐え、エクセルアスナは周囲に目を配った。
おそらく人間に化けて、この車両内にいるはず。しかし帰宅ラッシュが始まる時間帯だけあって、車内はすし詰め状態。大勢の乗客の中から魔物を見つけ出すのは容易ではない。
と、そのとき胸元を何かが這い回った。
（えっ、何？　何なの……？）
その感触の正体に気づき、エクセルアスナは体を硬直させた。背後から伸びた手が、彼女の胸を揉んでいるのだ。
魔法少女の衣装は強靭な素材でできているが、布そのものは極薄だ。ほとんど素肌に触れられるのと変わらない感触で、無遠慮な指先が乳肌をツーッと撫でていく。
（やだ、私、痴漢されてる!!）
魔法少女とはいえ、いたいけな女子校生だ。ショックのあまり頭の中が真っ白になった。
背後の男はよほど興奮しているのだろう、先ほどから、ふう、ふううっ、と耳元に熱い吐息が吹きかかり、気色が悪くて仕方がなかった。
一刻も早くこの場から離れたいが、満員に近い車内ではほとんど身動きが取れない。少なくとも次の駅にたどり着くまでの数分間は無理だろう。
両手ではね除けようとするが、男の手はするりとそれをかいくぐっては、巧みに双丘の表面を這い回り、さわさわと撫でさすってくる。
さらに男は、手慣れた指遣いで乳房を揉み始めた。もぎたてのメロンを思わせる豊かなバストが、太い指が食いこむたびに淫靡にひしゃげる。
（ああ、やめてっ……）
魔物が相手なら敢然と立ち向かえるのに、初心な少女は性犯罪者相手に強く出られなかった。
毅然と拒否することもできず、女の矜持を傷つけられていく。悲痛な心の声も男には届かない。
せめてもの抵抗として体をよじり、拒絶の意志を示した。が、男はまったく意に介さず、それどころか背中にぴったりと体を密着させてきた。
ズボン越しに勃起したペニスが尻の谷間に押しつけられるのを感じ、背筋に寒気が走った。
（だ、誰か助けて！　この人、痴漢です――）
藁にもすがる思いで、周囲に目を走らせる。
しかし乗客は誰も動こうとしない。あまりにも人間が密集していて誰も痴漢に気づいていないのかもしれない。助けは期待できそうになかった。

娼婦調教の悦楽に
肢体は綻び始める――
対魔忍
ユキカゼ
TAIMANIN YUKIKAZE
対魔忍魔調教に堕つ
第3話 陵辱の宴
小説/NOVEL 蒼井村正(あおいむらまさ)
挿絵/ILLUSTRATION 竜胆(りんどう)
原作/ORIGINAL Lilith

「ハァハァハァハァ……んぁぁ……あひ……ンッ、んんんんうぅぅ……ッ！」

甘酸っぱい淫臭の立ちこめた室内に、ゆきかぜの悩ましげな喘ぎ声が響く。

奴隷娼婦に堕ちた対魔忍の少女は、胸と股間を露出した対魔忍コスチューム姿で、床に固定された極太ディルドウ相手に、騎乗位で奮闘していた。

並の男根などとは比べものにならぬ程太く、長く、凶悪なイボや突起が密生した紫色の責め具が、尻の上下動によって扱き立てられている。

大型の吸盤で床に固定されたディルドウの周囲には、少女の愛液が水たまりを形成していた。

「んは……くふぅぅぅ、んんんぅッ！　やっ、あんッ……あひ……イッ、うぅぅぅ～ッ！」

汗まみれの顔に、苦悶と喜悦の入り交じった表情を浮かべたゆきかぜは、切れ切れに声を上げながら、膣壁を引き絞り、括約筋を淫らに蠢かせて、責め具を扱き上げる。

魔界の技術を応用して作られたディルドウは、まるで生物のように脈動し、断続的にしゃくり上げて、濡れ蕩けた粘膜襞を掻き嬲っていた。

「んぁ、ひんっ！　あんッ、まっ、まだ、90ッ……早く、早く射精してよぉ！」

淫らな上下動を続けながら、目の前の床に置かれたデジタルメーターを睨んだゆきかぜは、怒りと快感の入り交じった声で叫ぶ。少女の膣内に挿入されたディルドウには快感センサーが内蔵されており、その数値が１００を越えると、生身のペニス同様に射精する機能を備えているのだ。

ディルドウに充填されているのは、魔界の犬の精液であったり、何の体液かもわからぬ媚薬粘液であったり、そのときによって異なっている。

射出されるのが何であれ、膣奥にぶちまけられ、子宮に溢れ返る熱い濁汁のもたらす汚辱感と被虐の悦びは、ゆきかぜの肉体と精神を打ちのめし、望まぬアクメへと飛翔させてしまうのだ。

（嫌だけど、恥ずかしくって、凄く悔しいけど、でも、やらなきゃ……任務のため、今はどんなことにでも耐えるッ！）

快感に流されてしまいそうになる自分を叱咤したゆきかぜは、対魔忍として鍛え上げられた肉体を駆使して、淫らな尻振りに熱を込める。

「ゆきかぜ、動きがぎこちなくなってきたな。そんなことでは奴隷娼婦としては失格だぞ」

壁際に立って、少女の痴態を鑑賞していた娼館の主、リーアルが声をかけてきた。

「く、うっ、うるさいッ！　んひ……はぁぁうぅぅ、んっんっんっ……こっ、これでいいんれひょ！」

舌をもつれさせながらも声を荒らげたゆきかぜは、ムキになってストロークを早める。

じゅぷ、じゅぷ、ぐちゅ、くちゅくちゅくちゅ、じゅぱじゅぱじゅぱ……じゅぷるっ……。

「んひぁ、あっあっあっあっあんッ……んうぅぅぅ、くぅ、ひぁ……奥にッ……んんんん～ッ！」

薄紅色に色づいた膣粘膜とセンサー付きの責め具が擦れ合い、愛液が掻き回される淫音がひときわ高まり、少女の喘ぎと混じり合って淫らなハーモニーを奏でた。

（ああ、私……この前まで処女だったのに、こんなにぶっといのがズボズボ入るようになっちゃった……オ■ンコがエッチな音立ててる！）

絶望感と、それを遥かに上回る妖しい悦びが、スレンダーボディを駆け抜ける。

「そうそう。その調子で続けろ。快感数値が90を越えたぞ。貧相だった尻も、色っぽくなってきたではないか」

上下動に加えて前後左右のスイングも交えた腰使いでディルドウに挑む少女の様子に、リーアルは満足げな笑みを浮かべる。

中年男が指摘した通り、奴隷娼婦となるための快楽調教を受け続けた少女の肉体は、細く引き締まったスレンダーなスタイルは維持しながらも、女らしい色香を漂わせ始めていた。

特に、尻から太腿にかけてのラインは、鍛え抜かれた筋肉の上にムッチリと脂肉が乗って、男好きのするボリューム感を増している。

尻の谷間ギリギリまで褐色に日焼けし尻たぶと、たくましい太腿が、汗と愛液にぬめ光り、偽りの男根を絶頂に導くべく躍動する。

「女という生き物は、肉の悦びに目覚めてこそ輝くものなのだ。お前もそう思うだろう？」

「そっ、そんらこと、おもわにゃいっ！　んひぁ！　あくぅぅぅ……あっひぃぃん！」

リーアルの恥ずかしい問いにかろうじて反論したゆきかぜであったが、握り拳サイズの亀頭に子宮を突き上げられる甘美な衝撃が頭の芯まで響き、無数の肉瘤に膣壁をゾリゾリと掻き鳴らされる快感で、背骨が蕩けてしまいそうだ。

「口では否定しても、お前の身体は着実に奴隷娼婦にふさわしい淫らなモノに変化しているのだ。その

登場人物紹介

水城ゆきかぜ

電撃の対魔忍の異名を持つ若き対魔忍。勝気で負けず嫌いな性格。幼馴染みの秋山達郎のことを気にかけている。

秋山凛子

ゆきかぜの通う学園の先輩対魔忍で達郎の姉。ゆきかぜと行動を共にし、先走りがちな彼女をサポートする。

秋山達郎

対魔忍として成長中の少年。ゆきかぜとは幼馴染みであり、長い間互いを思っているが友達以上恋人未満の関係。

前号までのあらすじ

任務中に行方不明となったゆきかぜの母・不知火を探すため、魔界都市ヨミハラへ潜入した二人の対魔忍。存在をカモフラージュするため奴隷娼婦としての調教を受ける日々を過ごす彼女達は、すでに処女までを奪われていた。

尻振りの艶めかしさ、オ■ンコの淫靡な蠢き、まさに奴隷娼婦にふさわしい、淫らな肉体だ」
「んは……あうぅぅ、おっ、お前が……そうしろって言うから……無理矢理教え込んだから…」
なかなか上昇しない快感メーターの表示を睨みながら、苛立った声を上げるゆきかぜ。
「無理矢理とは、つれないことを言う。最初の騎乗位訓練では、お前もあんなによがり狂って尻を弾ませていたではないか。なあ、凜子(りんこ)よ、お前もあの訓練の一部始終を見ていただろう？」
ゆきかぜの正面で、ダイナミックな肢体をくねらせているもう一人の女にリーアルが問いかけた。
「はぅぅぅ……く……私は物覚えが悪くってな。そっ、そんな昔のことなど、記憶してない……」
ゆきかぜとともに奴隷娼婦の訓練を受け続けている先輩対魔忍は、とぼけた口調で言い返す。
「凜子先輩……」
肉悦の試練を受けながらもなお、後輩のことを気遣う凜子の強さと優しさに、ゆきかぜは思わず涙ぐんでしまう。
凜子のヴァギナにも、ゆきかぜと同様のディルドウが挿入され、メリハリに富んだ肢体に肉悦奉仕を強要しているのだ。
「クククッ、この期に及んで、まだ反抗的な態度を取れるか。対魔忍というのは、本当に調教しがいがある獲物だな」
幾多の女たちを肉悦の地獄に叩き落としてきた中年男の口元に、邪悪な笑みが浮かぶ。
「対魔忍を……舐めるなよ……あぁぅ……ウッ……ンンンンッ……うぅ……ンンンンぅぅッ！」
挑発的な視線でリーアルを射貫きながら、凜子は悩ましげな呻きを漏らして上下動を続けている。
グラインドを交えた上下動に連動して、メロンを二つ並べたような量感たっぷりのバストが汗の滴を振り撒いて揺れ弾み、ゆきかぜよりも遥かに肉感的な尻たぶが、込み上げる女悦に打ち震えた。
「お前に言われずとも、対魔忍のしぶとさは知っているさ。対魔忍を調教するのは、お前たちが初めてというわけではないのだからな……」
娼館の主が発した衝撃的な言葉に、ゆきかぜと凜子の身体が、ビクンッ！ と反応する。
（そっ、それって……まさか……お母さん!?）
任務中に行方不明になった母の消息をにおわせるリーアルの言葉に、ゆきかぜの顔が強ばる。
母を助けたいという一心で、奴隷娼婦にまで身を落としたゆきかぜと凜子にとっては、喉から手が出そうになるほど欲しい情報であった。
「フッ、そんなはったりで、私たちを怯えさせようとしても……むっ、無駄だぞ……。本当だというなら、その対魔忍の名を聞かせてもらおうか」
あからさまに表情を変えたゆきかぜからリーアルの注意を逸らそうとしたのか、凜子が挑発しつつ、さらなる情報を求めてカマをかける。
「お前たち対魔忍が、超絶的な精神力の持ち主だというのは認めよう。だが、どんなに強靭な精神も快楽の炎で燃え尽きて、身も心も牝奴隷に堕ちる。必ず、な……。対魔忍とて例外ではない」
しかし、娼館の主はそれ以上のことは語らず、絶大な自信を込めて言い放つ。
「うぅぅぅ……」
「くぅぅぅぅ……」
リーアルの言葉に、ゆきかぜと凜子は反論することができなかった。
この数ヶ月間、理性と矜持(きょうじ)を打ち砕かれ続けてきた二人は、リーアルの言葉が事実であることを身に染みて悟ってしまっているのだ。
（こいつの言っている対魔忍が、お母さんだったとしたら、私たちが受けた辱めは無駄じゃなかった……任務を、果たせる！）
絶望と快感に呑み込まれてしまいそうなゆきかぜの中に、小さな希望の灯が点される。
（絶対にお母さんを助け出して、いっしょに……達郎(たろう)の待っているあの場所に戻るんだ！）
愛する少年の顔を思い出しながら誓う。
（達郎……心の奥底にはいつもあなたがいるから、私、どんなことにでも耐えられるよ。必ず帰るから、待ってて……）
「無駄話をしているうちに、せっかく上がっていた快感数値が下がってしまったではないか」
リーアルの耳障りな声が、少女の心を残酷な現実に引き戻した。
「あ……!?」
凜子とゆきかぜの中間に設置されたデジタルメーターの数値は、80ポイント台まで下降してしまっている。
「そのディルドウを射精させないと、いつまで経っても訓練が終わらないぞ」
「わ、わかっている！ こんな訓練、すぐに終わらせてやるさ！」
「そっ、そうよ、何回やったって、私たちを燃え尽きさせることなんてできないんだから！」
リーアルに急き立てられた二人は、肉悦に痺れた身体に鞭打って、騎乗位奉仕の速度を上げた。
「くぁ、んっ……うぅぅぅッ……はぁはぁはぁ……あふ……んくうぅぅぅん……」
「ひゃうぅぅ……あッあッあっ、あんッ！ 奥に……当たって……あはぁぁぁ～ン！」
女たちの上げる艶めかしい喘ぎ声と、蜜のこね回される淫音が、蜜臭に包まれた室内に響く。
（凜子先輩、あんなに太いのを、奥まで呑み込んで……あんなに激しく腰を使ってる……）
ジワジワと上昇してゆくメーターを睨んで尻を弾

著者近況 ユキカゼ連載開始以来、ずーっと陵辱系エロシーンばかり書いています。これはこれで楽しいのですが、そろそろ、カッコイイアクションシーンとか、コメディっぽいシーンを書きたくなってきました。

ませていたゆきかぜは、凛子の力強くダイナミックな動きについつい見とれてしまう。
凛子が処女を奪われるところを見ていなかったので、ヴァギナに異物を呑み込んで尻を振る先輩対魔忍の姿を見るのは、これが初めてだ。
「んっ……くうぅぅ……んあぁぁ……ンッ！」
艶めかしい吐息を漏らした凛子は、下腹の筋肉を引き締めてディルドウを締めつけつつ、左右の捻りを加えながら肉感的な尻を振りたくっている。
ぎちゅっ、にちゅっ……じゅぷるっ……。
責め具と膣壁が絡み合う卑猥な蜜鳴りの音が上がるたびに、快感メーターの数値はどんどん上昇してゆく。
（凄い……見てるだけでオ■ンコが疼いちゃう）
肉悦に責め苛まれながらも、クールな表情を崩さず、凛子はひたすらに尻を浮き沈みさせている。
（凛子先輩だって、あんなに頑張ってるんだ……私も……任務のため、淫らになりきらなきゃ）
「んぁ、あんっ！　先輩、凛子先輩いぃぃ……あっあっあっんきゅぅぅぅんんっ！」
「くぅ……んんんぅぅぅ……そっ、そんなに見るな！　心頭滅却しろ、ゆきかぜ！」
ディルドウに貫かれた股間を凝視しながら尻を振るゆきかぜを叱りながら、凛子も後輩対魔忍の狭いヴァギナを割り開いて出入りする責め具の威容に興奮を煽られていた。
（ゆきかぜ……あんなに細く華奢な身体で……太いモノを呑み込んで……ダメ、なのに、あの痛々しい姿に胸が高鳴ってしまう）
今にも裂けてしまいそうに拡張されながら、ディルドウを扱き立てるゆきかぜの秘裂を見つめながら、凛子はサディスティックな淫情の炎が身体の奥底で燃え上がるのを感じて戸惑っている。
数ヶ月間にわたって、肉体と精神を淫らに改造された対魔忍の少女は、互いの痴態に興奮しつつ、ディルドウオナニーの快感に狂い悶えた。
「そうそう。言い忘れていたが、この訓練で先に疑似ペニスを射精させた方には、特別なイベントに参加してもらうことになっている」
二人の喘ぎ声が切羽詰まってきたのを見計らったかのように、リーアルが唐突に告げる。
「いっ、イベントだと？」
「んぁ、どっ、どうせロクでもないんでしょ⁉　いっ、いいわよ、なんだってやってやるッ！」
極太ディルドウを騎乗位で扱き立てながら、凛子とゆきかぜはまだまだ勝ち気である。
「相変わらず勇ましいな。だが、中出し孕ませイベントだ、と言っても、強気でいられるかな？」
「なっ！　何だと⁉」
「中出し……孕ませですってぇ⁉」
紅潮し汗ばんだ二人の顔に、怯えの表情が浮かぶ。陵辱の結果としての妊娠は、対魔忍である彼女たちであっても、とうてい受け入れ難い最悪の懐妊シチュエーションであった。
「しかも、陵辱メンバーに選ばれているのは、対魔忍に仲間や親兄弟を殺された札付きの連中ばかりなのだ。精いっぱいご奉仕して、過去に犯した罪を償うのだな」
こともなげに、リーアルは言い放つ。
「う……くうぅぅ……」
「なっ、なんて、理不尽な……」
「男どもの恨みが込められたザーメンで孕むのは、どっちの淫らなメス豚か、早く決めるのだ！」
淫らな尻振りを止められなくなっている対魔忍たちに、残酷な命令が下される。
「ゆっ、ゆきかぜ！　お前はこんなばかげたイベントに参加する必要はない、休んでいろ、こっ、ここは私が引き受ける！」
「んひぁ……そっ、その命令は聞けませんッ！　私が……イッ、行きますッ！　あっあっあっあぁぁぁんッ！」
姉妹のように互いをいたわり、援護し合って幾多の死地をくぐり抜けてきた二人の対魔忍は、競い合うように尻をくねらせ、ヴァギナを引き絞って、射精機能装備のディルドウを扱き上げた。
（凛子先輩には負けない……この訓練だけは、絶対に負けられない！）
（孕ませなど……ゆきかぜにさせるものか！）
仲間に対する気遣いさえも、辱悦行為の燃料として使われた二人の少女は、紅蓮の炎として燃え上がる快感に呑み込まれてゆく。
欲情に蕩けた目で快感メーターを睨みながら奉仕するゆきかぜと凛子の腰使いは、次第にシンクロしていった。
「「ハァハァハァハァ……ひぅぅぅんんんッ！　あっあっあっあっあっんひぅぅぅぅ～ッ」」
艶めかしく裏返った喘ぎをハモらせながら、スレンダーボディとメリハリ抜群のダイナミックな肢体が尻振りの競艶を見せつける。
膣奥に突き当たるまで深々と挿入して前後に尻をくねらせ、亀頭の先端を子宮口に擦りつけて刺激し、鍛え抜かれた腹筋までも動員して、極太ディルドウを搾り上げ、扱き立てた。
「快楽数値98……。あと少しだぞ、どっちの方が先に射精させるかな？」
楽しげなリーアルの声を掻き消すかのように、甘い喘ぎと卑猥な蜜鳴りの音が高まってゆく。
激しく収縮する二人の膣内で、疑似男根の亀頭がグ、グ、グッ、と張り詰め、イボだらけの肉胴が脈動を開始した。
「あぁぁ、ビクビクしてるぅぅッ！」
「くっ……来るかッ！」

著者近刊　『呪詛喰らい師』計3巻、『超昂閃忍ハルカ スパル虜囚魔辱編』『暁の護衛 プリンシパル護衛日記』『もののふガールズ2 姉妹剣士がお相手します』『てとてトライオン！ 夏休み活動日誌』『もののふガールズ' 剣も恋も免許皆伝』　好評発売中！

腰振り競争で蕩けた子宮内への射精に備えて、ゆきかぜと凜子は身構える。
びゅくんっ、びゅくびゅくびゅくんっ！　どぷるるるるうぅっ！　びゅるるるるっ、どびゅろろろろおおぉぉ～ッ！
コンマ数秒程の差はあっただろうが、ほぼ同時と言って差し支えのないタイミングで、ゆきかぜと凜子の膣内に灼熱の濁汁がぶちまけられた。
今回、射精ディルドウに充填されていたのは、粘度を高めた媚薬ローションだ。
精液よりも熱く、粘りの強い魔性の濁汁が、膣粘膜にしみ通り、開ききった子宮内にまで流れ込んでグルグルと渦を巻く。
「ひあああぁぁぁぁあ！　イクッ、イクッ、しゅごいっ、射精しゅごいいいっ！　オ■ンコ、子宮っ、爆発するッ！」
「んぅうあぁぁぁぁ～ッ！　もう、もう入らないッ！　子宮が膨らんで……んぐうぅぅぅッ！」
はしたない嬌声を上げたゆきかぜと、押し殺した呻きを漏らす凜子の身体が望まぬエクスタシーに痙攣する。
「同時に果てるとは、仲のいいことだな。まあいいだろう。元対魔忍のメス豚二匹、いっしょに孕ませイベントに出した方が盛り上がるからな」
リーアルの声も聞こえず、射精ディルドウを深々と咥え込んで中出しエクスタシーに浸る二人のヴァギナから、大量の白濁液がゴポゴポと泡立ちながら溢れ出してきた。
絶頂の余韻さめやらぬ二人は、シャワーも浴びさせてもらえぬまま、ヨミハラ中央の広場へと連行された。
広場には特設のステージが作られ、既に百人近い男どもが集まって騒いでいる。
（悪党面ばかりだな。全員まとめて成敗してやりたいところだが、今の状況ではそうも行かぬか）
「斬鬼」の異名で恐れられた凜子は、抜き身の刃を思わせる冷たい視線で、居並ぶ男どもを見つめながら思う。
「……皆様、お待たせいたしました。今日は、元対魔忍の奴隷娼婦、雷撃のゆきかぜと斬鬼の凜子がご挨拶とお披露目のデモンストレーションを行います！」
二人を舞台上に立たせ、マイクを手にしたリーアルが朗々とした声で宣言すると、野卑な歓声が湧き起こった。
「まず、イベント第一部は、このメス豚どもが過去の罪を懺悔し、彼女らが手にかけた被害者の遺族たちに全身全霊を差し出して許しを乞います」
ステージにゾロゾロと上がってきたのは、全裸になった三十人程の男たち。その大半が魔族との混血で、凶暴、残忍な面構えをしており、それ以上に凶悪無比なペニスをそそり勃たせていた。
「せっ、先輩……」
「あんな雑魚どもにうろたえるな！」
不安げな声を上げるゆきかぜを一喝し、毅然とした態度を取ろうとする凜子であったが、彼女の身体もまた、恐怖と欲情の入り交じった震えが止められずにいる。
（何故だ……こんな奴らに、私は……私の身体が、抱かれたがっている……犯されるのを望んでしまっている……媚薬ローションのせいなのか？）
射精ディルドウ訓練で、膣内に媚薬ローションをたっぷりと注がれた上、このステージに上がる直前、身体の表面にも、ローションの原液を塗り込まれていた。普通の女性なら、欲情を抑えられずに狂乱している濃度である。
「はぁはぁはぁはぁ……」
「んんっ……くぅぅう……くふぅぅぅ……」
まだ何もされていないというのに、さすがの二人も悩ましげな喘ぎを抑えきれない。
奴隷娼婦としての心身ともに改造された凜子とゆきかぜは、激しい陵辱を期待して、欲情の炎を燃え上がらせてしまう。
男どもの刺すような視線が、そそり勃ってヒクついているペニスが、羨ましげな見物人どものヤジやざわめきが、見えざる熱波となって、内と外から女体を炙り灼いた。
「その顔と服装、見覚えがあるぜ。オレの兄貴を殺った女だ！」
「仲間の仇、このチ■ポで取ってやるぜ！」
対魔忍姿の少女たちを睨む男どもから、とてつもなく濃密な殺気と欲情が漂ってくる。
（殺される……言う通りにしないと、とんでもなく残酷に……殺されちゃう）
（ここで命果てるわけにはいかない。生きるためには、奴隷娼婦に徹するしかないな……）
武器も持たず、対魔忍としての力も封じられた二人は、アイコンタクトで意思を確認し合う。
「どうした？　あの男どもに誠心誠意詫びるのだ。その身体を差し出して、罪を償い、慈悲を乞うがいい。まずはゆきかぜ、お前からだ！」
「う……く……」
湧き起こる不安と屈辱感を呑み込み、小さく頷いたゆきかぜは、舞台の中央にひざまずき、クンッ！と股間をせり上げた。
くちゅ……ぴゅるっ……。
先ほどまで極太ディルドウを咥え込んでいた秘裂が恥音を立てて開き、中出しされた媚薬ローションを溢れ出させる。
「はんっ！　あ……はぁぁ……」
鼻にかかった甘い呻きが漏れ、褐色に日焼けした

太腿がビクッ、ビクンッ！　と、不随意の痙攣を起こしてしまう。
「見ろよ、元対魔忍のド淫乱マ■コが、涙を流して命乞いしているぜ！」
舞台上の男が野卑な声を上げ、観衆たちがドッ！と沸き返った。
痛い程に乳首を勃起させた貧乳の奥で、心臓が鼓動を早め、秘部とアヌスが、キュッ、キュンッ！　と、まるで絶頂寸前のような収縮を起こす。
奴隷娼婦として改造された肉体と精神が、ありとあらゆる感情を欲情へと変換しているのだ。
（どうしたの私？　悔しくて、恥ずかしいこと言われているのに……身体が疼いてる）
異様な昂りを感じつつ、ゆきかぜは、リーアルに教えられた通りの口上をのべ始める。
「もっ、元対魔忍の、水城ゆきかぜだよっ！　対魔忍として、みんなの友達や仲間を殺した罪滅ぼしをしたくって、奴隷娼婦になったの！」
自棄気味に声を張り上げた少女の叫びが、ヨミハラの広場に甲高いエコーを伴って響き渡る。
「みっ……皆さんのチ■ポを最高に気持ちよくできるように、リーアル様にいっぱい訓練していただいたの。くふぅ……んんっ……ほっ、ほら、見てぇ、私の淫乱調教済み……オ■ンコッ！」
さらに足を開き、ブリッジでもするかのような体勢で仰け反ったゆきかぜは、秘裂の縁に指を添え、くぱぁ……と、大きく割り開く。
強引に押し開かれた膣口から、中に溜まっていた濃厚な淫液がドロリと溢れ出し、ヒクつきの止まらぬアヌスの蕾まで濡らす。
「ひょおぉ！　見ろや、あの美味そうなピンク色のオ■ンコ！　こいつは上物だぜ！」
「クソの穴まで蠢いていてやがる。とんでもねぇド淫乱に調教されたようだな」

歓声に混じって、蔑みの声が投げかけられる。
「はぁぁうぅぅ……みっ、みんなの視線がオ■ンコの奥まで突き刺さってきて、もっ、もう、イッちゃいそうだよぉ！」
リーアルに命じられた口上にはなかったアドリブのセリフを叫びながら、ゆきかぜは褐色に日焼けしたスレンダーボディをわななかせる。
心拍数がどんどん上がり、ヴァギナが炎に炙られたロウソクのように熱く潤んだ愛液を大量に溢れ出させる。
（ダメ……本心で言ってるわけじゃないのに、身体が勝手に……どんどんエッチになってる！）
女陰の熱が全身の細胞にまで燃え広がり、淫蕩な本能で煮込まれた脳がグツグツと泡立って、唇が勝手に恥辱の言葉を紡ぎ出す。
「ねっ、ねえ、みんなの、恨みのこもったチ■ポで、オ■ンコグチャグチャに掻き回して……」
媚薬ローションの香りがする汗に濡れまみれたスレンダーボディが、クルリ、と半回転する。
「ほっ、ほらぁぁ、オ■ンコの奥まで……んっ、きゅふうぅ……みっ、見えるでしょ？」
交尾をねだるメス猫のように尻を突き出した後背位の姿勢になった少女は、膣口に両手の人差し指と中指を挿入し、めいっぱい開口させた。
細やかな肉襞を列ねた柔らかな粘膜穴は、ミルクのように白濁した本気汁に蕩け、先ほどの訓練で注ぎ込まれた媚薬ローションの残滓をドロドロと溢れ出させて、淫靡な匂いで牡を誘う。
「ゆっ、ゆきかぜッ！」
あまりにも破廉恥な後輩の媚態を見かねた凛子が声をかけるが、スレンダーボディの少女の耳に、その叫びは届かなかった。
「こっ、この奥に、チ■ポっ！　チ■ポが欲しい……欲しいのっ！　犯して……早くうぅ！」

まるで子宮が叫んでいるかのような淫靡なおねだりに、男どもの薄っぺらい理性が吹き飛んだ。
「ああ、姦ってやるよ！」
押し寄せてきた陵辱者の群れに、少女の小柄な身体が呑み込まれる。
「うはあぁぁぁんっ！　あっ、やぁぁん……きゃはあぁぁぁンッ！」
媚びた悲鳴を上げる少女のヴァギナに何本もの指が潜り込み、アヌスの蕾にも節くれだった指が突き立てられる。
「あひいぃぃぃんっ！　ひっ、いっ、あッあッあっあはぁぁぁ～んんんっ！」
指挿入だけで軽いアクメに舞い上がったゆきかぜは、男どもの指を咥え込んだヴァギナを痙攣させ、アヌスを引き絞ってよがり悶える。
「こいつのオ■ンコ、数の子天井できっつきつのロリマ■コだぜ！」
「ケツマ■コの締めつけも極上だぁ！　おぉ、奥の方はトロトロの粘膜が蠢いてるぞ」
「オレにも弄らせろ！　ひょお！　ホントだぁ」
アヌスとヴァギナに入れ替わり立ち替わり指がねじ込まれ、激しいピストンで粘膜穴を掻き回し、勃起クリトリスを摘んで揉み嬲る。
「きゅふぁぁぁぁ！　クリトリスそんらにしたら、らめへぇぇぇ～ッ！」
舌をもつれさせて叫ぶ少女のスレンダーボディが、立て続けのエクスタシーに反り返る。
「ご奉仕もせずにイキまくってんじゃねえよ、この日焼けド貧乳！」
貧乳バストの中心で、やや大きめの乳輪ともどもプックリと盛り上がった乳頭がきつく摘まれ、千切れそうに引っ張りながら捻り上げられる。
本来なら激痛しか感じないはずの乳首捻りが、壮絶な快感の矢となって少女の乳先を射貫いた。

「しゅごいしゅごいしゅごいいいいッ！　痛いのが、きもひいっ、きもひいいのぉぉ！　んあぁぁぁ……んふ、ちゅぷちゅぷちゅるるるっ！」
悲鳴を上げる口に挿入された指に舌を絡めて舐めしゃぶる少女の身体中に、硬く猛ったペニスが擦りつけられた。褐色に日焼けした滑らかな素肌に牡臭い先走りが塗りたくられ、上気した頬を、赤黒い亀頭が突き歪ませる。
「ほらぁ、罪滅ぼしするんだろ⁉　よがってばかりいないで、きっちりご奉仕しろよ！」
両手に灼熱した男根が握らされた。
「んぐうぅ……手コキ……するからぁ、乳首、グリグリするのやめれぇぇ～」
小さな手に余る太さの肉茎に指を絡めて扱き上げつつ、ゆきかぜは絶え間なく送り込まれるマゾ快感に震え悶える。
「チンタラやってんじゃねえよ！　チ■ポはまだまだあるんだからよぉ！」
顔に突きつけられたペニスの包囲網がズイッ！と狭められ、視界が勃起に埋め尽くされた。
「んはぁぁ、はぁはぁはぁはぁ……あはぁん」
喘ぐたびに、先汁と恥垢の入り交じった強烈な臭気が鼻孔を貫き、欲情した肉体がペニスを求めてさらに激しく疼き昂ってゆく。
「はぁはぁはぁはぁ……チ■ポ……チ■ポがいっぱい……んむ、あむ……んふうぅう、ちゅぱちゅぱちゅぱ……あふ、こっちも……はぷっ！」
奴隷娼婦の本能に命じられるがまま、花から花へと飛び回るミツバチのように、亀頭に吸い付いて先汁をすすりながら、両手を小刻みに動かして、猛った牡槍に快感を送り込むゆきかぜ。
（任務のため……だから……私は奴隷娼婦だから……チ■ポぉ、もっともっとチ■ポぉぉ！）
対魔忍としての建前と、浅ましい本音を頭の中で交互につぶやきながら、ゆきかぜは全身を駆使してペニスの群れに奉仕する。
五感の全てが男根に支配されていた。手に触れるのもペニス、視界を覆い尽くして雄々しくそそり勃っているのもペニス。吸い込む空気は牡の性臭。奴隷娼婦の刻印を浮き出させた舌には先走りの体液が粘り着き、聞こえてくるのは柔肌と亀頭が擦れるニチャニチャという淫音。
「そろそろ、このエロマ■コにチ■ポをブチ込んで欲しいんじゃねえか？」
ヴァギナとアヌスを掻き回していた指が一斉に抜かれ、男根の群れが離れた。
「あんっ！　あぁぁんん～ッ！」
切なげな声を上げたゆきかぜは、褐色に日焼けしたヒップをくねらせ、蜜まみれの秘裂を収縮させて、愛撫の再開をおねだりしてしまう。
「ほら、言えよ、オレたちがドン引きするぐらい卑猥で恥知らずに、チ■ポを欲しがるんだ！」
林立する勃起でゆきかぜを包囲した男どもは、屈服のセリフを迫る。
「欲しい……チ■ポ欲しいチ■ポ欲しいチ■ポ欲しいいいいィ！　欲しいのぉぉぉ！」
淫らな感情垂れ流しの声を上げた元対魔忍は、尻を高々と掲げ、濡れ蕩けた秘裂を見せつけながら、おねだりのセリフを必死に搾り出す。
「いっ、淫乱メス豚のグチュグチュオ■ンコを、みなさんのくっさいザーメンでいっぱいにしてくらさい、いっぱいいっぱいドクドクって出して、子宮から溢れちゃうぐらい注いでくらさいいいィ！　チ■ポ、ブチこんでぇぇぇぇ～ッ‼」
完全屈服した少女の絶叫が、地底都市ヨミハラに響き渡った。
（あぁぁぁっ！　言っちゃった！　言っちゃったよぉ……ザーメン欲しいって、言っちゃったぁ）
後悔の念よりも、身震いするような興奮と解放感が、スリムに引き締まった肢体を震わせる。
「よおおし、最初はオレだ！　こいつをブチ込んでやる、覚悟しろよメス豚！」
一番乗りを決めた男が、ゆきかぜの鼻先に猛った肉槍を突きつけてくる。
「う……あぁ……おっきぃ……大きすぎ……る」
それは、これまで見た中で最大の巨根であった。太さと長さもさることながら、胴部分に突き出た幾つもの肉瘤が凶悪だ。
まるでゴーヤを思わせる三十センチオーバーの剛直先端部では、少女の握り拳程もある亀頭が先汁に濡れ光って張り詰めていた。
「あぁぁ、無理……オ■ンコ、壊れちゃう」
恐怖と、それを上回る期待に声を震わせた奴隷娼婦は巨根を凝視する。
「もの欲しげな目で見やがって！　そらぁ、容赦なく行くぜぇ！」
ゆきかぜの尻を抱えた男は巨大な亀頭を膣口に突きつけ、ピンクの濡れ穴にねじ込んでゆく。
「やぁぁんっ！　無理無理ムリィィィッ！　ぎあぁぁぁぁぁ！　裂けちゃウッ！　裂けちゃうウゥゥゥ～ンッ！」
激痛に泣き叫ぶ少女の膣口を限界まで押し開き、限界を超えるサイズの極太肉凶器が挿入された。
「ぐ……んっほおおおおおおぉ～ッ‼」
呼吸もままならないほどの、圧倒的な充足感に仰け反った少女の目がグルン、と裏返り、奴隷娼婦の刻印が浮き出た舌が口から突き出て痙攣する。
スリムに引き締まった少女の下腹部は、極太巨根に蹂躙（じゅうりん）され、卵を呑み込んだ蛇の腹のように、ポッコリと膨らんでしまっていた。
「ブチ込んだだけで派手にイキやがったぜ！　ヒャハハハッ！　だが、こんなもんで終わりじゃねえ、

死ぬ寸前まで悶え狂わせてやるぜぇ！」
対魔忍への恨みを巨根に込めた男は、小柄な少女のヴァギナを情け無用で突き上げる。
ずんっ……ずんっ……ずちゅんっ……ぐちゅっ……ぐちゅっ……ぐちゅんっ……。
「ぐはぁぁ……あぐっ！　かはぁぁ……」
ひと突きごとに、ゆきかぜの身体が前のめりになり、巨大な亀頭が子宮を直撃して、内臓全体に快感の枠を越えた衝撃波を送り込んでくる。
ヴァギナにボディブローを連続で叩き込まれているのに匹敵するハードピストンであった。
「どうだいオレのチ■ポは？　効くだろう？」
「ぐほっ！　んは……子宮ッ！　子宮潰れひゃうぅぅ、かはぁぁ……あひぃんっ！」
息も絶え絶えの呻きを漏らしながらも、ゆきかぜは突き込みにタイミングを合わせて下腹の筋肉を収縮させ始めていた。
過剰なサイズの男根に対応すべく、裂断寸前まで拡がった膣粘膜が淫靡にうねり、瘤だらけの肉柱をヌロヌロと舐め回す。膣奥では、柔軟さを増した子宮がエアバッグのように亀頭を包み込み、衝撃を拡散していた。
衝撃が最大になる瞬間には、少女の腹部に腹筋の凹凸がクッキリと浮き出し、並の男のパンチより強烈な亀頭の打撃を散らし、子宮が突き破られるのを防いでいる。
対魔忍として、限界を超えて鍛え上げられた肉体と、奴隷娼婦の訓練で叩き込まれた淫靡な腰使いが、ここぞとばかりに発揮されているのだ。
（身体が全部……オ■ンコになっちゃってる……私の中……チ■ポでいっぱいだよぉ……）
ゆきかぜの身体は、肉体全てがヴァギナに変じたかのような、圧倒的な蹂躙快感に包まれていた。
「すっ、すげえじゃねえか。オレのチ■ポをブチ込まれて悶絶しなかった女は、おめえが初めてだ。さすがは奴隷娼婦……マジすげぇぜ！」
ヴァギナを責めている男は、感嘆の声を上げながら、フィニッシュに向かってゆく。
「んは……あひっ、いっ、あっアッあんっ！」
激しいピストンを受けながら、ゆきかぜはすがりつくかのように両手に握ったペニスを扱き上げ、口元に突きつけられた亀頭を舐め回して奉仕する。
（私は全身オマンコだから……だから……チ■ポにご奉仕するんだ……）
「すげえ上手じゃねえか。このまま手の中に射精したくなってくるぜ」
「くおぉ、柔らかな舌のチロチロが、たまんねぇ！　ガマン汁が溢れちまう！」
膣内射精までの暇つぶしのつもりで奉仕を受けていた男たちは、想像以上の快感に顔を歪め、こみ上げてくる放出欲求に耐えている。
「んぁぁ、はふ、んちゅ……じゅるるっ……あはぁん、チ■ポ硬い……熱くって、大好きぃぃ」
とにかく射精させれば妊娠の危険が遠のく……そう判断した少女は、両手に握った肉柱を弄び、亀頭に吸い付いて先汁をすすり飲む。
手コキの指使いも、亀頭を舐める舌の動きも、数ヶ月前まで処女だったとは思えぬ繊細で淫靡な技巧が秘められていて、男どものペニスは、さらに硬く熱く猛り勃った。
「子宮口が開いてきたぜ。このままザーメン注ぎ込んで、一発で孕ませてやるよ！」
連打で緩んだ子宮の入り口に、巨大な亀頭がグリグリと押しつけられ、射精寸前の切羽詰まった震えを伝えてくる。
「らめぇぇ、妊娠はいやらのぉ！　赤ちゃんできるのやらあぁぁぁぁ！」
アヘ顔を晒してしまいながらも、悲痛な声を上げて抗うゆきかぜ。
「そうはいかねぇ、こいつは孕ませイベントだからな、イクぜ！　子宮が弾けても知らねえぞ！」
邪悪な悦びに身を震わせながら、巨根男は膣内に欲望の煮詰め汁をぶちまけた。
びゅくびゅくびゅくんっ！　どぷどぷどぷずびゅるうううううう～ッ！
極太男根で埋め尽くされた胎内に、灼熱のスペルマが注がれる。
「うっひいいいいいいいいいいッ!!　子宮ッ！　全部子宮に入ってくりゅうぅぅぅ！」
密着した亀頭から噴出する精液は、子宮を水風船のように膨らませ、灼熱の粘液で満たす。
極太の肉凶器が射精の脈動を起こすたびに、ゆきかぜのスレンダーボディも、それ自体がペニスと化したかのようにビクビクと跳ね上がった。
「グへへへ、たーっぷり子宮に出してやったぜ。おっと、次の奴に替わらなきゃいけないか……」
じゅぷ……ずりゅるるる……じゅぽんっ！
ヴァギナを占拠していた巨根が、名残惜しげに引き抜かれた。
「く……あぁあ……はぁぁぁぁ……う……」
尻を突き上げて突っ伏したままおねだりするゆきかぜの膣口から、中出しザーメンがビュルビュルと噴出する。
「おいおい、大丈夫かよ？　ガバマンになっちまったんじゃねえのか？　おっ、おおおおッ！」
パックリと開ききったヴァギナを覗き込みながら愚痴った男が、驚きの声を上げる。
限界拡張されて伸びきっていた膣粘膜が、ニュルニュルと卑猥に蠢きながら、元の慎ましやかな姿に戻ってゆくのだ。
「あぁぁ……オ■ンコ……縮んでるぅ……」
身体全体が収縮してゆくような異様な感触に震え

るゆきかぜのヴァギナに、二本目のペニスが突きつけられる。
「一発目でダウンしてるんじゃねえよメス豚！」
「んぁぁぁん！」
硬く熱い剛直が容赦なくヴァギナを抉り、怒濤の注挿で膣壁を掻きむしる。
今度の男根は、サイズはそれ程でもなかったが、硬度と長さが凄まじい。
それもそのはず、男のペニスは、カニの甲羅のような甲殻に包まれていた。
「あっひいいいぃぃ！　しゅごいしゅごいしゅごいいいいーッ！　硬いッ！　硬いゴリゴリチ■ポしゅごいよぉぉ！」
まるで熱した金属棒で膣壁を掻きむしられているかのような激痛が、一瞬後には甘く蕩けるような愉悦に変じてゆきかぜを狂乱させる。
激しい抜き挿しのたびに、トゲと瘤に包まれたキチン質の凶器が、膣粘膜を掻きむしり、膣口をまくれ返らせ、子宮口を抉った。
「ド淫乱マゾ豚め！　さっきあんなにデカイのをブチ込まれていたのに、オレのチ■ポをキュウキュウ締めつけてきやがる」
甘美な拷問を続けながら、対魔忍に恨みを抱く男は凶悪な顔を快感に歪める。
「ド淫乱マ■コに種付けしてやるぜ！」
子宮口をこじ開けてねじ込まれた甲殻ペニスが力強く脈打ち、灼熱の絶頂ジェルを射出する。
「ひょわあぁぁぁぁぁ！　チ■ポ汁熱いっ！　熱いいいいぃ～ンンッ!!」
顔をだらしなく蕩けさせたゆきかぜは、ジンジンと疼く膣粘膜を引き絞って、子宮に溢れ返る子種汁の感触に酔いしれる。
「くぅ……ゆっ、ゆきかぜッ！」

人垣の向こうから聞こえてくる後輩対魔忍のあられもない叫び声に、凜子はクールに整った美貌を歪める。
「おいおい、ド貧乳の仲間を気にしてないで、しっかりケツ振れよ！」
不満げな声とともに、ピシャンッ！　と尻が叩かれた。
「あうっ！　わ、わかった……うっ、動けばいいんだろう……んっんっんっ……くふぅ……んっ」
後座位で男の剛直を呑み込まされた凜子は、ゆきかぜの上げる恥知らずな嬌声に心を痛めながら、男根への奉仕を開始する。
ずちゅ、くちゅ……にゅぷ……にゅぷ……ぬちゅ、ぬちゅ、じゅぷっ……。
あぐらをかいた男の上で、肉感的なヒップが重たげに上下し、呑み込んだ男根を媚粘膜で搾り上げ、扱き立てる。
幸いと言うべきか、凜子のヴァギナに挿入された勃起は、真性包茎で凹凸にも乏しく、長さも太さも貧弱なモノであった。これまで幾度も受け入れてきたリーアルの巨根や、極太ディルドウと比べると、あまりにも物足りない挿入感だ。
いつもの彼女なら、辛辣（しんらつ）な言葉で陵辱者の自尊心を折ってやるところだが、今日の相手は怒らせたら本気で殺されかねない。
（大丈夫だ……私はまだ理性が残っている。何とかして、ゆきかぜの負担を減らさねば……）
人垣の向こうから聞こえてくる苦悦の喘ぎ声を聞きながら、凜子は思う。
小柄で華奢なロリータボディが男どもの嗜虐心を煽るのか、ゆきかぜの方に半数以上の陵辱者が群がっている。
とはいえ、凜子の方も、決して楽な状況ではない。左右の爆乳は休む間もなくこね回され、両手には挿入の順番を待ちきれぬ男根が握られている。
凜々しくクールな顔にも悪臭を放つ亀頭が擦りつけられ、長い髪や、脇の下までもが自慰の道具として利用されていた。
（ゆきかぜ……任務のため陵辱を受け入れているのだろうが、あのままでは本当に責め殺されてしまう……ここは私が……）
「おっ、おい、お前たち……」
ゆきかぜを犯す順番待ちをしている男どもに、凜子は声をかける。
「何だよ!?　こっちが終わったら、おめえもガッツリ犯してやるから待ってろよ！」
「私の胸で、果ててみないか？　この乳房で……パイズリしてやるぞ！」
男の上で身体を揺らしながら、たわわなバストを強調するように胸をせり出して誘惑する。
「そうだな……どっちにしろ両方犯すんだ、おめえのデカパイでしばらく遊んでもらうぜ」
爆乳美少女の淫靡な誘いに乗った連中が、凜子の方にやってきた。
「そらよっ！　あっちのド貧乳じゃ、パイズリなんて絶対に無理だからな！」
ヴァギナに呑み込んでいるのよりもずっと見事な浅黒いペニスが、爆乳の狭間に突き挿（い）れられる。
「あ、あぁ……奴隷娼婦のパイズリで、チンポ汁を残らず搾り出してやる……」
脇を締め、肉槍を挟み込んだ凜子は、ヴァギナを突き上げられる反動を利用して、パイズリ奉仕を仕掛けた。しなやかに鍛え上げられた胸筋を、弾力たっぷりの皮下脂肪ときめ細かな乳肌で包み込んだ極上の爆乳が、猛り狂った牡器官をふんわりと包み込んで縦横無尽に揉み嬲る。
（これならば、私はさほど乱れずに、男どもを果てさせられるはず……一人でも多く、一回でも多く射

精させれば、それだけ楽になる）

冷静沈着な凜子は、打算を秘めた爆乳で、牡臭い勃起を扱き立てる。

「くおぉぉ！　こいつは気持ちいいパイズリだぜ！　さすがは元対魔忍の奴隷娼婦だ！」

「そっ、そうだろう？　まだまだ、もっともっと気持ちよくしてやる。あふ、はむ、ちゅぱちゅぱちゅぱ……れるっ、ぴちゃぴちゃぴちゃ……」

ニヤリと凄艶な笑みを浮かべた凜子は、乳肉の狭間から突き出された亀頭の先端を吸いついばみ、見せつけるように舌を突き出して舐め回す。

「いっ、いいぞ！　そっ、そのまま続けろ！」

鈴口のワレメをネットリと這う舌の心地良さに身を強ばらせながら、男は興奮に上ずった声で命令する。

「ああ、わかった……もう、先走りが溢れてきたな。あふ……じゅるっ、ずちゅるるるッ！」

わざと大きな吸い音を立てて先汁をすすり込みながら、上目遣いに男の顔を見上げた。

（この策、行けるぞ！）

効果を確信して内心ほくそ笑む凜子の周囲を、勃起の群れが取り囲む。

「お前たち、何だ？　すぐにパイズリしてやるから……おっ、おいっ、待てというのに！」

「たまんねぇ！　オレはおっぱいそのものをオ■ンコとして使わせてもらうぜ！」

「ヒヒヒッ、じゃあ、こっちも……」

クールな美女のエロチックな流し目に欲情を煽られた連中が、勃起をしゃくり上げさせながら群がってくる。

「えっ？　アッ！　あはぁんッ！」

ツンと尖り勃った勃起乳頭を押し込みながら、左右のバストに勃起が突き挿れられた。

たわわなバストは、勃起の中程までを柔肉の内側に呑み込み、極上の弾力で押し返して、男どもの乳辱ピストンに反撃する。

「こいつは十分乳マ■コとして使えるぜ。チンポの穴に乳首が入ってきて気持ちいい！」

「んぁ、あひんっ！　乳首が……あっ、熱イッ！　あはぁぁぅ……んっんっんっんぅぅぅッ！」

性感の塊として開発された乳球を、三本のペニスに責め立てられ、怜悧に整った対魔忍の顔が蕩けた。

（パイズリ奉仕ならと思ったが、乳首がいつも以上に感じてしまう!?　あぁ、震えている……）

亀頭のワレメに咥え込まれた左右の勃起乳首は、きついヴァギナに挿入された童貞ペニスのような歓喜に包まれ、今にも弾けそうに脈打っている。

ぐちゅ……ぐちゅ……ぐちゅ……ぐぷっ……くちゅるっ……じゅぷっ……。

「んっんっんっ……んはっ……くぅぅぅ……」

先走りの粘液が鳴る音を立てながら、弾力過剰な乳肉が突き嬲られると、凜子の口から悩ましげな呻きが漏れてしまう。

（しっ、しかし、まだ耐えられる。そっ、そうだ……もっと私に寄ってこい……そうすれば、ゆきかぜが少しは楽になる……）

「おい！　手が止まってるぞ！　しっかりやれ、クソメス豚ッ！」

手コキ奉仕を受けていた男が声を荒らげ、凜子の頬を平手打ちした。

「くぅ……わっ、わかった……」

打たれた頬の痛みで、胸の疼きがわずかに逸らされたことに小さな安堵を覚えながら、乳奴隷娼婦は、勃起を扱き上げる手指の蠢きに熱を込めた。

その手に握った刀で、幾多の敵を切り伏せ、斬鬼と恐れられた美少女対魔忍の繊細な指が、牡の悪臭をムンムンと立ちのぼらせる肉柱を愛撫する。

冷たく滑らかな指は、裏筋を撫で揉み、亀頭のワレメを圧迫しながら擦り上げて、クチュクチュという淫音を立てながら先汁を掻き回した。

「くぅぅ、本気になったらなかなか上手いじゃねえか。あの斬鬼に手コキ奉仕させられるなんて、夢にも思ってもみなかったぜ」

「冷たくってスベスベの指でシコシコされると、気持ちよすぎて腰が抜けちまいそうだ」

奉仕を受けた男どもが、脂ぎった顔を快感に歪ませながらあざけりの声をかけてくる。

「んっ……今の私は対魔忍ではない。奴隷娼婦だ……だから、チ■ポに最高の快楽を与えるのが仕事……どうだ、気持ちいいだろう？」

クールな口調で言いながら、凜子の白い指は、左右から突き出された勃起に絡みつき、緩急交えたストロークで扱き立てた。

（私の技巧で、何人もの男どもが感じている……こういう感覚、嫌いではない……な？）

男どもに寄ってたかって嬲られ、妊娠させられようとしている危機的状況にもかかわらず、凜子は不敵に微笑んでしまう。

「勝ち誇った顔してんじゃねえよメス豚！　パイズリとフェラも真面目にやれ！」

凜子の口元に浮かんだ笑みをめざとく見つけた男が、再び頬を叩く。

「んぁ！　あ、あぁ……はぷ、んちゅ、ちゅぱちゅぱちゅぱ……はむ……ッ！」

従順に頷いた奴隷娼婦は、パイズリの動きを早め、突き出た亀頭を大胆な舌使いで舐めしゃぶる。

（少し調子に乗りすぎたか？　ここは言われるがままに奉仕して、男たちを射精させる！）

先ほどのディルドウ訓練の延長線上と考えた凜子は、無心になって勃起を扱き、胸と唇も駆使して快感を送り込む。

「チ■ポ一本じゃ、淫乱メス豚は満足できねえだ

ろ？　そら、そのお口で綺麗にするんだ！」
「そうそう。チンポの味比べだぜ！」
悪臭を放つ勃起の群れが、凜子の鼻先に突きつけられた。
「く……揃いもそろって、臭くて汚いチ■ポばかりだな。私の口で綺麗にして、中身も残らず吸い取ってやる……んっ、くちゅ……」
吐き気を催しそうな悪臭を放つ亀頭に舌を這わせ、付着した汚れや体液を丹念に舐め取ってゆく。
「いいねぇ。それじゃあボクも、本気出して勃起させようかな……」
ヴァギナに挿入した男が、意味ありげな言葉を発した次の瞬間、挿入していることさえ忘れていた貧相な包茎ペニスが急激に勃起し始めた。
「くぁ！　なっ、なんだ……ッ⁉　いきなり、おっ、大きくッ⁉」
膣内の異変を悟った凜子が顔を引きつらせ、機械的に上下動させていた豊臀を緊張させる。
「フフフッ、ボクのチ■ポ、二段階勃起するんだよねぇ……ほおら、もうすぐ亀頭が出るよ」
太さと長さを倍以上に増した包茎ペニスがズルリと剥け返り、包皮の下に隠されていた亀頭冠が膣壁を圧迫しながら、ぐんぐん膨らんでゆく。
「くぁ、うあぁぁ！　あぎいいいぃ～ッ⁉」
まるでキノコの傘のように大きく拡がった亀頭に膣壁を抉られた凜子の絶叫が響き渡る。
（こっ、こんなに拡がるなんて……まるで、本物のキノコ……。引き裂かれるッ！）
膣内で直径十センチ以上のサイズに拡がった巨大亀頭の圧迫感に、さすがの凜子も悶絶寸前だ。
「ボクのこと、粗チンだってバカにしてただろう？　これからが本番だよ！」
男が腰を突き上げ、激しい注挿が開始された。
「くわぁぁぁっ！　イッ……ひっ……ひぎいぃぃぃっ！　抉られるウゥゥんんんーッ⁉」
凶悪に張り出した亀頭冠に、膣壁の柔襞をビリビリと掻き鳴らされた凜子は、冷静沈着な物腰をかなぐり捨てて狂乱してしまう。
男のペニスは、まさに傘が開ききった毒キノコの様相を呈していた。茎に当たる部分は、波の男根よりやや太い程度のサイズなのだが、亀頭だけが異様に大きく張り出している。
じゅぷりゅりゅっ……ぐぽっ、ぐぽっ、ぐぽっ、ぶぶぶりゅっ……びびびっ、ごぷぷぷぷぷっ！
ストロークのたびに、凜子のヴァギナが放屁のようなはしたない音を奏で、熱い湿り気を帯びた甘酸っぱい淫臭が、ムワッ！　と香り立つ。
勃起の胴と亀頭の段差があまりにも大きすぎるため、注挿によって膣内に送り込まれた空気が、卑猥な音を立てて掻き出されているのだ。
「ぎゃはははっ！　オ■ンコが屁こいてやがるぜ！　もっと恥ずかしい音を出しな！」
ぶびいいいいっ！　ぶぶぶぶぶぅ～ッ！　びぶぶぶぅぅっ……ぷぴぃぃぃ～ッ！
キノコ巨根の男は、腰使いを巧みにコントロールして、クールな対魔忍のヴァギナに、放屁音そっくりの恥音を奏でさせる。
「やぁぁぁッ！　やっ、やめろ……あひんっ！　こんなのは……あぁぁぁぁ……ッ！」
泣きそうな声を上げた凜子は、女体楽器の恥ずかしい演奏を止めさせようと身を捩るが、他の男どもに寄ってたかって動きを封じられた。
（あぁぁぁ、恥ずかしい音がしている……この音、ゆきかぜにも、みんなにも聞かれている……！）
見物人たちの野卑なヤジや口笛を圧して響き渡る放屁音は、冷静沈着な少女を羞恥の炎で炙る。
音だけではない。過剰なサイズの亀頭に掻きむしられた膣壁が灼熱の摩擦快感に包まれ、突き上げられた子宮が腹膜全体を圧迫して、息を呑むような快感を発生させた。
「あひあぁぁぁ……らっ、らめぇぇ……ッ！」
怒濤の勢いで押し寄せてくる悦波に、凜子の美貌が崩れた。パクパクと酸素不足の鯉のように喘ぐ口から、奴隷娼婦の刻印が浮き出た舌が突き出し、涎が溢れて形のいい顎を伝う。
「おらぁ、屁コキメス豚、アへっていないで、オレらにももっと気合い入れてご奉仕しろよ！」
全身にペニスが擦りつけられ、喘ぐ口にも牡臭い亀頭が容赦なく挿入される。
「んぐふむうぅぅ……ゴホッ……んふぅぅ……」
苦しげに呻きながらも、凜子は頬をすぼませて亀頭を吸い、両手に握った男根を扱き上げた。
「ボクのチ■ポでオマンコ掻きむしられて、まだ意識があるなんて、凄いね。さすがは元対魔忍の奴隷娼婦だ。そろそろイクよ？」
膣口から抜け落ちる寸前まで引き戻された亀頭が、さらに大きく膨らんだ。
「くぁぁぁ！　裂けるうぅぅ……んんん～ッ！」
限界を越えて拡張された股間で、恥骨がグキッ！　と嫌な軋み音を立てる。
びゅくんっ！　ぶびゅうぅぅ～っ！　びゅるるるるっ、どぷどぷどぷどぷびゅうぅぅぅぅ～っ！
栓を抜いたシャンパンのような勢いで射出されたザーメンが、膣内をドップリと満たす。
（終わった……のか？　早く抜いてくれ！）
中出しの屈辱的な快感に震えながら、凜子は奇怪なペニスが抜かれるのを待っている。
「これで終わりじゃないよ。まだ、とっておきの必殺技が残ってるんだ」
「ひっ、必殺技……だと⁉」
「そうさ。行くよぉ！」
ぐじゅっ……ずぷぅぅぅぅぅぅ～ッ⁉

引き戻されていたキノコペニスが、一気に押し込まれた。巨大亀頭によってピッチリと栓をされた膣内に溜まっていた子種汁が、残らず子宮内に送り込まれる。
「はひいいいいい――――ッ!! 子宮にッ! あぁぁぁ、奥に……奥に来るウゥゥ! 卵巣が、卵巣が弾けてしまうううぅッ!」
子宮を満たしただけでは飽きたらず、卵管に侵入し、卵巣内にまで流れ込んでくるスペルマの圧力に、凜子は白目を剥いて悶絶してしまう。
「ふぅ……久しぶりに、女を壊さずにフィニッシュできたよ」
満足げな声を上げた男のペニスがズポッ! と音を立てて膣口から引き抜かれた。
「ぐ……うぅぅ……はぁはぁはぁ……あぁぁ、くうぅぅ……ッ」
爆乳を弾ませ、苦しげに喘ぐ凜子の秘裂から、中出しザーメンがドロリと溢れ出す。
「自分で誘っておいて、まだ始まったばかりでこの様じゃ、先が思いやられるな……」
異様に黒ずんだペニスが、精液を噴きこぼす膣口にねじ込まれる。
「ひぃぃぃ! 冷たいッ! 凍るッ!」
汗に濡れまみれて紅潮していた美貌を蒼白にした凜子は、異様な挿入から逃れようと身を捩る。
氷柱を挿入されたかのような冷感に、絶頂直後のヴァギナがキュンッ! と引きすぼめられ、全身が悪寒に震え出した。
「オレのチ■ポは、氷と同じ温度なんだ。オレたち全員、チンポだけで対魔忍に復讐するために、必殺技を身につけてきたんだぜ」
氷温ペニスでGスポットを擦り責めながら、二番手の男は凶悪な笑みを浮かべる。
「そんな……あぁぁ、ダメ……だ。壊れてしまう……いやぁ、いやあぁぁぁぁ〜ッ!!」
「壊れたら、治療してまた犯してやるよッ!」
クールな美貌を恐怖に歪めて絶叫する凜子のヴァギナに、凶悪な技を秘めた勃起が容赦なく突き立てられる。
「おい、体位を変えろよ、ケツの穴を使わないなんて勿体ねえだろ!」
悶える身体が引き起こされ、サンドイッチファックの体勢に移行する。
「おお、美しいねぇ。クールな美少女は、肛門までクールでカッコイイじゃねえか」
敏感そうな小皺を引き結び、ヒクヒクともの欲しげな収縮を繰り返す薄紅色のアヌスが、いやらしい手つきで撫で回される。
「んほおおぉぅ! 尻は……アヌスは……まっ、待てぇぇぇ!」
「おやおや、斬鬼の異名で恐れられた対魔忍さんは、ケツマ■コが弱点か? それじゃあ、たっぷりと責め立ててやらねえとなぁ!」
鋼鉄のように強ばった亀頭が、もう一つの濡れ穴にねじ込まれた。
「くうわぁぁぁぁぁ〜んんんッ!!」
二本挿しにされた女体を震わせながら、凜子は壮絶なアクメに舞い上がる。
「アヌスにブチ込んだだけでイキやがった。見ろよ、このだらしねぇアヘ顔、対魔忍も、こうなっちゃおしまいだな」
憎悪と敵意を淫欲に変換された男どもは、情け容赦のない陵辱で、奴隷娼婦に堕ちた二人の対魔忍を犯し抜く。

数時間が過ぎた……。
全員に中出しを決められ、穴という穴を犯されたゆきかぜと凜子は、いまだに陵辱されている。

「ゆきかぜちゃん、視線こっちにおくれよ。いいアヘ顔だねぇ、ピースサインよろしくッ!」
「はへぇぇ……ぴっ……ぴいしゅぅ……」
後座位でアナルを貫かれたゆきかぜは、媚びた笑みを浮かべながら、ザーメンまみれの両手でピースサインを決める。卑猥に収縮する秘裂の奥からは、大量に注ぎ込まれたザーメンがドロドロと溢れ出し、舞台へと滴り落ちていた。
「ほらぁ、もっとケツマ■コ締めろよメス豚!」
凜子のアヌスに挿入した男が、不満げな声を上げて尻たぶを平手打ちする。
「あひぃぃ! もっ、もう……力がはいりゃないれすぅぅ……」
後背位の体勢でスパンキングを受けながら、凜子は息も絶え絶えの声を上げた。
延べ百本近いペニスをねじ込まれて徹底的に犯し抜かれた括約筋は、すっかり緩んでポッカリと開ききり、男根を締めつける力を失っていた。
「それでも奴隷娼婦かよ! 情けねえなぁ。ほら、腐れケツマ■コをキュウキュウ絞れよ!」
パーンッ! パシイインッ!ビシャァァン!
肉感たっぷりな尻たぶが、力いっぱい連打された。白い柔肉に、赤い手形が幾つも刻印され、熟れた桃のように染まった尻が、みるみるうちに腫れ上がってゆく。
「んひあぁぁ、きもひ、いぃ……もっと……もっと叩いてぇ……」
気位の高い美少女剣士とは思えぬ蕩けた声を上げた凜子は、紅色に叩き腫らされた尻をくねらせてスパンキングをおねだりする。
「皆さん、恨みを存分に晴らしていただけましたかな?」
頃合いと見たリーアルが、舞台に上がってきた。
「復讐完了ってわけじゃねえが、奴隷娼婦のテクは、

紫乃 ～退魔剣士～

第五話

漫画 COMIC NO.ゴメス

妖気に満ちた夜の街を俯瞰するのは……

遥か先から強い悪霊の意志を感じる…

NO.ゴメス最新刊
グラビティ・ダイ
好評発売中!

あッ♥
！
はぁんッ
あんッ
やっぱり…お師匠様の言う通り私には無理だったのか…？
はぁ
はぁ
はぁ
はぁッ
神人…
ククク…さぁ今宵が最後だ…よぉく見ておくがよい

使い魔の子種は少々特殊なものでな
子宮に卵を植え付け直にでも産卵出来るぞ
委員長…ッ
はぁん♥
あッ
まずはこっちの女が産卵の前座を見せてくれるぞ…
はぁッ
あんッ
お腹の中ぁあッ種付けされてぇえッ♥
射精てるッ♥
まッ…♥
またぁ♥
はぁんッ♥

ああッ♥おっぱい巻き付いて…！
乳首いいッダメぇえぇ♥
お乳ッ♥
吹き出ちゃ…ッ♥
私の身体ぁ…変になっちゃったのォ…♥
搾らなッ…あッはぁあ♥出ッ…
はぁ♥
おぉお おっぱいッいいいいッ♥♥
しッ…子宮の方もォ…♥
みるくぅぅッとまんないいい♥
ぐる…じ…ぃ
おッ…おひぃッ♥

出ちゃ…ううう
うううんッ!!
おほぉおぉ
おぉッ♥出っ…
た…卵ぉおおッ
イクッウゥ♥
イッちゃうううう♥

ハハハ…気を失ってしまったか
ひッ
次は貴様の番だ天火(あまほ)
ああ…
いいんちょ…
いっいやあぁッ
こ…こんな…
淫魔と……する…なんて…
やっ
あんッ

んッ
くッ
ゆちッ
絡み…
付いて…ひぅ…
はぁあッ…
引っ張っちゃ…
あんッ
きゅーー
ひゃぁあぁんッ
そッそこはぁ…
こしゅこしゅしちゃ
だめぇえ…
ぬりゅ
ぬちゃ
んん…
ぐッ…
そう拒絶するな
貴様には更に
イイ物をくれてやろう

あ
!?
な…
なんなのだ
この液体は…
ひいッ…!?
あ
生温かくて
…んッ
ねばねば
するのだ…
身体が…熱い…
アソコが疼く…!?
あ

ねえねえ知ってる？あの話

なにになにHな話？

ちゲーよ怖い話！都市伝説

口裂け女とかの？

地獄行きのバスとかー人面タクシーとかー

なんかー2組の奴が襲われてー

名前は――カシマさん

それ幽霊ジャン

トンテケテン――だっけ？

違くね？

黒い女に助けられたって

違う違うなんか新しい都市伝説

来たら助けてくれるの

ポポ

怪談の陰には不思議あり――

それでさ学校（ウチ）にもあるらしいじゃん

七不思議

4階奥の開かずの廊下――

学校のヒワイなうわさ カシマさんがきた!!

漫画／ぱふぇ

最新単行本『堕天使たちの輪舞曲』好評発売中！

そんなワケでやってきました肝試し！
開かずの廊下こと旧理科室
って…開くんじゃん
あのねー君たち
鹿島一人じゃ心細いだろ
ボディガードさ
ここはただの倉庫よ？
先生に教材置いてきてって頼まれただけなんだから
昔生徒が消える事件があってさ
しかしココ…なんで木造？
カビ臭ぇなぁ
先生が生徒をさらってはなんて解剖してたんだとよ
足手まといなんじゃがのう…
その怨念を鎮めるため当時のままにして…
やめようよ今そんな話

!!
ヒ…
なんだ
模型か…
お約束
お約束♪
なーんだ
やっぱり何も
出ないじゃん
そりゃ
そーだ
ははははは
ぬる
え…
ドガ
な…ッ
扉が!!
おいっ
アレ!?

あわわわわ
ふる。
ヒ…ィ
化け…物!?
そんな!
何だよ…
何だ…こ
れ…
ギャアアッ
ひ…
ひぃッ
出たっ
お化け!!
あわわ
あッあああ

畏れるな
男子たる者が
みっともない

鳴き声に
惑わされて
おるだけぞ

へ…

ま 退魔師
鹿島 命(みこと)が
来たからには
安心せい

鹿島!?
さん…

妖のよう出る
街じゃのう

さあお姿を
現しくだされ

妖怪
大蝦蟇(おおがま)様

ペコ

我が使命は
御霊を鎮める
ことなり

かような場に
出でご立腹は
尤もなれど

どうか
我が身を
以て
慰めとして
頂きたい

な…
カエル?

失礼を
言うでない!

その意気や良しとす 汝の肉で余を慰めてみせよ
ちょっ…お待ち下さい！
きゃ!? あぁぁっ
鹿島さんッッ!!
たわけ！ジロジロ見るでない
これから行うは黄泉帰りの儀と言うてな
妖のしたいようにさせて満足させお帰り頂く神聖な物じゃ
ああっごめんよ
落ち着かれよ大蝦蟇様
乱暴せずとも拒みませぬ妾の奉仕をお愉しみあれ

ん…♥
ほほう 大福の如き 柔らかさ 手の中で 躍りよる
は…う♥
ああっ
お…褒めに あずか…り 恐縮ですぅ
は…ぁ
は…ぁ♥
も…うっ 奉仕すると 言うたのに
乳房に ご執心とは とんだエロ 蛙様じゃ
は…ぁ♥
されるより する方が お好みか
とは言え 好きにさせる しかないの
良き揉み心地 ゆえにこってり 嬲るぞよ
すご…く 熱い…
ガマの油の …せい？
ひゃうん♥
あぁ…
あ…ッ
ん♥

はぁ…
ん…♡
はぅう♥
キッ…いっ
いいいっ♥
良き声じゃ
もっと鳴け
締め…あげ
ないで…ぇ
おっぱいぃ
キッ…♥
あ♥ぁ♥
感じ…
す…ぎ
雄を誘う
淫らな歌ぞ
ッ…
ん…ん♡

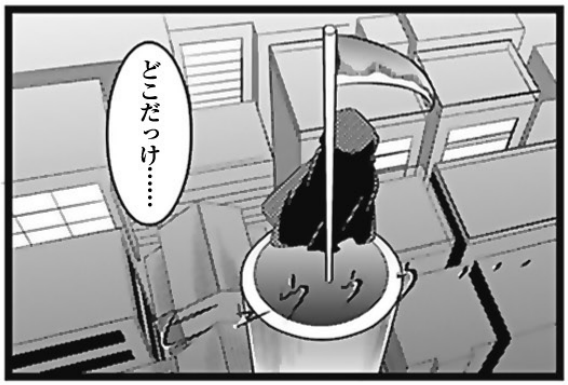
人の子も見惚れておるわ
いや その…
カ あ あ っ
は…ッ 恥ずか… 違っ…! なりませぬ
み見るでないっ! だめえっ
黄泉帰りの儀は見世物ではございませぬ
かような戯れは…
あ♡ あぁ…ッ
あ あ あ あ♡
むぎゅ
ぐちゅ
むぎゅ

ひぃう♥
はッ♥
ああぁ♥
痛…ぁ♥
んんっ
あ…♥
ぱちゅん
ぱちゅん
ぱちゅん

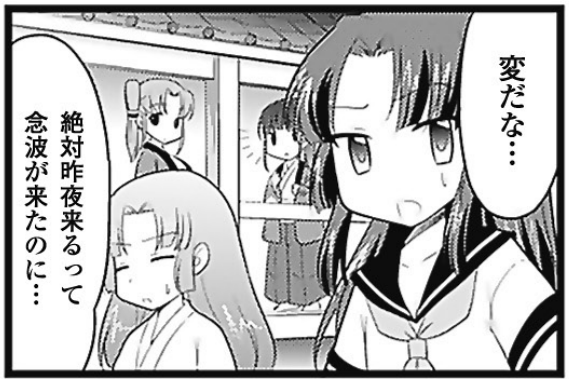
ヒクッ
絶頂されるなん…て♥
は
は―
あんっ
く…ふ♥ おっぱい…だけ…でぇ
ぱぁ
恥じらいが増して汝の淫気も濃うなったぞ
そんなのでされたら…
じつに美味である
にゅる
にゅる
ぶる
もっと誘って大蝦蟇様のなぎりたいこと全てを
ピク
ピク
吐き出してもらわなければ――
ビッ
ぱぁっ
いぁぁぁぁぁぁ♥
今…イッたばかり…で敏感になっている…のにっ

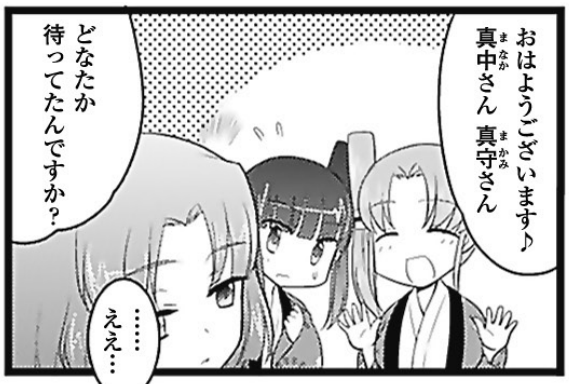
怨霊退散!!
ふたこ巫女 七巻
異形の者 見参!!
愉快な巫女のもとに新たな来訪者が―
漫画(COMIC)／嘉納(かのう)あいら

謎の人影

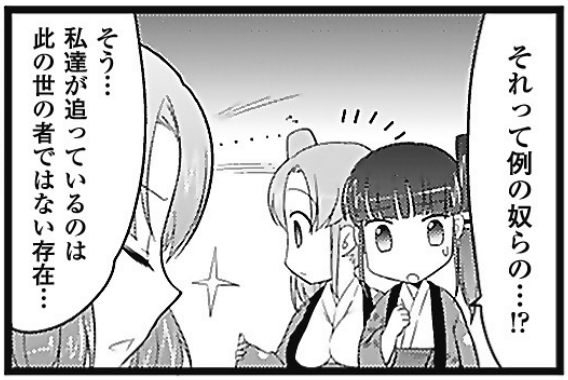


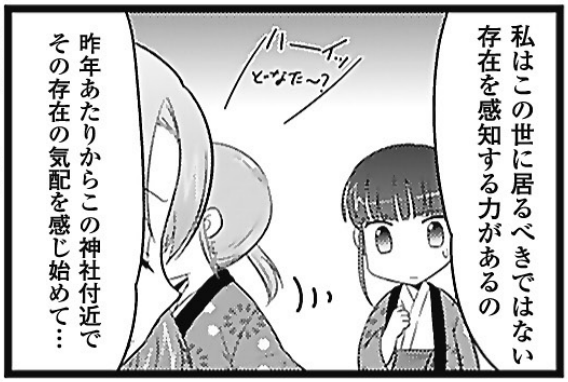
待ち人来たらず

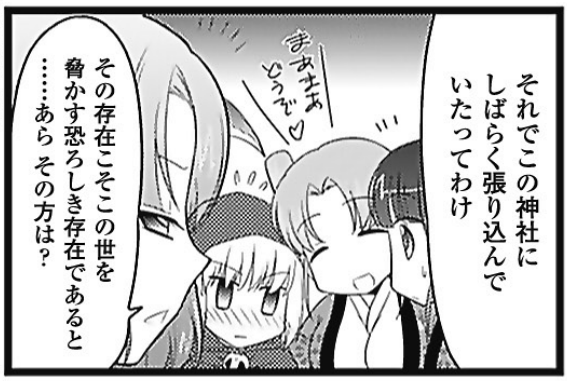


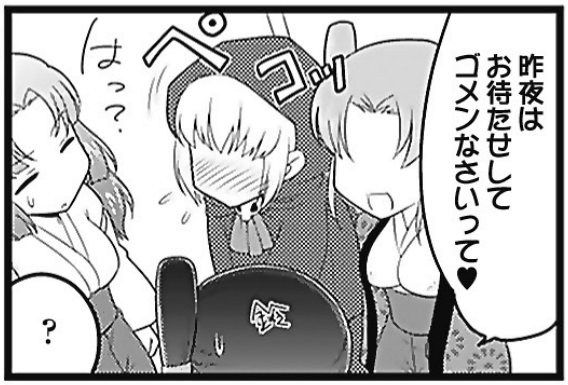


来客…?









如月珠音（きさらぎたまね）
如月神社の双子巫女の姉。おっとり巨乳で、男の霊に憑かれやすい。

如月鈴音（すずね）
如月神社の双子巫女の妹。霊力は弱いがしっかり者の常識人。

真中（まなか）
如月神社に押しかけて居候している17歳。珠音の中学時代の同級生。

真守（まかみ）
真中の姉。海外からやってきた謎多き女性。催眠術を使う。

選択肢で結末が変わる分岐小説が久々の登場!!

女教師に扮した美女淫魔を襲う退魔師の罠!

淫魔教師 シエル・ブランフォード

小説 NOVEL／新居佑（あらいゆう）
挿絵 ILLUSTRATION／綾枷ちよこ（あやかせ）

ご注意 この小説には分岐が設けられています。シーンごとに1～5の番号がふられているので、シーンの小説本文末尾にある指示に従って、指定された番号のシーンをお読みください。

シーン1

近隣地域に名を馳せる進学校である私立小鳥遊（たかなし）学園。放課後、その校舎の外れに位置する空き教室に、学園の女教師……情欲を統べる淫魔の頂点、シエル・ブランフォードはいた。

スーツを着た女教師という偽りの姿を脱ぎ捨て、妖しい大人の色気に溢れた豊満なボディを誇る淫魔の本性を目の前の少年に曝け出す。

夜が始まる時間の中でシエルは、緊張した面持ちと、頬を染めた愛くるしい表情をこちらに向けた新入生の唇に、情熱のルージュをひいた、ふくよかな唇を深く重ねる。

「んちゅ、ちゅぅぅっ。ぁはぁ……。おいしいわ、初心な美少年の唇の味」

「あぁ、シエル先生……僕もです。すごく……気持ちいいです」

妖艶な女教師と美貌の男子生徒との禁断の口付けに、二人の頬に紅がさし、少年のかわいらしい瞳とシエルの切れ長の瞳が性的な輝きに潤っていく。

「素直な子ね。もっと気持ちよくしてあげる。誘惑の魔力なんかじゃ物足りないくらい、あなたを快楽の虜にしてあげるわ」

隠す素振りも見せずに、ムンムンとした魔性の色香を少年に振りまくシエル。そのたおやかな指先が、制服姿の少年の股間へと伸び、すでにきつく勃起した若い逸物を、制服のズボンの縛めから解き放とうと、チャックにかけた瞬間……。

「ぐふふ、そこまでにしてもらおうか、淫魔シエル・ブランフォード！」

魔力で結界を張ったはずの扉をドンッと蹴破り現れたのは、二十代半ばほどの神父だった。

だがその外見と醸し出す雰囲気は、神聖なものからは程遠く、生理的嫌悪感を抱かずにはいられない、ギトギトの脂身を纏う、腹の出た醜悪な豚そのものだ。

「世に名高い魔界七大貴族の一位、淫魔ブランフォード家の現当主……ぐひひ、神のお導きに従って、僕ゲドウスが君を改心させてあげるよ」

魔族である淫魔が、神を信奉する教会に嫌悪されるのは常のこと。しかも魔族きってのエリート一族。その当主に若くしてなったシエルほどの上級悪魔となれば、その命の価値は教会側にとって計り知れないほど重いものだ。

いわば天敵に、生徒との情事を邪魔されたというのに、むしろシエルはさらに濃い淫欲を切れ長の瞳に漂わせた。

「改心ですって？　神様がつれないなら、淫魔の私が、あなたを思いきりヌイてあげてもいいのよ？」

「余裕だねぇ。まぁいいよ。僕は君を捕まえるだけだからさぁっ！」

ゲドウスの呼び声に従って召喚された、低俗で不気味な生物たちが、少年を逃がしたシエルに、一斉に襲いかかる。

「あらあら、気の早い神父さんね。そんなに焦らなくても……っっ！」

色欲に潤んでいたシエルの瞳が、一瞬にして殺意を帯びた鋭いものへと変わる。両手の爪たちがまるで鋭利な剣先のように伸びて固まり、迫る化け物たちへと振りぬかれる。

「……しっかり相手してあげるわよ♪」

ザヴッッ！　ドシュゥゥウッッ!!

夕闇の教室に幾筋もの閃光が煌めく。数瞬後、無残に身体を八つ裂きにされた低級な怪物たちの死骸がおびただしい量の血しぶきをあげる。

「ふふ、行為の前の運動にしては簡単すぎるわね。早くしましょう。私、キモデブのチンポも嫌いじゃないわよ」

指の爪先についた返り血を、いやらしそうにペロリと舐める。地位だけでなく、戦闘力も魔界屈指であるシエルは、簡単すぎる殺戮で興奮しきった熟れた身体を持て余すように、クネクネと捻らせ、ゲドウスに見せつけた。

「いいのかな舐めちゃって。僕の特製……魔族墜としの媚薬をね！」

ゲドウスが何事か呪文を口にすると、突然シエルの身体にたっぷりかかった赤い返り血が、無色透明な液体……神の力を宿した聖水へと変化する。

気味の悪い粘ついた聖水がボリューム満点の艶やかな身体に、まるで意志があるかのように絡みつき、柔らかい媚肉の、表面だけでなく内側まで、カッと火がついたように熱くなる。

「あ……っ!!　ふぅっ、んんんっっ！　媚薬、ですってぇ？　あふっ、んぁぁあっ……身体があ、熱いわっ。くふぅぅんんっ!!」

きついエロティックなボンデージ衣装を食いこませたムッチリした女体が、恥辱の官能の炎に炙られて、きつく悶える。

纏っていた殺気が急激に衰え、膝がガクリと床に崩れ落ちる。

より濃厚さを増した発情牝のフェロモンが、美貌の魔界貴族を自分でも抑えきれない性欲のマグマへと躍らせる。

「はぁはぁ、聖水ですって？　普通じゃない。身体の奥から疼くの。くっ、淫魔に媚薬なんて……悔しいのにっ。くぅ、あぁ……あはぁっ」

恥ずかしくて、悔しくてたまらないのに、仇敵の前で犬のように舌を垂らしてしまう。若くして最高位の淫魔となった高貴なプライドが溶けそうになり、官能に震える媚薬まみれの身体の欲求を抑えることができない。

「ぶほほ、当主様がこれじゃ、ブランフォード家も過去の名声だけなんだねぇ。それじゃ屈服の証に、淫魔らしくしゃぶってもらおうか？　僕のこのチンポ様をね」

✣快楽に負けて、チンポをしゃぶる……【シーン2】
✣家の名誉のために、戦う……【シーン3】

シーン2

目の前に突き出された、猛々しく勃起した肉ペニスから香る牡の淫らな誘惑に、シエルに流れる淫魔の欲求が屈してしまう。

魔界貴族とは思えない恥辱のガニ股姿勢を自らとり、メロンほどもある弾力たっぷりな二つの爆乳で、ゲドウスの熱い肉棒をしっかりと根元から挟みこむ。

（あぁっ、この臭い……まさかお風呂に何日も入ってないの!? くぅ、敵のなのに口が勝手に……んちゅっ、じゅるぅぅうっ！）

「ぐふふ、僕の催淫聖水にかかれば、ブランフォードの当主様でもイチコロだねぇ。淫魔の女王なんだろ？ もっとエロくしゃぶってみせてよ」

こちらより圧倒的に低身長なのに、居丈高な態度をさらに強めるゲドウス。

だがそんな屈辱的な台詞にも、発情しきった肉体は理性を振りきり、淫魔の卓越した性戯でご奉仕してしまう。

「くっ、媚薬さえなければ、誰があなたのなんか……はぁあんむぅっ、おぉんっ。チ、チンポかりゃい、気持ちわりゅいろに……んじゅるぅっ!!」

両手で爆乳を揺さぶって、男の肉茎をタプンタプンとしごいていく。乳房にたっぷりつまった牝脂肪の柔らかさに、ビキビキに勃起した牡棒の固さが熱く伝わってくる。

乳房に刺激されていない、皮の剥けた亀頭部分を、妖艶な唇をいやらしく開けて、口内へと案内する。

「じゅるじゅるぅっ、んふぅうんっ……ちろちろ……。あぁ、すごいぃ。ぐぽぐぽっっ！ んんっ、じゅずるるるぅぅぅっ！ んぶぅぅうっ、じゅるるぅうっ!!」

「う、うぉおっ。き、気持ちいいよ。さすがは淫魔……エロすぎるバキュームフェラだね」

膝を曲げたガニ股姿勢のまま、唇をすぼめて、男の逸物を思いきり吸いつくす。いやらしい水音を立てまくりながら、爆乳でしっかりと挟みこんだ肉棒を舌と唇で徹底的に刺激し、敵である異端審問官の牡欲を昂らせていく。

「じゅぶるっ、んぐぷぅっ！ くっ、こんな情けないチ■ポなのに……あはぁっ、オ■ンコがっ。ちゅじゅるっ、くちゅぅっ！ オマンコ、あぁ、欲しがってる……ぉぉぉっ、キモデブの勃起チ■ポぉぉんっ」

いやらしい排便姿勢の下半身、そこに花開いた牝の園は、もう滲み出す愛液でグチョグチョに湿っていた。

牝のワレメから溢れ出す淫魔の本気汁は、トロトロと淫靡なてかりを見せたまま、床にじっとりとした発情の水溜まりを作っている。

「無様だねぇ。でも僕は口で満足したいんだ。我慢癖のない淫乱当主様には、こいつがお似合いだよねぇっ！」

ゲドウスが呪文を唱えると、シエルがガニ股姿勢をとった床に、人間の腕ほどもある巨大なバイブが現れる。

「マ■コに太いのが欲しいんだろう？ 用意してあげたよ。さぁ、自分で呑みこむんだ。くくく……」

屈辱極まる命令に、淫魔としてのプライドと、聖水で強制発情させられた肉欲が激しくぶつかりあう。

「このっ……くっ、ダメよぉ、我慢できないわ。しゃぶってるだけじゃ満足できないっ。んほぉおっ。ぶっといバイブ、オ■ンコほしいっっ!!」

自らの意志で膝をついて、ピンク色の極太バイブを牝穴でくわえこむ。ジュブゥゥッ！ と淫らな牝の飛沫が床に飛び散り、背筋を快楽の電流が駆け上る。

「ふぉおおっっ！ イクゥゥッ！ ぉおっ、こんな屈辱絶頂ぉ……あぁ、止まらないの。ズボズボ腰動かすの止められないのよぉぉっ!!」

牝穴の官能に押され、妖しくヒクつく肛門へと、自身のピンッと張り詰めた尻尾を突き入れる。

ギュポッッ！ ギチュチュッッ!! ヌポォォオッッ!!

「お尻ぃぃん……っっ！ こんな奴に見せたくないのに……気持ち、イイっ！ んほぉっ、二穴ファックオナニー、晒しちゃぅぅうっ!!」

「おおっ、さっきより……すごいっっ！ くくっ、この盛りのついた変態淫魔めっ！ そら、もっと悶えろっ、プライドも全部捨てて、快楽に飲まれてしまえっ！」

発情しきったシエルが醸し出す甘美な牝フェロモンにまかれたゲドウスが、自ら腰を前後に振りたくり始める。

シエルも青い瞳に情欲の炎を宿らせ、一心不乱にペニスにむしゃぶりついて腰を振り、尻穴に突き入れた尻尾を激しく前後に揺さぶった。

「んぉぉっ、誇り高き淫魔の当主である私が……くふぅっ、キモデブのチ■ポなんかに……んじゅぶぅ、じゅずるぅぅぅうっ！ イ、イクわ……はへぇあっ、もうイキそうなのよぉぉっ!!」

張り詰めた肉感ボディが、ビクビクと痙攣し始める。腰の動きや唇の吸いつきがより野生的で淫らなものに変わっていき、全身からネットリとした汗が噴出し続ける。

「うぉおっ、僕もイクぞ。出すぞシエル・ブランフォードっ！ くくくっ、君はもう僕の性奴隷だ。誓約のザーメンを受け取るんだぁぁあっっ!!」

牡棒の先端がブクリっと膨らみ、射精管から熱い白濁が迫ってくる。

「んじゅぐっ、おおんっ！ ザーメンくるわっ。勃起チ■ポが膨れてるっ！ じゅるずぶっ、んじゅるぅっ！ んほぉっ、精液っ、ザーメンんんっっ!!」

✣ザーメンを口で飲みこむ……【シーン4】
✣ザーメンを身体中にぶっかけてもらう……【シーン5】

シーン3

「くくく、魔界貴族のブランフォード家といっても大したことないねぇ。さっさとしゃぶってくれないかなぁ。ねぇ、当主様？」

「うくっ、はぁはぁ……わ、わかったわ。もう我慢できないのよ。あなたの、あぁ……異端審問官のぉっ――」

突き出されたそそり立つ肉棒に、頬を赤らめた美貌……その艶やかな唇を近づけていく。

身体が熱く火照って、もうどうにも抑えられない。ゴクリといやらしく唾を飲みこんで、切れ長の青い瞳で、脂ぎった男の顔を見つめた。

「――あなたの命が欲しくて、たまらないわぁっ♪」

ギンッッ！　と右手の爪を鋭く伸ばし、男の喉下へと必殺の突きを繰り出す。

「ふふ、当主たる私の前で人間ふぜいがブランフォードの名を貶すなんて。家の名誉は私にとって命同然なの。媚薬程度で屈服するほど当主様は軽くないのよ……っっ!!」

髪と同じ深紅に染まった膨大な魔力の奔流が、突き出した五本の爪へと集約される。竜族の鱗すら易々と貫く一撃だ。人間程度が防げる道理はない。

「……バカなのはどっちかな？　〝淫魔ごとき〟が神の使いの僕に楯突くなんて、生意気でお転婆にもほどがあるよ」

魔力をこめた一閃が男の喉を貫く一歩手前で、突き出されたシエルの右手がピタリと止まる。

「なっ、なんなの……!?　くっ、こいつら……ぁっ！」

右腕が動かしたくても動かせない。右腕だけではない。いまだに跪いたままの魅惑的な女体に絡みついた無数の淫蟲たちによって、最強を誇る淫魔の女体が、ギッチリと搦めとられている。

「ぐふふっ、あの程度の媚薬で淫魔の当主様が抑えきれるなんて思ってないよ。けどそのワームたちはどうかな？見た目通り、性欲と繁殖欲だけは強くてね。相手が強い魔力を秘めていればいるほど、貪欲に対象を孕ませようとするんだ」

まるでペニスの形を模したかのような触手ワームたちは、単純な本能に強く埋めこまれた歪んだ牡欲を最大限に発揮させ、艶かしいシルエットを誇る淫魔の身体を、ギチギチときつく締めつける。

同時に、媚薬によって完全に熟しきった牝の果実と花びらに、亀頭そっくりなヌメついた身体の先端を、グリグリと擦りつけ始めた。

「は、孕ませるですって!?　この私が下等な触手なんかに好き勝手……ああっ、くぅっ……そん、なぁあっっ！」

どれだけ激しく身体をもがこうと、どんなに魔力を高めようとも、底なしの牡欲に取りつかれた赤黒い触手たちは、シエルのムッチリした柔肌に生暖かく固い牡の肌を重ねてくる。

「マゾのフリなんて拙い演技ご苦労様……。これからはそんなことしなくても、ずぅっとこいつらが犯してくれるよ。ブランフォード家の跡取りをたくさん産ませてくれるしね。ぶふふふっ」

学園の女教師という、若い男子を漁るにはもってこいの舞台で、好きなだけ女王様でいられた時間は、思い返せばすでに数ヶ月も前のことになっていた。

「ま、たぁ……っ。す、少しくらい休ませなさい、よぉ……ひぎぃいっ！突っこまれたっ。また新しい触手チ■ポ……オ■ンコにぃぃいっ!!」

そこは文字通り何千何万の触手淫蟲が構成する、肉壁に覆われた牝豚の飼育室……苗床だった。

最上級の淫魔であるシエルの放つ濃い牝ホルモンによって興奮した触手たちは、青い血管を浮き立たせ、ギンギンに固くなった自らの勃起肉体を、牝豚であるシエルの生涯の寝室に用意していた。

もう何ヶ月もの間、特濃の媚薬をかがされ、直接血管にも注入され続けてきた身体は、いかなる刺激でも無理やり発情させられるという、淫魔にとって屈辱ともいえるものへと変態改造させられている。

「こいつらっ。んぁぁっ……こんなに悔しいのに……あっはぁあっ!!」

両脚を淫らに開ききり、両腕も拘束された、まるで露出狂のストリップ嬢のような格好を強いられたまま、絶えることのない快感の荒波へと沈めさせられる。

どんなに誇りを傷つけられても、もう魔力はすべて吸い取られ、代わりに、触手たちが定期的にもたらすザーメン食によって、無理やり生かされているという、たまらない屈辱を味わわされている。

「く、くるなぁっ！　おぐぶぅううっ！　んぐんぐぅうっ、ザーメンんんっ。くるっ、こんなことしゃれてるろに……んぐんごぉっ、触手じゃーめん食事がおいしいなんてぇっ！」

昼も夜もわからなくなりそうなこの異様な空間で、シエルには絶頂を迎えるタイミングを選ぶ権利すらない。

かつて魔界に名を馳せたブランフォードの若き当主は、性欲のみに特化した低俗触手生物によって、身も心も完全に支配されていた。

「くく、これがあの淫魔の女王か？随分と惨めな姿になったものだなぁ」

「あんな触手たちに嬲られて……あはは、思いきり悦んじゃってるわよ？同じ女として恥ずかしいわ」

「ぶふふ、楽しんでいただけて光栄です。このゲドウス、真摯に神にお仕えしてきた甲斐がありました」

情欲と催淫霧でピンク色に霞んだ視界の先には、青を基調とした教会の礼服に身を包んだ偉そうな人間たちと、

著者近況　思い返してみれば、本誌の方で読みきりを執筆させていただくのは、デビュー作以来の新居佑です。綾枷ちよこさんの描くエロい淫魔先生……犯されたいと思いつつ、結局は牝奴隷にしたいと感じる自分は、やっぱりSのようです。

自分をこんな目に遭わせた元凶、異端審問官ゲドウスの姿があった。
「わ、笑うんじゃないわよっ！　お、ひぃっ……教会のクズどもめ、か、必ず殺すわ。んぁあっ！　ゲドウスぅっ、お前はラクに殺さない。みすぼらしいチンポを切り刻んで……くひぁああっ!!」
ジュブッッ、ズブゥゥウッッ!!
いまだに失われていない魔界貴族としてのプライドが、憎むべき相手たちの目の前で、快感という甘すぎる光に飲みこまれていく。
「何ヶ月も犯されているというのに、えらく艶のいい肉ビラですなぁ」
「見てみなさい。尻の穴が腕くらいある触手を呑みこんで、グポグポ伸びたり縮んだりしているぞ」
「淫魔にふさわしい惨めな格好ね。あんな化け物に発情して、本気汁垂れ流しまくってるわ」
「言うなぁ……。くひぃいっ。ブランフォード家当主を舐めないこと……ぉおおんっ、んぎひぃいいっ！」
この場の誰よりも美しく色気に溢れた美貌が、触手たちによって味わわされる屈辱の快感で悶え啼く。
魔界の名家、その当主たる自分が、教会の人間などに弱みを見せるわけにはいかない。
なにより淫魔であるのに、快感に狂わせられるなどあってはならない。なのに。
（お、溺れてはダメぇぇ。こんな奴らに、この私がオモチャにされるなんてこと……絶対に許されないわ。ああっっ、許され……くほぉおおっ！）
必死の我慢も、無数に蠢く発情触手の際限のない突きこみ、責めに、簡単に突き崩されてしまう。
カチカチと歯を悔しそうに鳴らしてみても、極太の触手亀頭が子宮の入り口をゴリュンッ！　と一撃するだけで、脳天を貫くほどの甘美感が全身を駆け巡る。
尻穴、クリトリス、乳房、脇の下、唇、喉……。触手の巣に投げこまれた一匹の牝餌に成り下がった淫魔の当主の媚肉は、あらゆる屈辱を、官能という抗えない刺激に強制変換させられてしまう。
「んぉおおっ、おぉおっ、おひぃいっ！　触手、ザーメンんっ、くるっ！　子宮が焼けるぅっ。頭が蕩けるぅぅっ！　あひっ、くぅっ、ぉおおおお!!」
ビクビクと狂ったように、自分の身体が跳ねる様を、魔性のピンク色に支配された景色の中で感じてしまう。
自慢の紅髪が絶頂のたびに大きく揺れ、淫魔が無様に感じるところを思いきり見せつけてしまう。
「ぶひひ、シエル・ブランフォード。そろそろ時間じゃないかな？　お腹の中。騒がしくなってきたでしょう？」
ゲドウスの声に、自らのパンパンに膨れきった妊婦腹を見やる。
たとえ高貴な魔族であろうとも妊娠させる触手淫蟲の中出し精液は、シエルの子宮に何十回目かの恥辱受精を成功させていた。
低俗淫蟲の卵がさらなる催淫粘液を子宮に直接塗りこんで、有能な母体に、淫辱の産卵快楽を植えつける。
「くぅぅっ、ああっ……また出るっっ！　う、産まれるわぁっ！　だ、だめよぉ。産卵はすごいのぉっ。卵ぉっ、触手なんかの卵がぁあっっ!!」
ブシャァアッッ！　と熱い牝汁が、ビクついた肉芯から、まるで破水したかのごとく噴き出る。
「あぁっ、いやなのに出るっっ！　卵ぉぉおっ、私の子宮……触手の苗床子宮が、震えてるぅぅうっ!!」
触手に絡みつかれ、拘束されているムチムチした女体が、ビクンッビクンッ！　とこれまでになく派手に淫靡に跳ね上がる。
「ほほぅ、これから産卵するのかね？　くくっ、ブランフォードの当主ともあろう女が、化け物出産か」
「ちょっと悦びすぎじゃないの？　まがりなりにも貴族なんでしょう？　誇りはないのかしら。それとも魔界の貴族はこんな変態ビッチでもなれるのかしら？」
「う、うるひゃ……ぁあぁぁぁっ！　いいぃ、イ……ぎひぃいっ……ぉおおっっ!!」
屈辱なのは間違いない。貴族である自分が、化け物の卵を妊娠、出産……しかも忌むべき者たちの前でなんて、今でも信じられないし、悔しすぎる。
（で、でもイイのよぉっ。媚薬漬けで、肉体改造されてる私の身体、子宮っっ！　感じちゃうのよっ。卵通るの、すごい……気持ちよすぎるんだからぁぁっ！）
子宮口がミチミチと無理やり開かれ、拳大ほどの卵が顔を出すのがわかる。
ダメだ。堪えなければ。名誉ある家の名前を汚すわけには……しかし。
「ふぅっ、ふぅぅぅっ……卵出るわっ。見せたくないのに、見せちゃうわよっ！　魔界貴族ぅ、シエル・ブランフォードの産卵絶頂ぉぉっ。見せてあげ……ぁぁあっ、見てぇぇぇぇっっ!!」
見られて恥ずかしいはずなのに、人間たちの憐れみの視線を感じると、たまらなく背筋が粟だってしまう。
家の名前を貶されることも、淫魔が快楽に溺れることを馬鹿にされるのも、怖いくらいに気持ちがいい。
（なんで私、興奮してるのぉっ？　淫魔なのに……相手をいたぶるのが大好きだったはずなのにぃっ！）
汚く臭う下衆な触手たちの中に放りこまれ、ただの産卵肉奴隷になっている自分が、憐れで情けなくて、甘くドロドロに蕩けそうになる。
全身がこれまでにないくらい欲情し、官能が数十倍に膨れ上がっていく。
触手にそうされる前に、自ら両脚を広げ、女肉汁にまみれたベトベトでありながら、淫魔らしく、うっとりするほどキレイなサーモンピンクの陰唇が

著者近刊　『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』『守護姫 淫神復活の宴』『ダブル姫騎士 隷辱の王室』『サムライスレイブ 姫武者淫辱』『スケバン特捜マキ 狂姦の学園』『カグヤ 女侍斬魔録』『紅の破壊天使スカーレット』　好評発売中！

くぱぁっと開くのを見せつける。
「ぶははっ、卵が産まれるところをそんなに見てもらいたいのかい？　仇敵である僕たちに自分から恥を晒すなんて、もう君はブランフォード家の当主なんかじゃない。ただのドMな牝豚だねぇ」
「ド、ドMぅぅっ……ぉぉおっ、気持ちイイ……クズ人間にバカにされてるのに……すごく感じちゃうのよぉっ。私、牝豚……シエルは、変態の淫乱牝豚ぁぁ……っっ」
脳内に響き、蕩けるように甘い痺れに、貴族としての誇りが蒸発していく。
最強の淫魔としてサディスティックな快楽に浸っていたときをはるかに上回る、自分が自分でなくなってもいいとさえ思える気持ちよさが、紅髪の女悪魔を最低のマゾ奴隷へと開花させる。
墜ちていく上級魔族に、赤黒い触手たちがここぞとばかりに一斉に絡みつき、マゾの快感に火照る美肌をネバネバの体液で汚し、犯しつくす。
「イイッッ、気持ちイイですぅぅうっ！　単細胞触手〝様〟に弄られるの最高よぉおっ！　んおおおっ、全部気持ちイイ。エッチな淫魔の……ド変態の牝豚の身体っ、苛められるの気持ちよしゅぎるのぉぉおおっ!!」
触手たちのジュルジュルとした生暖かい感触が、ムチリとした女肉にいやらしくまとわりつき、とても気高い当主であったとは思えない墜ちたエロさを、憎き観衆たちにお披露目する。
（みんな見てるぅっ。貴族だった私の情けない格好、バカにしながら楽しんでるわ。マゾになるのがこんなに気持ちいいなんて……。あぁ、ドM最高っ。おおんっ、産卵も見せちゃうぅっ。マゾ豚シエルが卵でイクの、瞼にしっかり焼きつけてぇぇっ!!）
もうプライドもなにも関係ない。いや、それらが高貴であったからこそ、今の圧倒的なマゾの快感がある。
切れ長の瞳は被虐の快楽に溺れ、高圧的だった態度は、すっかり従順なものになっている。
「ぶくく、あれだけ大きい口叩いてたのに……完全に墜ちたようだねぇ。さぁ、シエル・ブランフォード。僕は君のなんだろうねぇ？」
ゲドウスは魔族の敵……。誇り高き自分をこんなところに拘束し、恥を晒させた豚審問官……そんな男なのに。もうっ！
「あぁぁ……〝ご主人様〟……。牝豚シエルの絶対的なご主人様でございますぅぅっ！　ぜ、絶対に逆らいませんっ。魔界貴族シエル・ブランフォードは、あなた様に完全屈服いたしましたぁっ!!　んほぉおおっっ!!」
気持ちイイ。牝奴隷、完全屈服……ブランフォードの当主に固執していた頃は、あんなに忌み嫌っていた言葉なのに今は……。もう、たまらない。
淫らな潤いを見せる陰唇が、ムリムリと広がっていく。
拘束された全身を駆け抜けるのは、化け物卵が膣道を通り抜ける痛みではなく、産まれる前から子供に女壷を弄られまくるマゾ母親の、止められない快感の奔流だ。
（マ■コが破れそうなくらい痛いのに、全部気持ちイイのぉっ。ご主人様のおかげぇ。マゾ豚シエルは化け物出産ジャンキーよぉっ！）
ドボドブァァアアッッ!!　ギュポン、ギュポォォオオッッ!!
拳大ほどの真っ白い卵が、淫らに開いた膣穴から次から次へとひり出される。張り詰めきった爆乳からは、牝の白濁ミルクが壊れた水道管のように噴き出しまくっている。
「ご主人しゃまぁっ、産まれてましゅぅぅっ！　あへへ、シエルのマゾマ■コからギュポギュポでてりゅぅうっ!!　イグイグ、ドM産卵絶頂、きもぢよしゅぎて、イギ死ぬぅぅぅぅっっ!!」
膣道いっぱいの大きさの卵が、ミチミチと媚肉を震わせながら、性感帯の塊である牝ヒダをゴリュゴリュと擦り上げてくる。
母親としての尊厳すら、化け物がもたらす快感によって支配されているという圧倒的な被虐感が、癖になるほど気持ちイイ。
女唇からブリュッと卵をひり出す官能は、理性が完全に吹っ飛ぶほどの快感電流を全身に走らせ、それが何個も、何十個も続く。
妖艶な美貌は、完全に白目を剥いたアクメ顔を人間たちに見せつけ、理性の一片すらも快楽に支配された堕落淫魔の色気溢れる嬌声を響かせる。
誇りある当主からマゾ豚に墜ちた記念に、触手たちから特濃媚薬ザーメンがシャンパン代わりに全身にぶちまけられる。
「ひょへぇぇっ、ありがとうごじゃいまひゅぅっ！　シエルは一生ご主人様にお仕えしますっ！　肉便器でも、苗床でも、お好きなようにお使いくださいませっ！　またイクッ。ひりだすっ！　おほぉおっ、イグゥウウウッッ!!」
鮮やかな深紅だったロングヘアをドロドロに湿らせながら、全身を牡と牝の濃厚な汁が垂れ落ちる。
産み落とされた卵から早くも孵った幼虫触手が、勃起乳首に吸いついて、被虐の授乳絶頂も味わわされる。
「イクゥッ！　変態お母さん淫魔イグウウッッ！　産卵もミルクもしゃいこうよぉおっ!!　牝豚マゾ悪魔、もっと苛めてくださいぃぃいっ!!」
誇り高い淫魔教師は、ただ一匹のマゾ奴隷へと墜ちていった。

BAD END

著者近刊作品
二次元ドリーム文庫
トリプルとらぶる
プリンセス
好評
発売中!!
姫騎士に続いて可憐な姫君も白濁の洗礼を受けることに！
PRINCESS KNIGHT ALICIA
アリシア
淫獄の姫騎士
第二話 堕ちゆく姫
小説／NOVEL 斐芝嘉和（いしばよしかず）
挿絵／ILLUSTRATION 桐島サトシ（きりしま）

アリシアが地下牢に囚われてから、五日目の深夜——足音を忍ばせて階段を降りてきた人影に、見張りの兵たちは目を丸くした。

「鍵を開けて、私を中に入れなさい」

抑えた声で命じるのは、鼠色のフードつきマントを細い肩に纏ったイミス姫。従者は連れず、自らの手にランタンを提げている。

「い、いけません、姫様……」

「姫様が見るようなモノでは……」

しどろもどろに拒もうとする兵たちを、姫は涙に潤んだ瞳で懸命に睨みつけた。

（あのいかがわしい魔女のせいで、父も兵も……みんなおかしくなってしまった。アリシア様を助けられるのは私しかいない！）

と、思い詰めているのだ。

兵たちの背後、鉄条で補強された樫の扉の奥から聞こえてくるのは、発情期の牝猫のような悩ましい鳴き声。それがなにを意味しているのか——幼顔の姫もよく分かっているから、震えだしそうな膝に必死に力を込め、一歩も退かない構えを見せる。

「アリシア様のお姿を、この目で確かめたいだけです。早くそこを退きなさい」

渋る兵と押し問答をしていると、切れ切れに聞こえていた淫らな鳴き声が不意にやみ——。

「いけませんな、イミス姫。こんな夜更けに、このような不浄な場所へ参られるとは……」

地下室の扉を開け、でっぷりと太った法務大臣が腹を揺すりながら現れた。時間稼ぎでもするつもりか、入り口を塞ぐように立ちはだかる。

「退きなさい！」

目を合わせることすらおぞましく、顔を伏せて法務大臣の巨体を押し退けたイミス姫は——地下牢へ一歩踏み込んだ途端、醗酵した汗のような甘酸っぱい香りに包まれ、思わず立ち竦んだ。

ハッとして見回せば、衣服の乱れた男たちは白々しく壁際に並び——部屋の中央に、四つん這いの姿勢を強制されたアリシアの姿があった。白銀の鎧は胸と腰回りをはだけられ、形よい乳房や肉感的な桃尻が剥き出しになっている。髪や柔肌に粘ついている青白い粘液がカンテラの明かりを浴びてヌラヌラ輝き、陵辱の激しさを物語っていた。

「アリシア様ッ！」

「い……イミス、姫……？」

鉄パイプを組み合わせたような拘束具に手足を抑えつけられ、腹を押し上げられている女騎士は、疲労が限界を越えているようだ。金髪に結わえられた縄を腰へと引っ張られているために顔は前を向いているが、虚ろな瞳にはなにも映っていない。疲れきった美貌には白く濁った雫が幾筋も垂れ——穢された頬にはなんの表情も浮かばない。

「しっかりしてください、アリシア様！」

転げるように駆け寄ったイミス姫は、青臭い粘液にまみれた女騎士の頭を己の胸に抱き締めた。強烈な精臭に息が詰まり、幼気（いたいけ）な頬に生乾きの精液がヌチュリと滑るが、構ってなどいられない。

（なんて非道い……我が国はアリシア様で持っているようなものなのに、こんな、こんな……お父様も、兵たちも、大臣たちも……みんな、あの魔女のせいでおかしくなってしまった……）

アリシアに対する申しわけなさとラーマに対する憤りで幼気な胸を痛めつつ、香草のエキスで湿らせた布で青臭い粘液を丁寧に拭い取る。

「ほ、本当に……姫、か……」

「はい！　私です」

「こんなところへ、来ては、いけません……私なら、大丈夫……」

「お静かに。いまお助けします」

アリシアの耳元で小さく囁いた姫は——小さな頭を不意に傾け、薄い瞼をソッと閉じて、女騎士の唇に己の唇を強く強く押しつけた。

「……ッ⁉」

いきなりのことに目を丸くするアリシア、おおっとどよめく男たち。清らかな姫の登場によって不自然に強張っていた地下牢の空気が、唐突に始まった美女同士の接吻に揺らぎ、不穏にざわめく。

なにしろ、犬のような格好を強制されている女騎士の唇にはつい先ほどまで司法大臣の淫棒がねじ込まれていたのだ。そこに、純朴な姫の穢れなき唇が——ただ触れただけでなく、感触を愉しむように密着して——。

牡たちの胸中で、幼気な姫が尊崇から性欲の対象に変わる。もちろんすぐになにかするわけではないが、目つきは確実に、淫らな光を帯び始める。

そんな中——姫は口渡しで、アリシアに一粒の丸薬を与えた。朦朧としていた女騎士の瞳に、微かに理性の光が戻る。

（——これを飲め、と？）

（はい。私を信じてください）

男たちに聞こえないよう小声を交わしたアリシアは、舌を絡めるようにして丸薬を受け取り——コクン、と喉仏を上下させた。

ホッと一息吐いた姫は名残惜しそうに唇を離し、静かに身を退いて——一分、二分。

「お気は済みましたかな、イミス姫？」

痺れをきらした大臣が、隠しきれない苛立ちを滲ませながらふたりの傍に近づいた。

イミス姫の細い首が、機械仕掛けのように回る。仰向く顔にはなんの表情も浮いておらず——瞳も虚ろで、なにも映っていないようだ。

「ど……どうされました、姫……」

「アリシア様の……息が……」

「えっ⁉」

姫の言葉に驚いた大臣が、慌ててしゃがみ込み、女騎士の鼻先に掌を寄せた。呼吸が止まっていることを確認すると首筋に指を当てて、
「な、なな、なんたること……よりにもよって、私の番のときに……」
たちまち逃げ腰になる。
息をしなくなったアリシアの傍に座り込み、呆然とした表情で大臣を見上げるイミス姫は――。
（この人って、こんな人だったのね）
すっかり呆れてしまった。
国の重鎮として、いままでそれなりに尊敬していたのに――魔女の甘言に乗せられて女騎士を辱めていただけでなく、その死に接してまず考えたのが己の保身だとは。
呆れを通り越し、むしろ腹立たしいくらいだが、いまは怒っている場合ではない。大臣が混乱しているなら好都合、計画を次の段階へ移さなければ。
「だれにも知らせず、城外へ運び出しましょう」
「……え？　な、なにを言いだすのです、姫……」
「私も大臣と同じように、いまこの場にいたのが知れるとまずいのです。アリシア様が亡くなられたことは王に知らせず、魔物たちがどこかへ運び出したことにいたしましょう」
抑えた声で口早に唆すと、大臣は一も二もなく肯いた。どうやら、見た目以上に狼狽しているようだ。地下牢の扉を押し開けてドヤドヤと入り込んできた馬番たちを怪しむことなく、一緒になって女騎士の拘束を解き、運び出す手伝いまでする。
イミス姫がアリシアに飲ませたのは仮死状態にする魔法薬だ。効き目が継続するのは一昼夜。死体に擬した女騎士を馬車に乗せて城を離れ、黒髪の魔女に見つからない場所に隠遁する――アリシアを慕う馬番たちと練ったこの計画の一番の難関は地下牢から運び出すところだったのだが、この調子なら上手くいきそうだ。
「私は、この者たちが裏切らないよう一緒について見張ることにします。不在は侍女たちが上手く取り繕ってくれるでしょう。大臣は、こちらに残って事後工作を。魔物たちにそんなことを命じた覚えはない、とあの魔女が言いだしたら、魔王の部下が紛れ込んでいたのだと言ってください」
「う、うむ……」
「ここにいる者たちにも、他言させないでください。いまの私は、大臣だけが頼りなのですから」
縋るような目で弱々しく微笑み、太った男の大きな手をソッと握る、細く可憐な幼顔の姫。
「お任せください、姫！」
底の浅い大臣はたちまち頬に血を上らせ、鼻息荒く肯いた。

＊　＊　＊

アリシアとイミス姫を乗せた馬車は月明かりを頼りに、国境を目指す。王城は東西に長いペルセフォフ王国のかなり東寄りにあり、北東へ向かえばすぐに隣国へ出られるのだ。
いつの間にか城の男たちを牛耳っていた魔女のこと、その目や手がどこまで届くか分からない。最低でも国を出なければ、安心できないだろう。
国境を越えたあとは、山間の小国・トーバに向かう予定だ。古くから名の知られた馬産地で、姫を助けた馬番たちの故郷でもある。
馬を売るだけでなく馬飼いも貸し出すことで周辺諸国と重層的な外交関係を結び、数百年間独立を保ってきた老獪な国だ。その王族なら、魔女の手から逃れる智恵を貸してくれるかもしれない――。
姫がひとりで懸命に搾り出した考えに、馬番たちも同意している。
「俺たちは臆病だから剣を取って戦うなんてのは無理ですが、アリシア様のお役に立てるならどんなことでもします」
「トーバは他の国にもツテがありますからね。万が一危なくなってもすぐに逃げ出せますよ」
――城の男たちがすべて獣に変わってしまったいま、彼らの朗らかな笑みのなんと頼もしいことか。
そして実際にアリシアを救出し、馬車は王城から抜け出した。
（これでようやく、一安心……）
緊張が解れた姫は、幌つきの荷台で昏々と眠り続ける女騎士に寄り添い、毛布をかけたその胸にソッと頬を乗せた。
全身に粘ついていた穢らわしい粘液は、目についた分は丁寧に拭ったつもりだが――アリシアの身体に染みついているのか、地下室にこもっていたのと同じ匂いが微かに感じられる。
（国境を越えたら、まずはどこかで身体を洗いましょうね、アリシア様……）
この先どうなるかは分からないが、これ以上悪くなることはないだろう――そんなことを思っているうちに、姫はいつしか眠り込んでしまった。ひょっとしたら、馬番が差し入れてくれた食事に眠り薬が仕込まれていたのかもしれない――。

＊　＊　＊

夢を見ることもなくぐっすりと眠りこけていたイミス姫は――。
「……えっ!?　あっ!?」
気がつくとうしろ手に縛られ、干し草の束の上に寝かせられていた。
驚いて見回せば――異臭漂う薄暗い畜舎の中、大柄な男たちが十数人、いやらしく笑み崩れながら怯える姫を取り囲んでいる。しかもその中には馬番たちも混じっていた。
なにが起きたのか分からない。しかし、事前に話し合った流れから大きく外れていることは確かだ。

著者近況　これを書いている時点では、桜はまだ咲いていません。でも、これが載る号が出るころには、たぶん満開のはず…ああ、また毛虫の季節がやって来ました。細く小さく群れたモノがモゾモゾうねうねしているのを見ると、なんだか創作意欲が湧いてしまいます(^^;

（と、とにかく……！）
細い身体を揺すって干し草の上に起き上がった姫だが、うしろ手に縛られているからなにもできない。腹立ち紛れに細眉を逆立て、
「なんですの、これは⁉　他国の姫を眠っている間に縛り上げるのが、トーバの流儀ですか⁉」
いやらしく微笑む男たちをキッと睨みつける。
「済みませんね、姫様。予定は変更させていただきました。ここはトーバじゃなくて、アマンドですよ」
「あ……アマンドッ⁉」
トーバへ向かう道筋から少し西へ逸れた辺りにある、好戦的な小国だ。一応同盟国だが、姫が生まれる前にペルセフォフ王国と干戈を交えたことがあり、トーバほど安心できる国ではない。
いったいなぜ、そんなところに――。
「ラーマ様の御命令なんで、仕方ないんですよ」
「あの魔女の命令って……私を騙したのですか⁉」
男たちを糺しつつ、姫は己の迂闊さを呪った。
兵よりも一段低く見られている馬番たちなら魔女の毒牙にかかってはいまい――と、確証もなく思い込んでいたのだが、しかしそれは姫自身が彼らを軽んじていた証。兵と同列に考えていれば、馬番の手を借りようとは思わなかったはずだ。
「アリシア様を助けたいって、姫様が俺たちのところへ直々に乗り込んできたときには、さすがにちょっと感動しましたが……でもまあそれだけでは、命を懸けるほどではありませんや」
「肝心のアリシア様も、兵に犯されまくったせいで以前ほど魅力的ではありませんしね」
「そ、そんな、下らない理由で……」
ヘラヘラと語られる下劣な言葉に、震えだすほどの怒気を覚え――気づく。
「あ……アリシア様はッ⁉　アリシア様は、御無事なのッ⁉」
「ええ、いまのところは」
ニヤついた男たちが人垣を割り、背後に隠していたベンチを露わにした。仰向けに横たえられているのは、魔法薬の効果で文字通り死んだように眠っている女騎士。
胸を隠していた毛布は消え、柔肉がみっしりと詰まった瑞々しい乳房が、美しい稜線を描いてふっくらと盛り上がっている。薬のせいで肌は土気色だが、少なくとも、大きな傷は見当たらない。
（よかった……）
安堵する姫をからかうように、男のひとりがゆっくりとアリシアに近づく。これ見よがしにゆっくりとナイフを抜き――。
「な、なにを……やめなさいッ！」
気づいた姫が真っ青になり、慌てた声で叫ぶのに、恐ろしげな刃は無造作に女騎士の喉に寄せられ――髪一筋の間を残し、辛うじて止まった。
「済みませんね。姫様は売れ、アリシア様は殺せ、というのが魔女様の御命令なんで」
「……ッ⁉」
そうか、そういうことか――馬番の言葉を聞いて、幼顔の姫は直感的に理解した。
ペルセフォフ王国を乗っ取ろうとしている黒髪の魔女にとって、兵たちから絶大な支持を集めているアリシアと彼女が押し立てているイミス姫は、著しく邪魔な存在だ。かといって、あまりあからさまに排斥すれば民が反感を抱くだろう。
だから――女騎士を連れて国外へ出るという姫の計画は、ラーマにとって実に好都合だった。もし国外でアリシアが殺されたとしても、王城に残っている黒髪の魔女は無関係だと言い張れる。第一ここは、ペルセフォフと敵対した過去を持つ国だ。騎士や姫が惨殺されてもまったくおかしくない。
（わ、私の……せい？　私の浅慮のせいで、アリシア様のお命が……）
責任を感じたイミス姫が薄い胸を密かに痛め、蒼褪めていると、
「でもまあ、俺たちとしてもそこまで非道いことは、ちょっとね」
「あの魔女はおっかないから、目の届くところでは逆らえませんが、ここまで来たら別にいいかな、なんて……」
馬番たちは浅ましい笑みを深め、思わせぶりなことを言い始めた。すでに話がついているのか、ほかの男たちもただニヤニヤしながら、成り行きを静かに見守っている。
「姫様がどうしてもって言うなら、アリシア様を殺さないでおきますが」
「ど……どうしてもです！　当たり前ですわ！　刃を退けなさい、早くッ！」
王家に連なる者として、ドレスに包まれた薄い胸を精一杯張り、威厳を振り絞って、居丈高に命じる幼顔の姫。
だが畏まる者などひとりもおらず――逆に、あからさまに失笑されてしまう。
「状況がよく分かってないようですな、お姫様」
「ここはアマンドだ。アンタの国じゃねぇ」
「でもって、ペルセフォフはもう、おっかない魔女に支配されているそうじゃねぇか」
「つまり、ペルセフォフのお姫様なんかがピィピィ鳴いても、なんの意味もねぇってことだ」
口々に言う男たちの瞳に、姫の血筋を尊ぶ色はほとんどない。それでいて、かつて戦った相手だからと憎んでいるようでもない。
強いて言うなら、家畜を値踏みする目つき。
ネバネバとした視線が大きく開いたドレスの胸元、控え目な膨らみや白々と輝く華奢な鎖骨の辺りを這い回っているようで、イミス姫の幼気な頬が恥辱に

著者近刊　『仙獄学艶戦姫ノブナガッ！ 1～3』『学園戦姫 巴　淫辱の下剋上』『魔戦姫 紗夜　淫辱の闘宴』『新・呪い屋零3　淫夢迷宮』『特捜姫兵アルテミス 2 黒翼のマリア』『トリプルとらぶるプリンセス』『暴れん坊メイドは甘えん坊』『うらはらツインズ』『ゆにゆに　ボクとお嬢様のぶらいべ～とれっすん』　好評発売中！

カァッと赤らんでしまう。
だがいまは――。
（私のことなど、どうでもいい！　アリシア様をお助けしなければ！）
魔法薬で昏々と眠っている女騎士は、完全に無防備だ。信じていた馬番たちに裏切られ、あっさりと見捨てられてしまったいま、彼女を助けられるのは自分しかいない。
「姫としての命令が無意味なのでしたら、私はいったい、どうすればよいのです？」
「簡単なことだ。俺たちにお願いすればいい」
「お……お願いします！　アリシア様を殺さないでください！」
言われた通りに頭を下げたのに、男たちはゲラゲラ笑い始めた。
（な、なぜっ⁉　どうしてっ⁉）
こんなにあからさまに嘲笑われたのは、生まれて初めてだ。男たちに対して反感を覚えるのと同時、自分がなにか、とんでもなく恥ずかしいことをしてしまったのではないかとも思えてしまい――頬が燃えるように熱くなり、心臓がキュッと縮み上がって、掌に嫌な汗が滲む。
「お姫様はやっぱり世間知らずだな。願い事には、必ず対価が必要なんだよ」
「た、対価と言われましても、すぐに城へ戻るつもりでしたから、いまは持ち合わせが……」
「だったら身体で払ってくださいよ」
「え？　か、身体……？」
「アナタサマのオ■ンポを私のお口でオシャブリします、だからアリシア様を殺さないで、とかね」
そこまで言われて、ようやく姫は理解した。城の地下牢でアリシアが強制されていたようなおぞましく淫らな行為を、いまここで、イミス姫にさせるつもりなのだ。
（なんて下劣な……！）
嫌悪や恐怖より先に、臓腑が煮えくり返る。こんな下賤な者たちに、どうしてこの私が、そんな穢らわしいことを――しかし。
昏々と眠る女騎士を守るには、男たちの要求に従うしかない。
剣を取って戦えないのだから、もうこれしかない――。
「……分かり、ました」
軋むプライドを抑え込み、幼気な頬を上げる。いやらしく笑み崩れた男たちを澄んだ瞳で見回し、冷えた肝に力を込めて、
「貴方様の逸物を、私がおしゃぶりいたします。ですから、どうか……アリシア様のお命は……」
教示された卑猥なセリフをなぞる。
それだけでもう、幼い胸がムカムカとした。自分ひとりのことならば、舌を噛み切ってでもこんな連中の言いなりにはならないのに――と。
「それじゃあダメだ、姫さん。俺たちは下賤なんでね。姫さんの上品な言葉遣いじゃ通じねえ」
「コレはイチモツなんかじゃなくて、単なるチンポだ。言い直せ」
いやらしい笑みを深めた男たちがいそいそとベルトを弛め、黒光りする淫棒を引っ張り出して競うようにそそり勃たせた。
「……ッ！」
慌てて目を閉じ、悔しげに唇を噛んで、顔を背ける姫。しかし、林立したペニスの姿は瞼の裏にしっかり焼きついていた。
やたらに長いモノ、妙に太いモノ、尖端の肉笠が赤々としていたり、怖いほどにエラを張り出していたり――緩く捻れた淫茎に恐ろしげな青筋が浮き上がっているモノもあった。猛々しく反り返っているモノや、大きく横に曲がっているモノもあった。
いずれにしても――。
（こ、怖い……気持ち悪い！）
太さや長さ、形が怖い。
色艶や照り光る様子が、気持ち悪い。
あんなおぞましいモノを、舐める？　しゃぶる？
「く……うぅぅ……！」
想像しただけでも吐き気がする。
凛々しかったアリシアもこういうモノに蹂躙されたのだと思うと、雨に濡れた小鳥のように細い肩が震え、柔らかな頬が恐怖に蒼褪めて――。
その弱々しい風情が、男たちの嗜虐心をますます強く刺戟する。
「なにしてるんだよ、姫さん？　あの女騎士を助けたいんだろう？」
「目を開けてよく見ろ。そら、そら」
「やっ⁉　き、汚い……ッ！」
滑らかな額や柔らかな頬に、熱く硬いモノをグリッグリッと擦りつけられた。畜舎に充満していた獣の臭いに、微かな青臭さが混じる。首を振って逃れようとしても、小さな頭を大きな手に掴まれ、
「あっ⁉　むぷ……ん、んぅッ！」
薄い瞼や薔薇の花びらのような唇におぞましい肉塊が押しつけられる。
「――なんだ、やる気なしか。しょうがねぇ姫さんだな。やっぱり騎士を殺るしかないか」
「ま、待って……待ってください！　おしゃぶりいたします、おしゃぶりいたしますからっ！」
無防備なアリシアへ向かいかけた男たちを、慌てて引き留めるイミス姫。
途端、後手の拘束が解かれ、華奢な腕が自由になる――といっても、状況はほとんど変わらない。細い手首を掴まれて左右に引き上げられ、
「う、あ……っ⁉」
白い掌に、赤黒く照り光る太くて硬い肉棒を押し

つけられただけだ。
「そんな顔するな。握るだけじゃなく、しゃぶらないといけないんだぞ」
「し、しかし……う、うぅぅ……」
「騎士を助けたければ、その柔っこいお手々で俺様のチンポをギュッと握れ！」
頭上から獣じみた濁声でがなられた幼顔の姫は、首を竦め涙をこぼし、恐怖と嫌悪に朦朧として、わけも分からぬまま命令に従った。
（やだ、硬い……やだ、熱い……）
左右の掌に感じるズッシリとした重みに、硝子細工のように華奢な指を絡みつける。懸命に力を込め——猛々しい弾力に押し返される。
なんという太さ、なんという硬さ。
生まれて初めて触れた牡肉は、表面に香ばしい粘液をしっとりと滲ませ、芯に不穏な熱を溜めて——姫の手指に包まれる中、ヒクン、ヒクン、と脈動する。尖端の孔に透明な雫を膨らませた亀頭が、真っ赤に染まった姫の耳朶を見据え、劣情の溶岩をさらにさらに滾らせる。
「へへ……いい格好だな、姫さん」
「じゃあもう一回チャンスをやろう。チンポをしごきながら笑顔になって、おチンポしゃぶらせてぇって言うんだ。可愛らしくな」
——イヤだ、できない。
そんな恥ずかしいこと、そんなおぞましいこと、言えるわけがない——。
あまりの恐怖、恥辱、嫌悪に、姫の幼気な胸は破れそうなほど痛んだが、
「そ……そうすれば、アリシア様のお命は……」
「安心しな。ペルセフォフの人間は好かないが、殺したいほど憎んでるわけじゃねぇからな」
言質を取りつけた姫は、下腹に力を込める。アリシア様をお救いするのだ、アリシア様のためなのだ——怯える心に言い聞かせ、恐怖に引き攣った頬をヒクヒクさせる。
「お、おチ■ポ……お、おしゃぶり、させて……」
「手が動いてないぞ。頭の左右で握ってるチンポをしごくんだよ！」
「笑顔笑顔。せっかくの可愛い顔が台無しだろ？」
「うぅ、く……うぅぅ……お、おチンポ、おしゃぶりさせて……おしゃぶりさせて……」
涙に濡れた頬を引き攣らせ、強張った笑みを必死に繕いながら、掠れた声を絞り出す幼気な姫。頭の左右では男根を握り締めた華奢な手指が、硬く熱い肉棹をシュッシュ、シュッシュとしごく。
「いいぞ、その調子だ。今度はおチンポ大好きって言ってみな」
「お、お……おチ■ポ、だ、だい、す……き……」
「笑いながらだ。ほら、もう一回」
「おチ■ポ……だい、好きぃ……！」
繰り返される恥辱に自尊心を磨り減らし、卑猥な言葉を叫びながら大粒の涙をこぼすイミス姫。
高貴で清らかな幼姫の懸命な痴態に、男たちは腹を抱えて下品に笑った。
「こりゃあいい！　普段は俺たちを虫螻のように思ってる王族様が、涙をこぼすほど俺たちのチ■ポをしゃぶりたいってよ！」
浴びせられる嘲笑に、姫の薄い胸が痛む。敵国の王族として憎悪されるだけならまだいいが、非力な少女として見下されるのは耐えがたい。
「御褒美として、チ■ポを選ばせてやる。咥えたいチ■ポをチロチロ舐めな」
「く、う……うぅ……ッ！」
四方八方から鼻先に寄せられる、何本ものペニス。赤々と輝く亀頭が恐ろしい。一気に濃くなる青臭さが気持ち悪い——と。
「や……め、ろ！」
薄暗い畜舎に、姫とは違う女の声が響いた。
驚いた男たちがサッと人垣を割ると——ベンチに寝かせられていた女騎士が、頭を振りながら起き上がろうとしている。仮死状態にする魔法薬の効果が、ようやく切れたのだ。
「あ、アリシア様……ッ！」
よかった、これで助かった——と、姫は腰を抜かすほど安堵したのだが。
「命が惜しけ、れば……姫に、触れる、な……」
声を振り絞る女騎士の様子が、なにかおかしい。
以前は綺麗に編まれていた金色の髪が無造作に下ろされて無惨に乱れているとか、血の気を取り戻した頬にまだ色濃く疲労が浮いているとか、そういうレベルの違和感ではなく——かつての活き活きとした女騎士ではない。研ぎ澄まされた刃のような鋭さが、微塵も感じられない。
ベンチから脚を降ろし、立ち上がろうとしたアリシアは——膝をカクンと折り、その場に崩れ落ちた。藁屑の散らばる土間に両手をつき、手負いの獣のように身体を震わせて低く唸る。
「アリシア様ッ!?」
干し草の上に中腰になった姫と、淫欲に水を差された男たちが、息を詰めて見守る中——。
「く……うっ!?　あ……うぅっ!?」
四つん這いになったアリシアが、いきなり愕然とした顔をはね上げ、しなやかな背をくねらせ始めた。立ち上がろうとしてもがいている——のではない。その証拠に、うしろへ突き出す格好になっていた美尻がカクン、カクン、と淫らにしゃくる。
姫や男たちの目には映らないが、女騎士の乳首やクリトリスにはラーマの仕掛けた魔法淫具が喰い込んだままなのだ。みっつの性感極点に融合した、木の芽を連ねたような小さなリングが、震えながら伸縮し、快楽神経を直接、何度も何度も甘噛みする。

「こ、こんなとき、にぃ……ッ！」
悔しそうに呻くアリシアだったが、背をくねらせながら仰向く顔は早くも快感に蕩け始めていた。熱っぽく潤み、焦点を失っていく碧い瞳。わななき震え、上擦る吐息をこぼす紅い唇――そしてなにより、淫らに跳ね躍る肉感的な美尻。
「……なんでぇ、脅かすな」
「城の地下で犯りまくられて、本当に淫女になっちまったんだな」
発情しきったその姿に男たちは安堵して――それ
ばかりか、妖しく身をくねらせて喘ぐ女騎士に劣情の矛先を向ける。
当然と言えば当然だ。イミス姫はまだ細く、表情も仕草も冬の最中の蕾のように硬い。一方アリシアはすでに淫らに熟れきって、しかも居並ぶ牡たちを誘うように、尻を艶めかしく振りまくっている。
土間についた腕の間では重力に引かれた美しい丸みが、妖しい腰の動きに合わせてたぷんたぷんと弾む。乳房の先を彩る深紅色の勃起乳首が、身体の陰から時折飛び出し、ランタンの明かりを受けてチラリ、チラリ、と艶めかしく輝く。
（い、いけない……！）
焦ったイミス姫は、頭の左右に上げた手に力を込め、おぞましい淫棒を強く強く握り締めた。太く熱く硬く、しっとりとした感触が気持ち悪いが、吐き気をこらえて先ほどよりも激しくしごく。
「お？　どうした姫さん？　急に賢くなったな」
「ま、まだ、私……お、お、おチ■ポを、おしゃぶりしておりません……お願いです、貴方様のおチ■ポを、おしゃぶりさせてください！」
怯えた瞳を上目遣いに、震える声を絞り出す。
（アリシア様は起きたばかり、まだ本調子でないだけ。必ず元の凛々しいお姿に戻られるはず！）
必要なのは時間だ。
それに、女騎士はもう、散々辱められた。これ以上彼女を穢させてはならない。凛々しいアリシアが淫悦に悶え喘ぐ姿など、絶対に見たくない――。
「なりません、姫……このような輩に、そ、そんな……あぅっ⁉」
淫らな尻振りを必死に抑え、懸命に立ち上がろうとしていた女騎士が、乱れた髪を掴まれて短く呻く。
（い、いけない……アリシア様のために時間を稼がなければ！）
決意を固めたイミス姫は、最後のプライドをかなぐり捨て、目の前の淫棒に柔らかな唇を押しつけた。
（ううっ⁉　き、汚い……！）
爆発する嫌悪感、一気に膨れ上がる吐き気――しかしアリシアを守るためだと己自身に言い聞かせ、薄い瞼を堅く閉じる。唇に感じる穢らわしい肉感を必死に無視して、チュパ、チュパ、と熱烈な口づけを繰り返す。
「ふぅん？　そうか、なるほど」
急に積極的になった幼姫と髪を掴まれて呻く女騎士を見比べて、男たちが卑しい笑みを深めた。姫が時間稼ぎをしていることは明白だが、
「下賤なチ■ポが好物とは、呆れた姫さんだな！」
空っ惚けて虐め始める。
「裏筋も舐めろ。分かるか？　チ■ポの裏側だ」
「舌を広げて、顔を押しつけるようにして、根元からカリ首までしっかり舐めるんだよ」
男たちに命じられるまま、干し草の上に膝立ちになって、穢らわしい男根をレロ、レロ、レロ――と何度も何度も舐め上げるイミス姫。
（か、硬い……熱い、臭い……気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い……ッ！）
一舐めするたび、味蕾に甘辛い味が広がる。
姫であるこの私が、こんな下賤な者たちの、こんな穢らわしい物を、まるで犬のように――ペニスに触れた舌が嫌悪に痺れ、心が擦りきれていく。
両手は別の男根をしごいているから、支えられていない淫棒は姫の舌に押されるまま、右へ揺れ、左へ跳ねた。唾液に濡れた裏筋が姫の柔らかく幼気な頬に転がり、瞼や鼻筋に真っ赤な亀頭がぶつかって、生臭い粘液をぬちゃ、ねちょと塗り広げていく。
「や、やめなさい……姫ッ！　そんな穢らわしいこと、貴女がしてはならな……あっ⁉　ぁあッ！」
大柄な男たちに左右から挟み込まれた女騎士が、尻を撫でられ乳房を揉まれ、妖しく身を捩りながら艶めかしい声をこぼした。
「ンぷッ⁉　ぷは……や、やめて、アリシア様に手を出さないでッ！」
「だったら休むな」
「姫さんが俺たちのチ■ポをしゃぶって慰めてくれるんなら、あちらの騎士様には手を出さねぇよ」
「ほ、本当ですね？　約束ですよ⁉」
「いけません、姫……こんな連中は、や、約束など……くっ⁉　ぅっ⁉」
乳首を抓られ、跳ねるように反り返るアリシア。
（ああ、アリシア様……ッ！）
女騎士を助けたい一心のイミス姫は、嫌悪感を必死にこらえ、可憐な口を大きく開いた。
これしかない――非力な自分がアリシアのためにできることなど、これ以外にないのだ――と思い詰め、己の唾液に濡れてヌラヌラと輝く真っ赤な亀頭を口一杯に咥え込む。
途端――。
「……ッ！」
舌に乗る熱い重み。
狭い口腔に充ち満ちる、ねっとりとした甘辛さと咽ぶような青臭さ。
予想以上の気持ち悪さに、細い背が反り返って硬直した。いくらアリシアのためとはいえ、こんな、

こんな、こんな――溢れる嫌悪に息が詰まり、意識が遠退きかける。
しかし、猛る牡たちは失神すら許さない。
「くぅう！　これが王族の口か、たまんねぇなっ！」
下品に笑った男が姫の小さな頭を両手で挟み込むように掴み、そのままグイッと腰を進めた。
「ンぉっ⁉　ン、ンぇお……ッ！」
太く硬く、熱く重い肉棒が、舌を押し潰し咽喉蓋を押し退けて傍若無人に突き進む。
（い、息が……！）
生臭い淫棒に喉を塞がれ、呼吸できなくなってしまった。吐き気も込み上げ、細い肩が震え始める。
「おい、どうだ？　高貴なお口は？」
「きつくて狭くて、温かい涎でグチョグチョで……思ったよりイイぞ」
低い声で唸った男は、姫の頭を両手でガッチリ固定したまま、自らの腰を激しく振り始めた。
「ンぉっ⁉　ンぷ、ンン……ンぅう……ッ！」
息苦しさに呻くイミス姫の小さな喉仏が、内側から圧され、コクン、コクン、と動く。痛い、苦しい、気持ち悪い――耐えがたい恥辱が容赦なく繰り返されて、姫の心が突き崩される。
「おお、狭い喉だ。こりゃあいい！」
口と喉の繋ぎ目にある粘膜の瘤にもっとも敏感なカリ首を擦りつけるようにして、頬を赤らめた男が嬉しそうに吼えた。
姫の口腔を埋め尽くした淫棒が小刻みに震え、太さと硬さ、熱を一気に増して――。
「むぷっ⁉　ン、ンぅ……ッ⁉」
喉奥に突然、熱い粘液が迸った。
（な……なに？　なに……なんなの、コレッ⁉　お、男の人がペニスから出す……　汚いモノ⁉）
爆発的に膨れ上がる青臭さ、食道粘膜に粘ついて胃の腑へと伝い落ちていく、ねっとりとした熱感。
と同時に――ぴゅくっ！
どぴゅっ！　どぴゅぴゅっ！
頭の左右で姫の手にしごかれていた男根も一斉に果て、滑らかな額や柔らかな頬に濃厚な白濁液を浴びせかけた。
「ひ……ひぃいっ⁉」
柔肌に粘着する、熱い重み。
鼻腔にねっとり絡みつく、草いきれのような精臭。
あまりの気持ち悪さに、姫のプライドがひび割れる。いけない、ダメだ、アリシア様を守らなければ――と、わずかに残った理性が叫んでいるのに、
「い、いや……いやいや、イヤイヤぁぁあぁっ！」
喉奥までねじ込まれていた男根を吐き出し、手足を振り回して、幼子のように泣き叫んでしまう。
「わがまま言うな、姫さん。まだ一本しか咥えてねぇじゃねぇか」
「上のお口が嫌なら、下のお口にしてもらおう」
「ひっ⁉　あ、ああダメ……やだ、た、助けて、アリシア様ぁあっ！」
逃れようとして必死にもがく細い手足が、男たちの手に掴まれ、荒々しく捻られた。ドレスを破られ、薬屑の散らばる土間に仰向けに押し倒されて――膝裏を掬われた両脚が、大きく左右に開かれる。
秘部はまだ下着に守られているが、薄い布地には柔らかく瑞々しい、幼気な肉畝の形がうっすらと浮き上がっていて――覗き込む牡たちの目が血走り、太い鼻息がさらにさらに荒くなる。
「け、ケダモノ……獣ぉっ！」
「さすが王族、罵り方も洒落てるな」
「はてさて、お偉い王族様のオ■ンコは、庶民とどれくらい違うのか……」
「あ……あ、あああっ！」
股布が武骨な指に掴まれ、力任せに毟り取られた。露わにされた高貴なる秘処は、円らな瞳が泣き濡れたあどけない顔立ちよりさらに数段幼気だ。
肉畝はまだ薄く、肌理細かな柔肌が乳白色に輝いている。割れ目の縁にある莢だけは艶めかしく紅いが、頼りないほど細い。
「ほう、ずいぶんと綺麗なオ■ンコだな」
「しっとり白くてほんのり紅くて……まるで桜の花びらだ。これぞ王族っていう感じだな」
真っ暗な闇の彼方から男の声が聞こえ――姫は自分が瞼を閉じていることに、ようやく気づいた。
怖い――だが目は開けられない。
見られている、見つめられている。こんなにたくさんの、獣じみた男たちに――本能的な恐怖と乙女の羞恥が最高潮に達し、身じろぎひとつできない。
「喰ってるモノが違うのか、肌の色艶が違うな」
「あ、あ……い、やぁっ！」
うっすらと盛り上がったあどけない肉畝を、硬い指先に撫でられた。凶暴そうな顔とはうらはらの、優しいほどに軽いタッチ。
だからなのか――触れられた場所に嫌悪ではなくもどかしさが湧く。
（うぅっ⁉　ど、どうして……）
もっとしっかり撫でて欲しいと思いかけた自分に気づき、耳の先まで紅くなる幼気な姫。
「やめろ、下郎……姫様のお身体に、き、汚い手で、触る、な……！」
人垣を作った男たちの背後から、アリシアの掠れた声が聞こえてきた。
恥辱に強張った顔をハッと上げ、助けを求めようとしたイミス姫は――寸前、開きかけた口を慌てて閉じる。秘裂をまさぐる指先が小さな小さな淫核に触れ、小刻みに振動して、稲光のような快感を産みつけてきたのだ。
「く、あ……う、うぅう……ッ！」
鋭い恍惚感が次々と閃き、薄い背筋に悦びの波が

約束通り1人で来たわ！弟はどこ!?
本当に1人で来るとはエルフってのはバカばかりだな！
まんまと誘拐されたバカな弟と同じでよ
…っバカはアンタよ！（人間なんて魔法でイチコロよ）
可憐なエルフに這い寄る触手!!
!?
エルフ姉弟テンタクル女
漫画 COMIC
の歯

!?
キャアアアア
ちょっ！やだあ！なんでっ人間ごときが触手モンスターを使役っ
ひっ!? なんなのよっいやあっ！
やっんあっ乳首…っ
吸!?
ひっやあああ

ズズズ
ひいっ!!
まさか…やめ…!
魔法で…っ切り刻んでやる
ゴオオオ
おっと!いいのか?ソイツはお前の弟なんだぞ!
!?
禁断の黒魔術で姿を変えてやったんだよ!ぎゃははは
ビクッ
そんなの嘘よっいや!はいってこないでええええ!
ジュルッ
コリッ
コリッ
嘘なものか!俺の愛を拒んだテメエらエルフに復讐するため悪魔に魂を売ったんだからよおお!
ズボオオ
ひぎっ!嘘よこんなの!
太すぎっるうううっ裂けるっさけちゃうう!

正義のヒロインと悪の女幹部が生中継でポロリするようです
最終話 グローリアTVの一番長い日
小説／酒井仁
挿絵／SAIPACo.
グローリアTV、テロリストによって陥落!?
この窮地を救えるのは彼女たちしかいない――!

登場人物紹介

セイバードール・キティ

本名キャサリン・グレイス。身体能力を高める能力を持つ。正義のヒロインになるため都会にやってきた。

レディ・ベラドンナ

本名マキ・城崎・ダナウェイ。犯罪組織メタパラノイアの元幹部。動物を怪人化して操る能力を持つ。

ナタリー・ヘントマン

「ザ・ヒーローショウ・A」を担当する、グローリアTVの敏腕女プロデューサー。

前号までのあらすじ　正義のヒロイン・キティと悪の怪人レディ・ベラドンナの戦いを映す深夜番組「ザ・ヒーローショウ・A」。その趣旨は、二人のあられもない姿を放送するというものだった！　二人は番組の企画に乗せられ、様々なプレイを強いられていく！

かつかつかつかつ……。

決して広いとは言えない控え室の中を、発情期の狐のように行ったり来たりするピンクの髪の少女に、黒コスチュームの女幹部がとうとう痺れを切らす。

「いいかげん、鬱陶しいんだけど!?」

「んぁああああ～～～っ、いつまで待たせんのよぉ。早く始めて、早く終わってくれないと、父ちゃんたち着いちゃうじゃないぃ～～っ」

こっちの言葉も耳に入っていないようだ。ベラドンナは肩をすくめ、壁掛け時計に目をやる。

（……確かにあのナタリー・ヘントマンの手際とも思えないわね。初めてのスタジオ収録とはいえ）

今回の「ヒーローショウ・A」はいつものように屋外でのロケではない。何やら趣向を凝らしたアトラクション風味だと聞かされている。

『そうでもしないと、あなたたちの戦闘ってテレビ映えがしないのよね』

とは女プロデューサー、ナタリーの弁であるが、キティもベラドンナも別に役者ではないので、そんなことを言われても困る。

「そのアトラクションとやらの準備に手間取ってるのかしら……って、あんた何してんのよ」

「何って、決まってるじゃない！　父ちゃんたちにメールして、到着を遅らせるのよ。ええと、今シティグローリアは街全体が大火事とテロと地震に見舞われているので来ないでください……」

「見え見えの嘘なんか通用するわけないでしょ」

そう、もう一つの問題はこれだ。

昨日、キティ……キャサリン・グレイスの両親が娘の晴れ姿を見物に来るという連絡が来たのだ。

『どうだキャサリン、もうヒーローの仕事は慣れたか？　思ったより畑の収穫が早く終わったから、お前の活躍っぷりを見学させてもらおうと思ってな、明日の朝一で母ちゃんと出発するから、楽しみにしててくれ。がッはッは』

という手紙とともに、大量のトウモロコシだのカボチャだのジャガイモが送られてきたのだ。

「新鮮でおいしい野菜だったわ。本当にあんなにもらってよかったの？」

「あんなもん、いくらでもわけたげるわよ！　だから、ヒーローショウ・Aのことは……」

「わかったわかった、内緒にしてあげる。でも、どこから情報が漏れるかなんてわからないわよ？」

「……そ、その時はその時よ……」

キティの気持ちも、わからなくはない。

正義を守るスーパーヒロインとして都会にやってきた愛娘が、実はヒーロー活動などしていなかったと知ったら。

ましてやいかがわしい番組でエロエロな目に遭わされ、その一部始終を生中継されていると知ったら、純朴そうな両親はその場で卒倒しかねない。

（……私みたいに、天涯孤独の身だったら楽なんだけどね）

それにしても、とベラドンナは再び時間を確認する。スケジュールの遅れをADが知らせに来ないというのもおかしい。

（何かのトラブル……なんだろう、いやな予感が収まらない）

ベラドンナの予感は当たっていた……いや、実際に今起こっている事態は、彼女の想像をはるかに超える最悪の状況であった。

「なんなんだ、あの小娘どもは……あいつらもヒーローなのか？　おい、話が違うじゃねえか、ドク！」

控え室の様子を映し出しているモニターをずっと見ていた男は、スリング付きのサブマシンガンを肩から提げている。

銃は撮影用の小道具、プロップガンではない。殺傷能力のある本物だ。

そして、同じ武器を所持した少なくとも十名以上の武装集団が、ここグローリアTVを不法占拠して、間もなく五時間が経過しようとしている。

「ふむ……どういうことか、説明していただけるかな、ミス・ヘントマン？」

ドクと呼ばれた初老の男は白衣を着ており、分厚いレンズの奥からじろりと男の顔、そしてゆっくりと部屋の片隅に視線を巡らせる。

床に転がされている女体は、見るも無残な姿。力任せにスーツを引き破られ、起伏のある豊満なナイスバディにべっとりとこびりついているのは、明らかに男の体液だった。

グローリアTVの敏腕女プロデューサー、ナタリー・ヘントマンは、それでも気丈に白衣の男をキッと睨みつける。

「どうもこうも、まだあなたたちの毒牙にかかっていないメタモルが残っていたということよ。キャプテンたちを解放して投降するなら今のうちよ、ドクター・ヴォクト」

ドクター・ヨセフ＝T・ヴォクト。

メタモル能力研究の分野においては最先端にして最も過激な異端児。
人類の発現したメタモル能力に関して革新的な仮説を提唱し、そのあまりの異端ぶりに学会から総スカンを食らうものの、独自の理論を推し進めた結果、SOKO＝AGEシステムをほぼ独力で完成させた異能の天才科学者。
「メタモルを一時的に活性化するSOKO＝AGEシステム……裏を返せば、『メタモル能力の抑制効果』を生み出すと、なぜ気付かなかったのかね？　私は君たちのその浅はかさをこそ嘆きたくなるよ」
「あなたは……最初からその目的でSOKO＝AGEシステムを売り込みに来ていたというの？」
白衣の男は無言の肯定で答える。
「これか……『ザ・ヒーローショウ・A』？」
マシンガンを提げた男は、デスクの上の企画書を取り上げ、さっと目を走らせる。
「セイバードール・キティにベラドンナ……そうか、どこかで見覚えがあると思ったら、メタパラノイアのレディ・ベラドンナか！　はっはは、こいつは傑作だ！　駆け出しの新米ヒーローに、ロートルの三流幹部じゃねえか」
「くっ」
せせら笑う男は、ベラドンナの素性に詳しいらしい。悔しいが、はったりを利かせても無駄のようだ。
男は通信機で仲間に連絡を取り、局に出入りする者がいないかしっかり見張るように命じる。
（『ザ・ヒーローショウ・A』の撮影は特設アトラクションのフロア……こっちの状況には気付いてないみたいね。それにしても、こうもあっさりヒーローたちが捕まってしまうなんて！　大失態だわ）
テロ集団によるテレビ局の占拠という状況に、当然対処すべき正義のヒーローたち。
だが、キャプテンマキシマムをはじめ、ジャスティス協会に所属するほとんどのヒーローたちもまた局内の一室に監禁されている。
しかも――そのメタモル能力を封じられて。
「ほう、これはまたなんとも馬鹿げた企画をぶち上げたもんだな、ヒーローが聞いて呆れるぜ」
テロの首謀者と思しき男は、企画書を見てげらげらと笑う。そうして、にやりと底意地の悪そうな笑みを浮かべる。
「よし、せっかくこれだけのお膳立てをしてるんだ、あの嬢ちゃんたちをアトラクションに招待してやろうじゃないか」
「なんですって!?」
「おい、プロデューサーさんよ、お前さんの部下の一部を解放してやるから、生中継の準備をさせな。あの小娘たちがふざけた番組を終える頃には、マキシマムたち全ヒーローのメタモルは、完全に消失してるって寸法だ。この俺が直々に全市民にその事実を公表してやる」
男がどうやら本気らしいと気付き、ナタリーの顔は青ざめる。
「そんな……そんなことをしたら、ヒーローがヒーローでなくなってしまう……シティグローリアは大パニックになるわ！」
「ああ、そうさ！」
じゃきっとマシンガンの銃口をナタリーの額に押し当てる。
「街の正義と秩序を守護するヒーローたちは、その特殊能力を失い、ただの人間になっちまう。テレビを見ている奴は市民だけじゃねえ、悪党たちは喜びのあまりジルバでも踊りだすだろうぜ」
安物のギャングドラマのようなセリフ回しにうんざり顔のナタリーに、テロリストのボスはくいと銃で局内専用の電話を指し示す。
「どうした？　あの二人のご活躍を中継するのがお前さんたちの仕事なんだろう？　仕事はしっかりこなさなきゃあな」
「……ッ」
男から電話をひったくるや、ナタリーは別フロアのスタッフを呼び出す。
「どうしたんですか、プロデューサー！　もう時間ぎりぎりですよ？」
「ええと……そっちの準備は？」
「もう全部完璧に整ってます、あとはプロデューサーのゴーサインさえあればいつでも！」
いかにも自信満々のスタッフの声が、今は恨めしいほどだ。だが、ヒーローたちも力を封じられ、銃を持ったテロリスト相手に、新米ヒーローとロートル女幹部が立ち向かえるはずもない
（キティたちの放送が続いている間は、奴らもキャプテンたちには手を出さないはず。ここは時間稼ぎをして何か手を考えるしか……）
にやにやとうすら笑いを浮かべる男の視線を感じながら、ナタリーはスタッフに予定通り撮影を開始するように指示した。
「さて……あっちは任せておくとして、あんたにも一仕事してもらおうか。監禁してるヒーローたちと俺たちの姿も放送するんだ」
男は、マキシマムたちが閉じ込められている部屋のモニターに目をやって獰猛に笑う。
「さあ、ヒーローの時代の幕引きだ！」
「えーっと……」
さんざん待たされた挙句、ようやく呼びに来たADに連れられてきたのは、三フロア分はありそうな吹き抜けの大部屋だった。
しかもそこにそびえたつ「特別ステージ」にキティもベラドンナも言葉を失う。それもそのはず――目の前の肉の壁は、すべて「覆面を付けた男

著者近況　早いもので、最終話です。キティとベラドンナ、二人の美しきヒロインたちの戦いについに決着が!?　……まあ、そんな真面目な話じゃないのは、皆様ご承知の通りです。

の肉体」で組み上げられていたのだ。
どういう仕組みなのか、器用に手足を組み合わせた男たちの、ご丁寧に局部だけが露出している。フロアは彼らの体温と男臭でむせ返りそうだ。
「今回は、三つのステージで競い合ってもらいます。それぞれのステージの勝者に次のステージに進む鍵が与えられ、勝負を有利にできます。キティさんは、ハンデとしてウェイトを手足に付けてください」
「ふん、この程度なら大したハンデでもないわね」
ぶつぶつ言いつつ、手首と足首にウェイトを付けるキティ。今回はグッドウィンのような司会者はおらず、キティたちはインカムで指示を受ける。
「そしてもちろん、敗者にはステージごとに『ザ・ヒーローショウ・A』にふさわしい罰ゲームを受けてもらいます。ではステージ1『男体山登りゲーム』、スタートです！」
「ス、スタートって言われても……あっ、こら抜け駆けすんな！」
マントをなびかせ、さっさと肉体山を登り始めるベラドンナの後を、キティも慌てて追いかける。
「むほほ～っ、ベラドンナ様が俺の身体の上を……」
「……あんたたち、局のスタッフなの？」
女幹部の問いに組み体操のような体勢の小太りの男がやにさがりながら答える。
「いえ、視聴者参加募集に応募して、当選したッス！人間の身体をくっつけるメタモルの人がいて、それでこんなことになってるッス」
落ちないように男の肩を掴むベラドンナもさすがに呆れ顔になる。ショウを見ている連中も連中だが、こんな馬鹿げたアトラクションにこんなに参加したがっている輩がいるとは、まったく度しがたい。
「で、頂上を目指せばいいの？」
その時、スポットライトが男体山を舐めるように照らし、ある一点で止まった。
「勝負はスポットの当たった人へのご奉仕で1ポイントです！　早い者勝ち、5ポイント先取で勝負が決まります!!」
インカムからの指示に、スポットライトの方向に目をやると、一人の男性が照らし出されている。そしてその股間にはむき出しの男性器が隆々と天を仰いでいる。
「さ、最初は俺か、ラッキー！　さあ、どっちでもいいから俺のところまでおいで～っ」
ご奉仕……ということは、つまりはそういうことなのだろう。
肩をすくめるベラドンナの脇を、ピンクの風が走り抜ける。男体山をずんずん踏みつけながら、キティが一直線に男の下に向かう。
キティに踏みつけられた男たちが「ぐえっ」「ぎゃっ」などと声を上げるが、どこか嬉しそうだ。
「っしゃ、勃起ち■ぽゲーット！」
「っ、させないわよっ」
ようやく追いついたベラドンナがキティの背後から飛びかかる。しかも四方八方から男たちの腕が伸びてきて、二人の身体のあちこちをいやらしく触りまくってくる。
「ちょ、何すんのよあんたたち！　あひゃひゃひゃ、く、くすぐったい～っ」
「うっへへ、お、俺たちは自由に妨害してもいいルールなんですよ。油断してるとち■ぽねじ込まれますよ～」
「えぇぃっ、お放しッ、このっ」
ばちーんと平手打ちを食らった男が思わず手を放すが、紅葉の形を頬に刻まれた男はにやけ顔のままベラドンナのふくらはぎを撫でさする。
「むひひひ、ベラドンナ様～っ、もっと～」
「駄目だこいつら、早くなんとかしないと……」
ポイントを先取するには、スポットの当たった男だけを満足させなければならない。
振り返るとキティが妨害してくる男たちを片端から殴り倒しながら、目標のペニスに両手でしがみつく。男にほとんど抱きつくような格好で、胸元に抱き寄せた肉棒を激しくしごき立てる。
「おほぉおおっ、せ、積極的ぃい～～っ」
「えいっ、えい、このぉっ。早くッ、はやくち■ぽミルク出しちゃいなさいッッ」
さすがにヒーローショウを何度も重ねるうちに、うぶな少女もいつまでも恥ずかしがっているわけにはいかないと学習したようだ。
自ら胸元をはだけると、乳の谷間に陰茎を挟み込み、先端をべろべろねぶり回す。
「早く勝負をつけないと、父ちゃんたちが着いちゃうのよぉ！」
「あふぅんっ、裏筋ッ、うらすじもっとペロペロしてくださいぃ～っ」
厚かましい男の要求に、ピンクの髪のスーパーヒロインは両手で自らの乳房を激しくゆすり立てながら、亀頭の裏側を舌先でくすぐる。
「れるっ、んちゅっ、ほらほら、これでどうよ？ちょっと、余計なのは近づかないで！」
「ぎょひーっ、靴底で顔踏まれて気持ちいい～っ」
キティは勝負にしか興味はないのだが、わざわざこんな番組に参加しようという視聴者は、キティに構ってもらうのが嬉しいらしい。
わらわら伸びてくる手を振り払いながら、なおパイズリでペニスをしごき立てる。やがて鈴口から大量の白濁が噴水のように噴き上がった。
「おふぉおお～んっっ」
どびゅっ、びゅるびゅるびゅる～～っ。
きっとこの日のために溜めていたのだろう、驚くほど大量のザーメンがキティの顔や髪を白く汚す。
「飲んでっ、キティちゃんのんでッッ」

著者近刊　『魔法少女ならぬ魔法中年が世界の平和を守る事になったようです』『邪悪な魔王が伝説の女勇者に転生したようです』『不死の吸血姫がドSのご主人様を募集しているようです』『無敵の姫騎士がドMに目覚めたようです』ほか　好評発売中！

「えっ、ちょ、んむぅうう〜〜っ！」
男は片足を少女の首に絡めるように腰を突き出し、強引に喉奥までねじ込んでくる。
「はいっ、キティさん1ポイント先取です、次のラッキーペニスさんは誰だ〜っ」
「んんぅうう〜〜〜っ」
次にスポットライトの当たった男の元に、ベラドンナがいち早く駆け付けようとするが、キティはどくどくと吹き出し続ける樹液を、目を白黒させて飲むしかない。
（ちょっと、こんなのって〜〜っ）
ようやくペニスを吐き出した時は、ベラドンナがスポットライトを浴びながら、革手袋に掴んだ肉棒をリズミカルにしごいている。
「ふっ、無様ねセイバードール。最初の獲物はあなたに譲って、次の目標を狙っていたのよ。そらそら、タマタマちゃんを揉みながらしごくの、たまらないでしょう？」
と、あくまで次のアクションを考えながら両手で男の肉を揉み、しごき立てる。
「んぉおおっ！　べ、ベラドンナさま〜ッ！」
巧みな手コキで男を責め立てる悪の女幹部。
ついこの間まで処女だった彼女も、いいかげんこれくらいのテクニックは身につける。
（ふふふ、どうせこんな展開になるだろうと、前もってイメージトレーニングしておいたのよ！）
なんという用意周到さ、さすがは十年選手の悪党のキャリア。だが、油断していると男体山が大きくうねり、ベラドンナの下にいた男が大きく腰を突き上げた。
ずぶぶっ、ずぶぶぶ〜〜っ。
「ひゃひぃいっ？　ちょ……こんな状態で、挿入してくるなんて……」
だが、手にした陰茎を射精させるまでは身動きできない。男は調子に乗って腰をぐいぐい突き上げてくる。
（くっ……は、早く射精させないと！）
片手で肉茎、片手で陰嚢を愛撫していると、ついに男は感極まって白濁を噴き上げる。
「っしゃあ！　これで同点よ、次は……」
「負けられない、あたしだってそう簡単に負けるわけにはいかないのよ！」
ようやくさっきの男から解放されたキティがぐいと頬にこびりついた体液を拭う。
持ち前のスーパーパワーを生かし、いち早くスポットの当たった男のところに向かうつもりだ。そして、三人目の幸運な視聴者が選ばれる。
「いくわよ〜〜〜ッッッ！」
がしぃいっ。
キティは近くの勃起ペニスをむんずと掴む。
「うぼぉっ」と呻く男には目もくれず、少女は蜘蛛のようにわしゃわしゃと男体山の上を這い回る。
「あ、あんたって……」
そのなりふり構わない移動方法に、ベラドンナも声を失う。が、ぶるっと黒髪を一振りして自分も移動を始める。
「うぉおおお〜〜〜〜！」
「なんのぉおお〜〜〜〜！」
そこかしこでそそり立っているペニスを手がかり、足がかりにして、正義のヒロインと女幹部は、必死の形相で肉棒に突進していく。
その二人を妨害という名目で触ろうと伸びてくる腕、腕、腕。中には我慢できなくなったのか、自分で自分のイチモツをしごき始める男もいる。
これはまさに正義と悪との一騎打ち――とてもそうは見えないのだが。
「なあ……俺たちが言うのもなんなんだがな」
マシンガンを提げたテロリストのリーダーが、モニターを凝視しながら、呆れ果てた声を漏らす。
「お前さんたち、テレビ局の人間ってのは、いったい何を考えて番組とか作ってやがるんだ？」
敏腕女プロデューサー、ナタリー・ヘントマンは男の問いに目をそらす。
（言えない……企画会議が明け方まで続いて、スタッフ全員ハイテンション状態で決まった企画だとか、言えない……）
「あぁっ、出るッ、ザーメン出るぅうう！」
男の顔面に跨がって、シックスナインの体勢でペニスをしゃぶっていたキティの唇から、「ぶびゅっ」と白い体液が噴きこぼれる。
と同時に、会場にピピーッッ、とホイッスル音、そしてファンファーレが鳴り響く。
「はいっ、五ポイント先取！　ステージ1はセイバードール・キティの勝利です!!」
勝負は一進一退を続けていたが、先にポイントをあげたのは体力で勝るキティだった。
手足に付けたウェイトなどものともせず、組み上がった男たちの上を這い回り、踏みつけ、妨害してくる手を張り飛ばし、ベラドンナを圧倒した。
「ではこちらが勝者に与えられる鍵です、次のステージに先に進めます。そして敗者のベラドンナさんは……」
この男体山を作っていたメタモルは、どうやら進行役のADだったらしい。ぱちんと指を鳴らすと同時に、男たちの結合が外れる。
さんざん踏みつけにされていた男たちは次のステージに進むキティを見送り、そしてぎらついた目で女幹部ににじり寄ってくる。
「ちょ……みみみなさん少し落ち着いて」
「うォお〜ッ、俺の方にはちっとも来やしなかった

じゃないか！　チクショウちくしょう」
「俺はもっとベラドンナ様に踏みつけにされたかったのに、キティに殴られてばっかりだったぜ！」
　メタモルを解除され、自由に動けるようになった男たちは、このゲームのルールも聞かされている。勝者は先に次のステージに進み、敗者はしかるべき罰ゲームを与えられるということを。
「そ～れいっ、ベラドンナちゃんにお仕置きタイムだぁ～～～っ！」
「ひいいい～～～ッッ」
　一斉に飛びかかってきた男たちの手が、黒のコスチュームをはぎ取っていく。
　あっという間に乳も尻も露出させられた半裸姿の女幹部は手足を押さえつけられ、まんぐり返しを強要される。
　丸見えになった股間を覗き込む男の股間には、隆々とイチモツが屹立している。わかっていたとはいえ、これから自分が何をされるかを思うだけでベラドンナは総毛立つ。
「はいっ、罰ゲームは今から十五分間ですよ～」
　長い９００秒になりそうだ……うんざりする女幹部の膣に、最初の肉棒がねじり込まれた。
「はぁ、はぁ、はぁ……や、やっと終わった」
「えぇ～っ、俺まだベラドンナちゃんに突っ込んでないぞぉ！」
　ぶつくさ文句を言う男たちはスタッフに追い出され、ベラドンナは顔にもべっとりまき散らされた白い体液を指で拭う。
「さっそく小娘の後を追いたいところだけど……ねえ、タオルか何かないかしら？」
　次のステージへの扉を指し示すスタッフにそう聞くが、スタッフはひょいと肩をすくめ首を振る。
「そのままでも問題ないと思いますよ？」
　その言葉に不穏なものを感じつつ、既にキティは十五分リードしていることを思い出す。
（この先もろくでもないアトラクションしかないってことか……次のステージを取られたら私の負けだし、先を急ぐしかないわね）
　次の部屋はいたってシンプル。
　ステージ上にはピンクの髪の少女が呆然と立ち尽くしている。床の上には犬の餌入れのような二つの皿が置かれ、白い「何か」が入っている。
「どうしました、キティさん？　そろそろサービスタイムが終ってしまいますよ」
　と、進行役の声がインカムから聞こえ、ルール説明を始める。
「これはバラエティでおなじみ、口だけで中の飴玉を取り出すゲームです！　そろそろサービスタイムが終わり、妨害が始まります、ベラドンナさんもお急ぎください」
「ああ、小麦粉の中に顔を突っ込んで飴を取り出すっていう子供じみたゲーム……って、なんじゃこりゃぁあああ～～～～ッッ！」
　キティの隣に立ったベラドンナの鼻孔を突く臭気は、さっきさんざん嗅がされた生臭さ。
　皿いっぱいに溜まっているのは粉ではなく液体。どろりと粘っこい男性のザーメンがなみなみと注がれていたのだ。
「な、何十人分集めたのよ、なんて悪趣味……」
　呆れ果てるベラドンナの隣で、正義のヒロインは青い顔をしている。
「うぅう～～っ、き、気持ち悪いよう……もういやだぁ……」
　今にも泣きだしそうに顔を歪めるキティ。
　これまで猫怪人だのグッドウィンだのに弄ばれてきたはずだが、やはり田舎育ちの純朴な少女は、この下品極まるゲームを前に心折れたようだ。
（ふん、世間知らずのお嬢ちゃんには刺激が強すぎたようね。悪いけどこのステージは勝たせてもらうわよ！）
　ベラドンナも決して男性経験豊富というわけではない。だが、少女のころに両親に捨てられ、悪の組織で苦労してきたという自負もある。
「ええいっ、女は度胸～～～ッッ！」
　さっきのステージの罰ゲームの延長だと思えば、どうということはない。ベラドンナは四つん這いになると、既にザーメンでべとべとになった顔を皿の中に突っ込んだ。
「うひぃ、ま、マジ⁉」
　ドン引きしているキティに見せつけるように、女幹部は真っ白な体液の中で口を開け、舌で皿の底をまさぐる。
　たちまち口中いっぱいに流れ込んでくる苦しょっぱい体液と凄まじい臭気。
「んぐぅ……んぐ、んくぅっ」
　これだけ大量のザーメンの中に顔を突っ込めば、どうしたってある程度飲み込んでしまう。いがらっぽい味が食道を灼き、胃の奥がぐるぐると不快な音を立てる。
（こういうの見て、視聴者は喜ぶわけ？　ちっともっ、さっぱりわかんないけど、見たいんなら見せてあげるわよ、悪の女幹部の意地を！）
　んぐんぐと舌を伸ばしていると、丸くて固いものを探り当てる。
「んぐ……ぷはぁあっ！　けほ、けほけほんっ。と、取ったわよ！」
　ぷっと飴玉を吐き出し、勝利宣言をするベラドンナ。気がつけば皿の中の白濁はずいぶん減ってしまっている。
「うえぇえ、あんなに飲んじゃったの？　い、胃袋から妊娠しそう……」

「お見事です、ベラドンナさんまずは1ポイント先取！　飴はあと四つです」
「はぁっ!?　ちょ……それに、何よあんたたち？」
ザーメンボウルに顔を突っ込んでいたので気がつかなかったが、二人の前にはいつの間にはずらりと覆面男たちが仁王立ちになって、イチモツをおっ立てている。
「ま、まさかあんたたちも」
「ウッス！　今回の視聴者参加に応募したザーメン要員ッス！」
「ベラドンナ姐さん、いくらでも飲んでください、すぐに補給しますから！」
「よ、余計なことしないでよ！　んぷっ」
憤慨する女幹部の顔面と皿めがけ、陰茎から新たな白濁が迸る。
男たちの放出量は凄まじく、半分くらいに減っていたはずのベラドンナの皿に次々と男汁が追加されていく。
「うぅぅう、搾りたては匂いが半端じゃない……」
勃起ペニスからいくらでも放たれる生精液に、キティは思わず後ずさる。しかし、少女の腰を別の腕ががしりと押さえつけてきた。
「駄目ですよ、試合放棄したらそこでキティさんの負けなんだから。むひひひ」
「こ、こらっ、お尻に変なもの押しつけないでっ」
尻や太もも、さらには乳房にまで手を伸ばし触りまくる男たちの一団は、ベラドンナの背後からも迫ってくる。
「いつまでもクリアできないと、このまま罰ゲームに突入だぜ？　まあ、俺らはそれでも別に構わないんだけど、ひっひひ」
（ち……こいつらは悪党でもない、ただの視聴者だから、叩きのめすこともできないってことか。考えたわねぁの女プロデューサー）
「いやぁぁあ、へ、変なとこさわんないでぇ～」
ピンクの髪の少女の方は、そこまで考えているというわけではなく、にたにた顔で痴漢行為をしてくる男たちの雰囲気にすっかり呑まれているようだ。
いつもの快活さが失われ、為す術もなく股間をまさぐられ、震えている。
（……可哀そうだけど、これも勝負！　恨みっこなしよ、セイバードール！）
これはいつものバトルではなく、あくまでもアトラクションゲームであり、競技。
腕っ節では勝てなくとも、このゲームならベラドンナにも勝機はある。尻をむんずと掴まれつつ、女幹部は大きく息を吸ってから、再びザーメンボウルに挑む。
「がぼっ！　んく、んくぅう～～っっ」
「おぉお、さすがはベラドンナ様だ！　よぉし、俺たちも負けずにザーメン補給だぜ！」
「俺はキティちゃんのエッチ穴を弄って妨害だ！」
「お、俺は尻を……尻穴を……」
ただの痴漢変態集団と化した参加視聴者は、陰茎をしごいては白濁を追加し、キティの股間を指で抉り、強化スーツの上から乳首を掴み上げてくる。
「ひゃひっ、ひぃいん……おっぱい駄目ぇえ……」
先ほどのステージではキティが勝利したために罰ゲームを受けなかった。
その分、このステージではキティの身体を弄ぼうという男の数が若干多いようだ。
何本もの手に身体中をまさぐられ、少女は羞恥のあまり立っていられない。そのあどけない顔にも勃起ペニスが押しつけられる。
「ひひひっ、搾り取ったミルクが嫌なら、直接飲んでくれてもいいんだぜぇ～」
「んーっ！　んぐ、んむぅうう！」
キティの後頭部を押さえつけ、男は激しく腰をピストンさせる。
その腰には別の男が取りつき、前に回した手でスーツの上から肉唇をまさぐりながら、尻の割れ目に陰茎を押しつけ、擦りつけてくる。
「おほぅうっ、キティちゃんのおヒップ、ぷりっぷりんだぜ！　まるでヴァギナに突っ込んでるみたいに気持ちいいよ～っ」
「んくぅう、けほっ……気持ち悪い……きもちわるいからやめてぇ……」
すっかり心が折れ、弱気になった少女ヒーローの泣き顔は、男たちの同情を誘うどころかかえってオスの嗜虐心に火を点ける。
もはやゲームそっちのけで少女の身体に群がり、腋と言わずふくらはぎと言わず、全身に勃起ペニスを押し当て、かくかくと猿のように腰を振る。
その横で、ベラドンナは痴漢行為にも負けずザーメンボウルに挑んでいる。
「んぐっ、ごきゅっ……ぷはぁっ！　こ、これで三つ目よ……げぷぅ」
「おぉおお、すげえ、どれだけ補給してもどんどん飲み干していく。ザーメンまみれの顔が最高に輝いてますよ、ベラドンナ様！」
「このち■ぽミルク牛男どもが……これがっ、メタパラノイア幹部のど根性よぉお～～～ッッッ」
程なく、ベラドンナが粘液まみれの髪を振り乱し、最後の飴をくわえ上げた。
「すごいですよ、プロデューサー！　今回も記録更新しそうです、さらに視聴者参加に関する問い合わせがコールセンターに殺到してます！」
局上層部がテロリストに占拠されていることなど知らないADから、嬉しい悲鳴が聞こえる。
そのはしゃいだ声に、テロリストのリーダーとドクター・ヴォクトはいささかげんなりした顔で女プ

ロデューサーを振り返る。
「この番組見てる連中って一体……」
「こっ！　これが、時代の選択という奴よ！」
テロリーダーとドクは、ほぼ同時に「それはないだろ」と心の中で突っ込まずにはいられなかった。
「さて――――」
と、気を取り直したリーダーが一転して酷薄な雰囲気を放ち、ナタリーは緊張する。
「いよいよ大詰めだな。あの馬鹿げた番組が終わったら、全市民に向けて犯行声明だ。もうこの街にヒーローはいねえ。いるのはザーメンぶっかけられてアヘってる女二人だけだってな！」
（クッ……どうにかしてキティたちにこちらの状況を知らせなきゃ。でも、この数のテロリスト相手に二人がどこまで戦えるか……）
一人は戦闘力こそあれ、未だ実戦経験に乏しい小娘、一人はキャリアこそあれ、本人自身の戦闘力には期待できない。
（考えるのよ、ナタリー。今、この街を救えるのはあの二人しかいないんだから……！）
「はぁっ、はぁ……げっぷぅっ。こ、これで勝負はイーブン、罰ゲームはあんたで決まりね……って、も、もう始まってる？」
ザーメンボウルの中の飴を手を使わずに取り出すという競技に、キティは参加することすらできず敗北してしまった。
妨害と称して痴漢行為を仕掛けてくる参加視聴者たちにいつの間にやら仰向けに押し倒され、上下の口に肉棒をねじ込まれ、陵辱されていた。
「んふぅううっ！　んぅ、んっ、げほ、けほっ」
「吐き出しちゃ駄目だよ、キティちゃ～ん。ほら、ちゃんと根元までくわえ込まなきゃ」
「も、もうやめ……むぐぅう」
「おおう、上に突っ込んだら下の締まりもよくなったぜ！　やっぱり若い娘のまんこはぷりぷりして最高だぁっ」
悪かったわね、とベラドンナは心の中で思うが、下手に口に出しては自分まで巻き込まれかねないので黙っておくことにする。
「じゃ、私は先に進ませてもらうから、せいぜい罰ゲームを愉しみなさい、キティ」
扉の向こうに消える女幹部を、少女は見送ることしかできない。
参加視聴者たちをはね飛ばすことなど、キティの怪力なら赤子の手をひねるより簡単なはず。
だが、むせ返るザーメン臭と男たちの下卑た笑いは少女のうぶな心に恐怖心を植えつけていた。
「おうっ、出るッ、メス穴にぶちまけてやるぞ！」
「ひぃ……やらぁ、な、中はいやぁああ」
どくっ、どくっ、びゅるる～っ。
腰を震わせ、膣のいちばん深いところに熱い塊がどくどくと注ぎ込まれる。
「おい、出したんなら早く代われよ！　俺さっきもベラドンナちゃんとやれなかったんだぜ」
「様をつけろよ、タコ助野郎！」
「はいはい、参加視聴者の皆さん、罰ゲームタイムはあと十分しかありませんよ。さくさくやっちゃってください～い」
「ひぃいいいんっっ」
ぐるんっとひっくり返され、四つん這いにされたかと思うと、今度はバックから、勃起ペニスを挿入しようとしてくる。だが、男のイチモツはかなりの巨根でなかなか挿入できないでいる。
「くそっ、まこ汁もほとんどないから、俺様のデカマラじゃきつそうだぜ」
萎縮してしまっているキティ自身は感じてはいないので、愛液はほとんど分泌されてはいない。男はいらついた声を上げる。
「おい、そこの皿寄こせ！　へっ、潤滑油代わりだ」
「な、なに……？　ひやぁああんっ、そんなものかけないでぇえっ」
ボウルになみなみと注がれた何十発分もの子種汁を、男は少女の尻にどばどばとぶちまける。
そうしてスーツの上から尻を揉みしだき、割れ目の奥にもたっぷりと塗り込んでから、一気にずぶりと根元までねじり込んできた。
「くひぃいんっ、お、おっきいよぉ……お股壊れちゃうぅう」
「はいは～い、お口もちゃんと使いましょうね。そらっ……！」
「むぐぅううう」
こうして再び上下の口を塞がれた少女は、肉欲に支配された参加視聴者にサンドイッチにされた格好でがすがすと前後から激しく犯される。
彼らははなからキティのことをヒーローだなどとは思っていない。
「ザ・ヒーローショウ・A」というエロエロな番組で、毎回毎回いやらしい目に遭わされる美少女、くらいの認識だろう。
しかも普段は画面を通じてしか見られない痴態が目の前で、肌で、性器で感じることができるのだ。
彼らがもし普段は良識を持った一般人であろうが、この夢のような状況に正気を失うのもある意味自明のことであった。
「あぁああ、キティちゃんのお口粘膜きもちいいよぉ～っ！」
「ふへへへ、このきれいな髪の毛にもザーメンの匂いをしみ込ませてやるぜ」
「いやぁっ、頭にかけないでぇえ」
泣き叫ぶ少女の頭からボウルの中の粘液をぶちまけ、鼻孔からそれを吸い込んだキティはげほげほと

淫乱魔女のご一行がやってきたのは――
ぼうけんのきろく 1
魔王復活の噂を耳にした勇者様と私は情報とあわよくば助力を得るため東方辺境最高と言われる「怠惰の魔女」を訪ねたが
同行の条件に私たちは魔女の呪いを受けてしまう
しかし呪いの肉欲に負けることなく北の王国シルトラントを目指し旅立った
今日ついにシルトラント王国領内に入り久しぶりの宿で――
ひゃうっ♥
あん
おおねがいっ
もう焦らさないで！しごいてっ
ださせてよぉ

もぉ……っ
あの魔女っ

毎晩毎晩
勇者様に…っ！

どぉしようかなン

おねがいっ
おねがいいいっ

出なくなるまで
頑張るからあっ

んふ
もーぉ勇者くんたら
泣き顔カワイイわぁ♥

やあっ
ささきっぽだめええっ
ままったく…
勇者様もなんて声…っ
隣の部屋まで丸聞こえじゃない…！
ここレも
すぐ消えるって言ったのに…毎晩こんなに…っ

御免！

ばんっ

あんっ♥

やあん

ひっ…くんっ♥

Lust Resort III

ラストリゾート とらいあと

MISS BLACK

最新単行本
『超昂閃忍ハルカ 心の巻』

好評発売中！

がしゃん
ぜぇ オォォ
ざわ ざわ
りょうしゅの　やかた
な
何でー!?
…オナニーしちゃいけなかったんじゃないのぉ?
ベルフェ＝ベル・ペオル
まほうつかい　おんな
Lv. 99
じょうたい：ちじょ
スターチス
メイド　めすがた
Lv. 99
じょうたい：OK
キリ
カサ
キリ
なっ!?
そ…っ
この触書のためではないかと
ボッ
ミランダ・ミンリィ
モンク　おんな
Lv. 19
じょうたい：ふたなり

…「当領地における
し射精…を禁ず」
な何で!?
道理でェ
はァ
キュン
シエリオ・シェーラ
ゆうしゃ　おとこ
Lv.20
じょうたい：しゃせいかんり
みィんな
ギラギラした目で
見つめてくると思ったわぁ
ぐちゅ
ぐちゅ
それは
ベルがそんな格好
してるからじゃ…
ギシ
ギシ
カツ
カツ
カツ

お前たちか！禁を破って淫行に及んだ余所者というのは！

ぼ 僕たちは——

黙れ！

聞けばお前は…その…っ…こ 行為をせがんでわめき散らしていたそうだな！

で ですが大地母神の教えには男女の営みを善いものと…

お前は女の身でありながらあさましくも…じっ……い……の挙句せ…せ……禁を破ったと言うではないか！

そ それは これは呪いで

お黙りなさい！

だだいたい どんな理由があろうと肉欲に惑わされるような——

ゆさっ

ぎゅっ

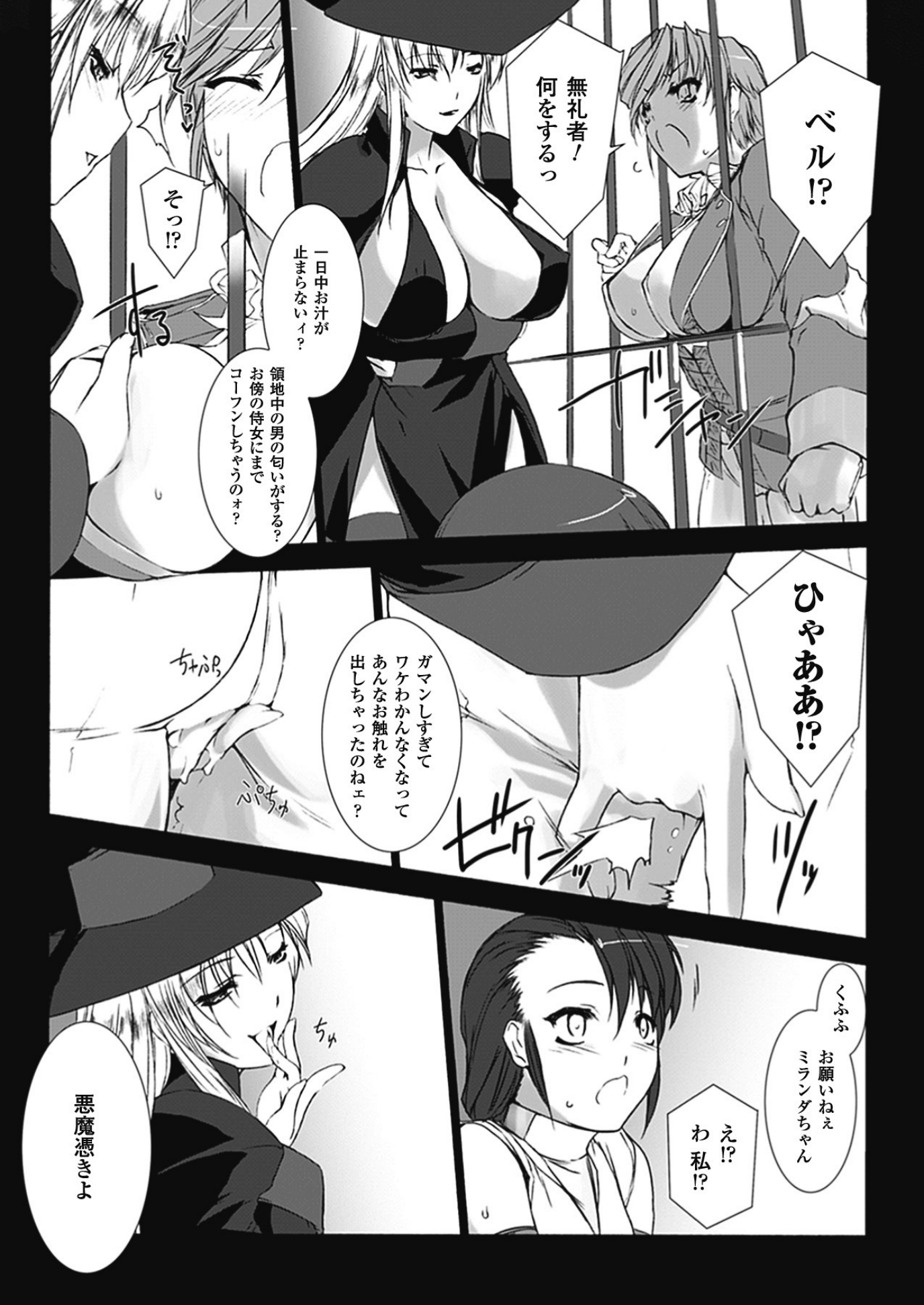
ぐっ

そわ

むちっ

そわ

…ははァん
なんだか様子がヘンだよ…？
スターチス
!?
ばっ
ガリ
ガリ
ガリ


ベル!?
無礼者！何をするっ
そっ!?
一日中お汁が止まらないィ？
領地中の男の匂いがする？お傍の侍女にまでコーフンしちゃうのォ？
ひゃああ!?
ガマンしすぎてワケわかんなくなってあんなお触れを出しちゃったのねェ？
くふふ お願いねぇ ミランダちゃん
え!? わ 私!?
悪魔憑きよ

な何をする!?
やめろ!

ガシャン

ガシャン

やちょっ

わ私まだ助祭見習いですから!悪魔祓いの手順とかまだだから!

大丈夫よぉ

大地母神の大司教任命の条件そのイチ

大地母神と同じフタナリであるコト

ニチュウッ

ズズズ

ひぎっ!?

うやあああ!?

ひいいっ♥
ききもちい…ぃ
あぅ…ぁ
はじめては痛いと聞いていたのに…っ!?
ふぇ…へ
うう…っ
それではまずー
司祭の精を注いで悪魔を誘き出すぅさ 出しちゃって♥
そそんなそれでは孕んでしまう…!
なっ!?
くんんんっ♥
ひあああああっ♥

地球を守るため現れた美女が、
最愛の恋人の前で嬲られる――!!
堕ちた翼
文明監察官アイカ
小説／壱状什
挿絵／水月あるみ

時折、赤い夢を見る。五歳の少女は燃え盛る車に取り残された両親を、ただ見ていることしかできなかった。

「愛歌……あいかーっ！」

両親の必死の叫びが聞こえる。

「お父さん、お母さん！　やめて、助けて！　お願い……殺さないで！」

駆け出そうとする自分を、誰かが押さえつけ、首筋にチクリと痛みが走る。

夢はいつも、そこで途切れるのだ。

九重愛歌は地球という星を愛している。だから今日も、走っていた。

――アイカ。君の動機は、幼いころに人買いにさらわれた経験によるものだ。

――誇り高き文明監察官として、常に冷静な判断を忘れるんじゃない。

〝先輩〟の言葉を振り払うように頭を振る。ショートボブの赤毛が陽光にきらめき、眼差しは行く手を見据えた。

「熱くならないわけ、ないでしょう！」

美貌が見つめる先、都市の中心部は緊急事態の真っ只中だった。

「ヘリアルだ、ヘリアルが出たぞー！」

「逃げて、みんな殺されちゃうわ！」

愛すべき故郷の人々が逃げ惑っている。彼女はそれを見過ごせない。〝監察官〟として、そして地球人として。

「――ギュルルルルッ！」

人々の流れに逆らい、現場に足を踏み入れる。そこには一匹の怪物がいた。

端的に表現するなら、二本足で立つ人間大の蟹だ。飛び出した両目を蠢かせ、巨大な鋏を倒れた老婆に向ける。

愛歌が息を呑んだ瞬間、若き刑事がその場に飛び込んで怪物に発砲した。

「逃げてお婆さん、早く！　……くそっ、ヘリアルめ！」

青年は何度も発砲するが、蟹の強固な甲羅をスケールアップさせた怪物には通じない。逆に怪物が鋏から放った突風に吹き転がされる。

「葉介さん……また無茶して！」

葵葉介、というのが青年刑事の名だ。その勇気と正義感は美点だが、怪物ヘリアル相手では無謀すぎる。

（名付けてクラブヘリアルってところね。装甲は厚そうだけど……！）

愛歌は物陰に隠れて胸の谷間からペンダントを引っ張り出した。

地球外文明の災厄には、地球外文明の力を。ペンダントヘッドのクリスタルを、天に掲げて叫ぶ。

「〝着光〟！」

クリスタルに、環を重ねた星の紋章が浮かぶ。溢れる光が全身を包むと同時に、地を蹴る。全身に装甲が転送され、鋼鉄の翼が開いた、そして。

「そこまでよ！」

ガギィッ！　光を纏った体当たりでヘリアルをはね飛ばす。今度は怪物が無様に転がる番だった。

「ギュルル⁉」

光はさらに追撃して炸裂音を響かせる。充分に敵を痛めつけた光の球は、青年を守るように降り立った。同時に輝きが霧散して、新たな姿を見せつける。

今の彼女の名は、愛歌ではない。

「君は、ヘブンズフェザー……っ！」

呟きを受けた背に、翼が収納された。

優れたプロポーションを赤と黒の極薄ボディスーツに包み、真紅の装甲で防護する女戦士。左手にはヘリアルを切り刻んだ、光子結晶剣を逆手に握る。

葉介のいるアングルからは、尻肉の盛り上がりや腰のくびれ、腕の動きに追随してたぷんと揺れる下乳の動きが丸見えだったが、本人は気にすることもなく、名乗りを上げた。

「汎宇宙文明連合、文明監察官（インスペクター）――ヘブンズフェザー！」

ヘブンズフェザーこと愛歌は空いた右手で胸元のエンブレムを示すと、怪物を操る悪意に向けて宣告する。

「星々に潜む悪意よ、よく聞きなさい」

女戦士は右手に剣を持ち替え、左腕の装甲に収納した。剣の刀身は収納と共に分解され、やがて装甲から柄だけが突き出す形となる。

「地球での悪事は、汎宇宙文明連合が許さない。今までも、これからも！」

宣言と共に響く澄んだ納刀の音が、怪物の命脈を完全に断ち切った。

「ギュルルルルルルル――――⁉」

ブシュ！　ド、ド、ドガァァァッ！

攻撃を打ち込んだ目の根元全ての関節から小爆発を連鎖させ、倒れ込んだ怪物が爆発四散した。

「……デリート、完了」

ヘブンズフェザーは構えを解く仕草で周囲に戦闘の終了を示した。

「ありがとう、ヘブンズフェザー！」

「助かったー！　かっこいいぞー！」

事態の収束を悟った市民たちが声援を送る。その中には、青年刑事が守った老婆もいた。

真紅の天使は安堵しながら、立ち上がろうとする葉介に向き直る。だが口を突いて出たのはお小言だ。

「葉介さん。ヘリアル相手に無謀すぎよ。もっと自分のことを大切にして！　明日はデートなんだから！」

「ひぃっ！　何で俺のことを⁉　え、えーと……どこかで会いました？」

気安く話しかけられて硬直する青年の姿に、女戦士は我に返った。組織の方針で正体を明かしていないのだ。

「コホン。私は文明監察官、何でもお見通しなのよ。それでは、さらば！」

「え、いや、少し話を」

刑事の制止を無視して、赤面を隠した仮面戦士は翼を広げて飛び立った。

「相変わらず、すげぇ……けど本当に何者なんだ、ヘブンズフェザーは？」

救われた青年刑事は呟く。戦士の正体に気付くようなそぶりはなかった。

（いけないいけない、葉介さんの顔を見たらつい気が緩んじゃった……明日のデートは大丈夫かしら）

母船を目指して飛翔しながら女戦士はくすりと苦笑を漏らした。

正体不明のヒロインも楽ではない。

コンクリート打ちっ放しの薄暗い部

屋。装甲乙女の宣言を残して、壁に埋め込まれたモニターが砂嵐を映し出す。
部屋の主は結晶化した髪を揺らし、ソファにもたれて笑みを浮かべた。
「ヘブンズフェザー、これまで俺のかわいいヘリアルの実地テストを邪魔してくれたが……それも終わりさ」
男は透明な板――記録媒体を手中で閃かせ、刻まれた文字を読み上げた。
「ココノエ・アイカ……あの時のガキが、今や連合の雌犬とはな。よおく見たなレイカ、あれがお前の姉貴だ」
懐かしげに、楽しげに、忌々しげに。晶髪の男は振り返る。
「ふぅん、あれがお姉さまですかぁ♪」
背後に立つ少女、レイカがソファに手をついて画面を覗き込んだ。全裸の乳房が重量感たっぷりに揺れる。男はレイカを見上げて命じる。
「分かってるな。あの女を丁重にお連れするんだ。しっかりやれよ？」
「はぁい……それで、んぅ……ご褒美の前借りってできますかぁ？」
抱きつく少女の甘く乱れた貌は、髪色を除けば愛歌に瓜二つだった。
岩礁に擬態した宇宙船、モビィディック。愛歌の住み処は海底にある。
『――やあ、アイカ。未知の風土病にかかってたりしていないかい？』
星間通信用のモニターに映し出されたのは、凹凸の少ない風貌をしたゼララス星人だ。愛歌の先輩でもある。
愛歌はコンソールに肘をついた。行儀は悪いが、気にする仲ではない。
「ミルギ兄さん、いえ、監察官。地球が私の故郷だって忘れてません？」
『地球が未確認惑星なのは確かだ。睨まないでくれよ』
汎宇宙文明連合。多くの惑星文明による宙域統合体に二人は所属している。ゼララス星人はその中心的立場にいた。
「……何はともあれ、いいところですよ地球は。生態系もバリエーションに富んでいて、見ていて飽きません」
ミルギは肩をすくめる。
『だから地球では豊富な種類のヘリアルが作られ、その製法が闇マーケットで販売され、犯罪者に渡っている』
「それは惑星地球の責任じゃありません。地球人自体は温和傾向で、文明レベルこそまだ及びませんけど……」
反論するアイカに、先輩監察官が三本指の手を突き出して遮った。
『君は文明監察官だ。連合の一員として、最近になって新たに発見された地球という惑星を評価し、連合内の位置づけを決定しなくてはならない』
「……その上、ヘリアルを売りさばく犯罪組織ヴァルスキャルブの捜査と逮捕も行わなくてはならない」
ミルギは今度は首をすくめた。
『地球に溶け込めるような種族は稀だからね。新米のアイカには苦労させていると思うよ。でもヴァルスキャルブを追っていく過程でアイカの出身星が見つかったんだから、ラッキーだ』
「……ぶん殴りに帰っていいですか」
愛歌の内から怒りの感情が湧き上がる。ゼララスの青年は構わず続けた。
『組織の首魁は、グリス星系人ガルズと目されている。君の両親を殺害し、君を辺境種として売り飛ばそうとした非道なハンターだ。僕らが偶然君を救出しなければ、どうなっていたことか』
ミルギの操作でモニターに写真が挿入される。外見年齢は三十代半ば。風貌は地球人に近いが毛髪の一部が集まって結晶化しているのが特徴だ。
『因縁の相手に熱くなって我を失えとは言わないが、本分は見失っちゃいけない。いいね、アイカ文明監察官』
「……ええ、分かってますってば」
答える後輩に、ゼララス星人は頷く。
『では、そちらの時間で三十日後。言いたいことは定例報告会で聞こう』
通信が切れて、モニターが外の様子を映し出す窓へと変わった。
愛歌はペンダントを指でいじる。ヘブンズフェザーへの変身アイテムであり、宇宙の治安を維持する汎宇宙文明連合のエリートたる証だ。
だが、見つめる新米監察官の胸には、言いようのないくすぶりがあった。
「昔は優しかったのに。監察官を長く続けてると、ああなっちゃうのかな」
愛歌が保護された当時、連合は地球の存在を認知していなかった。今も連合は地球を未開の地と位置づけている。
「連合第一主義っていうか……あら」
言葉にするたびに心の中で黒いものが膨らみそうになる。そんな時視界に入ったのは窓に貼りつく魚の姿だった。
「この船を岩場だと思ってるのね」
愛歌の表情に笑顔が戻った。色々な生き物が生息する地球は、生命感に溢れて断然興味深い。進化の到達点に行き着いてしまった星よりも、ずっと。
「やっぱり、この星は守りたい。たとえ監察官じゃなくっても」
分厚い耐圧窓から離れてなお、愛歌は海底の光景を眺める。
「さ、明日のデートの支度をしなきゃ」
葉介の顔を思い浮かべると、心が浮き立った。心優しく勇敢な青年刑事は、いつしかミルギ以上の憧れの対象になっていた。

翌日。必死で休暇をもぎ取った葵葉介は、恋人とのデートを楽しんでいた。
「愛歌ちゃんと初めて会った時ってさ。路地裏で愛歌ちゃんが腕から血を流して倒れてるのを見つけて、あの時はびっくりしたなぁ」
昼食を終えて歩きながら、ふと二人の出会いを回想する。愛歌は目元を染めて、唇を尖らせた。
「やだ、覚えてたの？　恥ずかしい……初出撃でドジっちゃったのよ」
「……え、ドジったって何の話？」
「あ、ううん何でもっ」
懐かしむ青年とは対照的に、恋人はなぜか恥じらって、ぶつぶつと呟く。相変わらずツボがズレてるところがかわいいと思いながらも、話を進めた。
「で、この辺に慣れてない愛歌ちゃん

を案内していくうちに、好きになって」
「それで、世間知らずな私は騙されちゃったのでした。付き合ってください、って言うからどこかへ連れていってくれるのかなって思ったら」
冗談めかして愛歌が混ぜっ返す。青年刑事は彼女のリズムに乗っかった。
「道理でOKしてくれるわけだ」
「……でも私、後悔はしてないよ。言ってくれたのが葉介さんでよかった」
――かと思えば、はにかんで見上げてくるのだから、恋人としてはたまらない。主導権は握られっ放しである。
咳払いして葉介は気を取り直した。
「愛歌ちゃん、気付いてる？　今日で、俺たちが出会って半年。映画を見に行ったり、手を繋いだりはしたけど」
伸ばした手が、恋人の指に触れる。ぴくりと、隣で強張る気配がした。
やがて、愛歌の柔らかな指が葉介の指に絡まる。行ける、今だ。恋する刑事は自身を鼓舞して、言葉を紡いだ。
「もっと、さ。恋人らしいこと……共有、していきたい、っていうか……」
「ぁ……」
言いたいことを察したのか、愛歌の顔が耳まで赤く染まった。きゅっと頼りなげに手と手が繋がる。ちらと見やると、無防備な胸の谷間が目に入り、いかんいかんと視線をそらす。
白のTシャツにデニムの上下と色気のない恰好なのに、ペンダントが胸の谷間に収まっているのを見てしまっては余計なことを考えてしまう。違う、それはまだ早いと懊悩する青年に――。
「葉介さんっ！　喉が渇いちゃったからジュース買ってくるわねっ！」
一度だけぎゅっと手を握り返し、愛歌は猛ダッシュで走り去ってしまった。
そのまま自分の手に視線を戻す。愛しい人の掌の感触と〝えも言われぬ〟やっちまった感〟が交互に心を揺さぶる。
「ってダメだ俺！　何で焦って真昼間から言っちゃうかな⁉　でも脈あるんじゃね⁉　って言っていいのか俺⁉」
――ぱちぱちぱちぱち。
周囲の視線も構わず身悶えて自問自答をする葉介は、拍手の音を聞いた。十秒ほどして、空耳ではないと気付く。
「よかったわね、葵葉介さん」
「ってあれ、愛歌ちゃ……ん⁉」
振り返ると、そこには愛歌そっくりの少女がいた。心なしか幼く見える一方で、愛歌とは対照的なくすんだ銀髪や明るい金の瞳が目を引く。
それに何より胸の谷間やへそ、太ももが丸見えの扇情的な革の上下という恰好が挑発的だ。
「おい、あの子ってモデルかな」
「すげぇエロ服。何かのイベント？」
周囲の男たちがざわめくのが聞こえた。服の拘束にひしゃげた乳房に、きゅっとくびれた腰。歩くたびに男を誘うように揺れる尻肉はミニスカートからギリギリはみ出してしまっている。
なまじ同じ顔をしている分愛歌よりも背徳的に見えて――。
「君、は……？」
「あたしはレイカ、お姉さまの妹。よろしくね？」
レイカの微笑みに引き込まれるように、葉介はただただ頷いた。
「う、うん……それにしても愛歌ちゃんに妹さんがいたなんてな。本当にそっくりだし。でもその恰好は目の毒っていうか、一応俺警察官だしさ」
姉妹だからだろうか、無防備なところも似ている――いや、むしろレイカの方は周囲を挑発しているのか。狼狽する青年に、妖少女が問いかける。
「ふふ。ねえ、葉介さんはお姉さまのこと、どれだけ知ってる？」
「え？　あ、ぁあ……。動物園とか水族館、あと意外と工場なんかを見るのが好きだったり、映画好きな割にあんまり知らなかったり、とか……あれ？」
指折り数えていくと、むしろ知らないことが多すぎることに気付いた。住所も、経歴も、家族構成も。
「じゃあ、あたしのことも当然知らないんだよね。ねえ……もっとお姉さまのこと、知りたくない？」
葉介はレイカの誘いに頷いてしまう。
路肩にライトバンが停まった。

愛歌は買ったジュースをぶら下げて、恋人の様子に思いをはせる。
（そ、そうよね。もっと恋人らしいことは、したいわよね）
五歳で連合に保護されてから十七年ほどを異星人の中で過ごしてきたが、地球の恋人同士が何をするかは書籍などで簡単に知識を仕入れている。
「――ごめんなさい、待たせちゃって」
動揺を抑えて戻ってきた愛歌だったが、その場に恋人の姿はなかった。代わりに、手をひらひらさせていたのは、
「はぁい、お姉さま♪」
「……え？」
自分と瓜二つの、知らない少女だった。愛歌は呆気に取られてたっぷり五秒はフリーズする。自分そっくりの自称〝妹〟を前に湧き上がったのは、息の詰まるような疑念と羞恥心だった。
「お、お姉さまって……あなた、誰……っ？　私に、そっくりだけど」
五歳のころに両親と死に別れた愛歌に、妹がいた記憶はない。そして、自分そっくりの少女が痴女めいた恰好をして周囲の注目を浴びていることに、焦りを覚える。愛歌と少女を見比べる通行人が多く、ひそひそと声が聞こえる。
「あたしはレイカ。はじめましてお姉さま」
「レイカ……？」
やはり聞き覚えはない。戸惑う愛歌に、少女は微笑みかけた。
「ヘリアルプリンセス・レイカ。ヴァルスキャルブから迎えに来たのよ、ヘブンズフェザーお姉さまっ」
「っ！　あなた……ヘリアル⁉」
地球人はヘリアルを生み出しているのがヴァルスキャルブという組織であることも、ヘブンズフェザーの正体も知らない。それを口にした愛歌そっく

りの少女がただものであるはずもない。
構えを取る愛歌に、少女はむくれた。
「むぅー、確かに私はお姉さまの血液サンプルから生まれたヘリアルだけど、そんなに怖い顔しないでよぉ。それにしてもお姉さまってば熱くなりすぎ。大事な人を忘れちゃうなんて」
「大事な、人……えっ？」
周囲を見回す。いるはずの葉介の姿がなかった。愛歌の頭に血が上る。
「レイカって言ったわね。あなた、ここにいた彼を、どこへやったの⁉」
対するレイカが、笑みを浮かべる。間違いない、恋人はヴァルスキャルブに捕まってしまったのだと悟った。
「それはぁ、あたしを倒したら教えてあげるね？　……〝極光〟」
レイカが呟くと、二人の間に影が落ちた。人々のどよめきを受けながら現れたのは、巨大なメカコウモリだ。
「――みなさん、逃げて早く！」
嫌な予感しかしない。愛歌が声を張り上げると、ギャラリーは蜘蛛の子を散らすように逃げていく。
そして愛歌の目の前で、いくつかのパーツに分割されたメカコウモリがレイカの装甲となった。グローブやブーツに武装・駆動ユニットが接続され、背中から漆黒の翼を広げる。一方、胸元や腰回りはボディスーツのままだ。
愛歌はペットボトルを放り出し、胸の谷間からペンダントを引き抜いた。クリスタルを天に掲げ、叫ぶ。
「〝着光〟！」
瞬間、コールを受けた母船から放たれたエネルギー光球が天空から降り注ぎ、愛歌の姿を覆い尽くした。
眩い光の中で衣服が分解転送され、愛歌は裸身をさらす。揺れるバスト、震えるヒップに極薄の強化繊維が密着し、その上に真紅の装甲が装着される。
「エナジウムアーマー、起動！」
ふっくらとした唇を引き結んだ美貌もまたフルフェイスヘルメットに包まれた。連合が開発した強化装甲服を纏い、愛歌は変身する。
翼を広げて光を振り払い、ヘブンズフェザーは空から漆黒の敵を睥睨した。
「文明監察官ヘブンズフェザー！　あなたをデリートします！」
「いいよお姉さまっ。やってみせて！」
レイカが翼を広げる。ヘブンズフェザーはレイカへと突撃した。
「フェザーセイバー！」
「ヘリアルサーベル！」
ビルの谷間を縫うように飛行しながら、二人は左腕装甲のグリップを抜き放ち、光子を結晶化させたクリスタル状の剣を実体化させる。
飛行速度は互角。ビルに遮られた互いの姿が見えた刹那、加速をかけた。
「「てぇぇやぁあっ！」」
裂帛の気合と共に激突。都市部から遠ざかりながら幾度も打ち合った末、折れたのは悪魔の剣。だが押されたのは真紅の天使の方だった。
「ほらほらぁ！　本気を出さなきゃ悪戯しちゃうよっ！」
「くっ――！」
反撃に転じようとするヘブンズフェザーの眼前からレイカの姿が消える。噴射光を追って振り向く監察官に、急旋回した悪魔のキックが突き刺さった。
「くぅぅ……っ⁉」
衝撃が突き抜ける。振り返りざまに斬りつけるが、紙一重で避けられた。
（強化装甲は一世代前のだけど、装着者がヘリアルだから、反応速度じゃ勝てない……⁉）
「彼が死んじゃってもいいのかなっ」
分析している間にも、ぐんとレイカが距離を詰めてくる。肉薄されて剣を水平に構える。肩に衝撃が走った。
「しまった⁉」
剣で敵の一撃を受け止めた鋼翼天使だったが、敵はもう一つの刃を装甲に突き立てていた。折れたヘリアルサーベルの切っ先が、肩装甲の張り出しごと翼を貫く。
――瞬間、ガクンと装甲が重くなった。バイザーが警告表示で赤く染まる。
『エネルギー流出。エナジウムアーマー、強度低下』
「まさか……ウイルスっ？」
制御プログラムがエラーを起こし、スーツ自体に蓄積されたエネルギーを消散させる。それに伴い、スーツ強度が低下しているのだ。
「大正解～♪　って、あれ？」
満面の笑みを浮かべたレイカが、初めて焦りの表情を浮かべる。剣を捨てた監察官は、その手でヘリアル少女を掴んで引き寄せたのだ。
「それでも……これならっ！」
「きゃっ、ちょっと！　放してぇっ！」
仮面戦士は少女の頭を抱え込み、エネルギーを全て翼に注ぎ込んだ。
「この距離ならちょこまかできないでしょう？　マップオープン！」
母船にアクセスして、港湾地帯の倉庫街の座標を呼び出し、目的地に設定。
「ちょ、ちょっとお姉さまっ⁉　きゃあああああっ！」
「肉を斬らせて骨を断つって言うのよ。まずはあなたを、倒させてもらう！」
漆黒を抱え込んだ真紅の流星は、一直線に地上へと突き刺さった。
――目を開けると、そこには古びたコンテナがあった。壊れた木箱が散乱して、埃が舞う。
「……う、つつ……やったの……？」
スーツの警告音に誘われ、混濁した愛歌の意識が浮かび上がる。
人気のない倉庫だ。屋根に空いた大穴から降り注ぐ日差しがまぶしい。
ふらつく体を無理矢理覚醒させて、スーツのコンディションに目を向けた。ノイズの走るバイザーに警告表示が弱々しく点滅している。エネルギー切れのうえ、コンディションも真っ赤だ。
「……捨て身で行きすぎた、かしら。羽も折れちゃったし……」
最新科学の結晶であるエナジウムアーマーは、今やただのボディスーツと軽装鎧にすぎない。折れた片翼の先端

を拾い上げ、軽率さを悔やむ。
「まずいわね。これじゃ、葉介さんを助けられない……そうだ、あの子は？」
「はぁい♪」
「っ！」
不意に自分と同じ声がして、愛歌は振り向く。そこには、装甲を解除したボディスーツ姿のレイカがいた。埃まみれだが、その肢体には傷一つない。
（これがこの子の回復力……）
得意げな黒の少女に見下され、ヘブンズフェザーはその能力に戦慄する。レイカは楽しげに笑った。
「やっぱり強いなぁお姉さま。ガルズ様に作ってもらったアーマーが全壊だもん。でも私の勝ちだね。どうする？これじゃ葉介さん死んじゃうよ？」
「っ、それは！　それだけはやめて！葉介さんは関係ないのよ!?」
愛歌の顔から血の気が引く。それだけは阻止しなくては。女戦士は立ち上がり、気付いた。立ち込める埃の奥、レイカの背後に人影が見える。
「……すげぇ、ヘブンズフェザー!?ほ、本物かよ！」
「レイカちゃん。さっきの話、マジ？」
染めた髪や悪趣味なアクセサリーからすると、倉庫を根城にしているチンピラなのだろう。四十人以上いる彼らが、なぜかレイカに手懐けられている。
「じゃあお姉さまには、セカンドチャンスをあげるね？」
「何の、こと……っ？」
レイカの手が、愛歌のうなじに伸びる。抵抗する間もなくびり、と痺れが走り、愛歌の体全体に広がる。
「しまっ、生体スタンガン……っ？」
「この人たちみんなを、お姉さまが満足させてあげるんだよ？」
かろうじて保たれていた意識は、妖少女の囁きと共に暗転した――。

赤い夢を見る。フィルターがかかったように、何もかもが赤い夢を。
だが、今回はいつもの夢とは違った。
「ついてねぇなぁ、俺もお前も。ガキ一人じゃどうしようもねぇだろ、ん？」
谷底で燃える車が遠ざかる。結晶が生えてごつごつした手が、泣きわめく少女を不器用にあやす。ぼやけた顔、ひび割れた声。目をそらす少女には、詳しいディテールが分からない。
「まあ、じっくり仕込めば上玉に育つ。そうすりゃテメェで食い扶持も稼げるし俺も潤う。どっちもお得ってことで手を打とうじゃねぇか」
分からない。分かりたくない。少女は首を振る――。

乱暴に頭をシェイクされ、愛歌は目を覚ました。
「今の は……ぅ、ぁんん……ぅっ？」
半開きの口から勝手に声が漏れる。不思議な心地よさが全身を循環する。訝る愛歌を、チンピラたちのにやついた顔が見下ろしていた。
「これがヘブンズフェザーの素顔か。マジでレイカちゃんそっくりじゃん」
「！」
男たちの言葉に、愛歌は自分の顔に触れて我に返った。ヘルメットがない。
「あなたたち、何を……しまった、ヘルメットを!?　返し……きゃんっ!?」
反射的に手を伸ばした瞬間、愛歌の胸に鋭い快感が走った。
「おはようお姉さま。ご機嫌いかが？」
「レイカ……んっ、なに、してる……ひぃっ？　や、やめなさっ、あぅっ！」
振り返ると、レイカが背後から抱きついて乳房を押しつけていた。愛歌の胸に、ボディスーツ越しに十指を食い込み、形が変わるほどに揉みしだかれる。乳房全体がかぁっと熱くなり、愛歌は戸惑った。
（何これ……っ、どうしてこんなっ？）
もがく愛歌だが、身体能力ではレイカにかなうはずがなく、拘束から抜け出せない。耳元で自分と同じ声が囁く。
「ここね、不良さんたちの遊び場だったんだって。そこを荒らしちゃったから、あたしたちがお詫びにご奉仕するんだ。ね？」
「そういうこと。まさかあのヘブンズフェザーが痴女だなんてなぁ」
一人の男が言って迫る。すでに両者の間で話はついているようだが、愛歌には言っている意味が分からなかった。
「痴女？　ご奉仕？　……ば、バカなこと言わないで……ひぁっ、やぁっ！」
一拍遅れて、意味を察する。もがこうとする愛歌だったが、耳穴に熱い軟体を差し込まれてかわいらしい悲鳴を上げてしまった。レイカの舌だ。
「恋人さんを助けたいんでしょ、お姉さま。ガルズ様も見てるんだよ？」
「っ、それは……くぅん……っ！」
びり、と乳房全体に走り抜ける電撃に、悲鳴が裏返る。
レイカの要求を呑まなければ、葉介の身が危ない。身を強張らせた監察官の目の前で、男たちがズボンの金具を緩め始めた。
「もう始めてもいいよな。ほらよっ」
「ひっ!?　やっ、やだっ！」
男たちが、いきり立つ剛直を見せつけてきた。愛歌は思わず動きを止めて、嫌悪感から目を背けた。
（男の人の、ペニスって……あ、あんな、グロテスクなのっ!?）
本で仕入れた知識とも、幼いころ父と風呂に入った記憶とも違う牡凶器の姿に軽いパニックを起こす。そんな愛歌を、胸果実から走る電流が現実に引き戻した。レイカの指がボディスーツの上から両の突起を捉え、しこしことしごき上げていた。駆け抜ける性感に耐えようと、ぐっと両手足が強張る。
「さ、先っぽ、しないで……ひっ、ひゃあんっ！　何で、こんなぁ……」
「だってお姉さまのクローンだもん、気持ちのいいとこはお見通しだよ？それよりもぉ、ほら、おチンポ。ちゃんとチューしてあげようね？」
妖しい感覚に支配されていく中、一本のペニスが頬肉に突き付けられる。なすすべなく腐臭にさらされる悔しさ

に、涙が浮かびそうだった。
（ちゅ、ちゅう、って……キス⁉　そんな私、ファーストキスもまだなのに）
「やらないとぉ、葉介さんがどうなっちゃうかなぁ？　言うこと聞いて？」
「っ！」
囁きが、愛歌のもがきを押さえつける。選択権など、最初からないと。
「……言うことを聞いたら、彼を助けてくれるの？」
「もちろんだよ、お姉さまっ」
妖少女の安請け合いを信用するしか、今の愛歌に縋るものはない。
（ごめんなさい、葉介さんっ）
「わ、分かった、わよ……ん……っ」
屈辱にまみれ、心の中で恋人に謝り、愛歌は決死の表情で目の前の肉棒の先端に口づけた。しょっぱい牡味が唇を伝って流れ込んでくる。だが、それで男が満足するはずがない。
「もぉ、チューだけじゃダメだよっ。お手本見せてあげるね？」
「へへ、じゃあ俺はレイカちゃんと」
レイカが言うと、別の男が肉棒を突き出してきた。愛歌の肩越しにレイカが身を乗り出して、それを咥える。
「んっ、はむ……れる、ちゅぱ……♪」
（な、ななな、何をしてるの⁉）
突如自分の真横で行われた淫技に、初心な監察官は目を白黒させる。
じゅるっ、じゅぽっ、ずじゅじゅっ。
喉奥まで醜悪なペニスを頬張り、蕩けた顔を自分から前後させる。自分と瓜二つの少女が見せる積極的な愛撫は、純情監察官の理解を超えていた。
「ほら、さっさとしろよ！」
「んっ、んぶぅっ⁉」
レイカに気を取られた隙をついて、業を煮やした男が肉刀で愛歌の唇をこじ開け、突き込んできた。息が詰まるが、えずくことすら許されない。
「歯は立てるなよ？　舌も使って！」
「ぐぶっ、くるしいっ、ぅんんん～！」
ぶじゅっ、ずじゅじゅっ！
粘膜に牡エキスを擦り込まれる。息ができず、気が遠のく。必死の思いで、舌でペニスを押し返そうともがいた。
「お、下手だけど、これはこれでっ！」
「うそ、おっふぃく……、ふゅ……！」
口の中で肉棒が膨らむ。押し戻そうとする舌が、男の裏筋に触れる。より力強くそそり立つ勃起に口内を占領され、顎が外れそうになる。
「ふひゅ、ふひょほっ」
喉奥を塞がれ、頬を裏から押し上げられ、酸素を求めた鼻が情けなくひくつく。男たちがさらに喜んだ。
「一人で盛り上がるなよな牝豚天使ちゃん。俺たちも待ってるんだからさ。ほら、前後に動かして……」
「優しく頬むね、ヘブンズフェザーちゃん！　うお、すべすべ～」
「んく、ひょうひに、のってっ！」
姿勢を支えることしかできずにいた両腕を掴まれ、一本ずつペニスを握らされる。極薄のグローブは剛直の熱さや形、先走りのヌルつきを正確に愛歌に伝え、滑らかな感触で男を喜ばせる極上の淫具になってしまう。
ぐりゅっ！
「んぐっ、ふにゅぅぅっ！」
喉奥を抉られ、頭の芯がカッとなった。唾液と我慢汁が混ざり合って、唇の端からだらしなく垂れ落ち、胸の谷間を濡らした。
「そうそう、そこの出っ張り……もうちょい強くてもいいや……おおっ！」
言われるままに両手の欲棒を前後に擦りたて、雁首の段差に指を這わせる。ヘブンズフェザーの慣れない奉仕とあってか、男たちには好評だった。
「いい子だなぁフェザーちゃん。どんどんエロ顔になって」
耳裏をくすぐられると、ピリピリと頭が痺れる。酸欠のせいもあって濁る思考に、心地よさが侵食していく。
（そんな顔、してな……きゃっ！）
背中の支えが消えて、愛歌は姿勢を崩しかけた。レイカがどいた後を、体格のいい男が入れ替わりに抱きとめる。
「もう一人でも大丈夫だよね。あたしもご奉仕に専念したいし。みんな、本番はダメだからね～♪」
「んぅっ、ぷはっ！　ちょっと、レイカ……ぁぁんっ？」
レイカが男たちに抱きついて離れていく。代わりの男が背後から乳房を鷲掴みにした。自らの写し身に嬲られ、情欲に膨らんだ果実が押し潰され、甘い声を上げてしまう。
「おほっ、ずいぶんいい声で鳴いてくれるじゃん。そそる～」
「い、今のは、違うっ、違うの！」
悔しくて否定する愛歌だが、その様子が陵辱者たちを調子づかせた。
「まだこれからだぜ？　ご開帳～」
「ひっ、や、やめ……っ！」
ビリ、ビリビリビリィィッ！
強度を失ったボディスーツが破られる。桜色に染まった88センチの乳房が、重力に逆らってツンと上向いた乳首が、男たちの目にさらされた。
「ああ、見られてる……っ」
男の息が乳肌をくすぐる。自分の裸が彼らの記憶に一生残ると思うと、何もかも投げ出して逃げたくなる。
「おお、やっぱりでけぇな！　先っぽもびんびんじゃん！」
「それは、レイカが……んぶっ⁉」
弱々しい抗弁は、再び捻じ込まれた肉棒に塞がれた。突き刺さる視線が、胸の表層から最奥へと染み渡るような気がした。だが両手首は男の力で固定されて胸を隠せない。
ビリッ！　ビリリッ！
さらに太ももやへそ回りも破られ、男の指が、亀頭が這い回った。スーツと柔肌の間にペニスが突き入れられ、体中に汚臭を擦り込まれる。
「んぅっ、んぐーっ！」
「こんなにエロいんだから、彼氏も毎日悶々としてんじゃねぇの？」
下卑た男たちの声に、改めて自分の姿を自覚させられた。口と両手でペニスを愛撫し、背後から形が変わるほど乳房をいじられ、へそと両脚にも一人

ずつ男の欲望を突き付けられる。
自分の姿を客観視してみれば、もはや監察官でも刑事の恋人でもなかった。一度に七人の男を満足させる性玩具だ。
（もう、こんなの、ダメ……私、葉介さんの恋人じゃいられない……！）
恋人にも見せたことのない恥ずかしいところを、次々と探り当てられる。自分が汚されていく。もう青年刑事の隣に立つことはできないだろう。
「彼女が自分のために体を張ってくれるなんて、そいつも幸せだよなぁ？」
「んっ、んぐぅ……！」
誰かが嘲るように漏らした言葉が、じわりと心に忍び込む。
（そ、そうだ、早く終わらせて葉介さんを助けなきゃ！）
「うお、急に積極的になって……っ」
「フェザーちゃん、それ、いいっ！」
葉介を助けるため。それだけを心の支えに、愛歌は三本のペニスに愛撫を続けた。牡臭が頭の中に充満して、徐々に思考の輪郭を奪っていく。
「ひょこがいいんれしょ？　先っぽを、くりくりされるのが、んんっ！」
どうすれば気持ちよくなるのか、反応を見ながら導き出す。それ以外を泣きたくなる心から締め出して奉仕に没頭する。揺れる愛歌の胸に、さらに何本もの牡槍が突き立てられた。
「うお、やわらけっ」
「フェザーのデカパイ気持ちいいっ」
（私の体で、喜んでる……そんなの、知らなかった、のにぃ……！）
胸肉をぐにぐにと犯され、剛直の熱さや臭いが内側まで染み渡っていくように思えた。ゾクゾクと性感神経がわなないて、背筋を震わせる。
しこり立った乳首を、乳輪ごと搾り出すように無骨な指が――きゅっ。
「んはぁっ――あむぅ？」
「おお、ずいぶんノッてきたじゃん」
喘ぐ唇が今度は積極的に肉棒に吸い付く。乳突起にも一本ずつペニスが突き込まれ、ひしゃげて快感を走らせる。
自分の知らない自分が暴かれる。不安と共に、なぜか胸がときめいた。
「おいおいお前ら、俺の楽しむところが……っとまだあったか」
背中から愛歌を支えていた男が、そう言って手を伸ばしてきたのはボディスーツに締め付けられた安産型のヒップだ。丸みを撫でられると、むずむずして腰を揺すってしまう。
「ああっ、わたひの体、んぐぅ！」
撫でられ、揉まれ、擦られる。それを気持ちいいことだと、体が覚えてしまう。潤んで蕩けた眼差しは、ぐいと背中を押されて戸惑いに揺れた。
「この辺かな？」
やがて太い指は尻の谷間に潜り込み、排泄孔を探り当てた。まさか、と被虐の女戦士は背筋を震わせた。
前のめりになった乳房が震えに合わせて揺れ、汗を散らす。
「んふぅ、しょこは、ひがっ？」
ずぶぶ……っ。
抵抗も空しく、スーツの皮膜を破って菊孔に指が潜り込んでいった。腸壁を揉み込まれ、粘膜をこそがれる。
（入ってるっ、私の中に、私じゃないのがっ！　ああ、でも……太いいっ！）
無遠慮に腸孔を押し広げられ、刺激を受けた身体が腸液を垂らす。指先が薄壁越しに子宮を揺さぶり、ぶじゅじゅ、と牝襞に本気汁を伝わせる。
「何だ、おマ■コから流れ込んできた汁でもうドロドロじゃないか」
「マジ？　触ってもないのに濡れ濡れ？　何だよこの淫乱ヒロインが！」
「んほっ、ひがう、ほぉっ、おむぅっ！」
ゆっくりと粘液にまみれた指を抜かれては突き入れられる。排泄の感覚を強制的に味わわされ、喘ぎを漏らす。
「濡れ、て……っ、私、ちが……っ！」
意識すると、自覚してしまう。まだ誰にも触れられていない秘唇がほころび、ボディスーツの内側に蜜を零していたことを。
「あっ、ああっ、ゆび、出たり入ったり、でたりはいったりしてるぅっ？」
腰が揺れる。指から逃げたいのか、迎えたいのか自分でも分からない。
その姿が男たちをさらに興奮させた。
「そろそろイクぞ！　全部飲めよ！」
「ふぐっ、んむぅぅっ!?」
口内の粘膜全てをごりごりと蹂躙され、体中が痺れる。直腸を抉る指が二本に増え、強制的に広げられる。乳首がめちゃくちゃにひしゃげられ、乳房を捏ねられる。へそも亀頭で抉られ、スーツと太ももの間で肉棒が膨らむ。
（何かっ、来る……きちゃうぅっ！）
どぴゅっ、どぷぷっ、びゅくーっ！
愛歌の目の前が、真っ白に染まる。初めての絶頂を迎えたヒロインに、祝砲の如く白濁が浴びせかけられた。
「んぶっ!?　ちゅ、じゅる……？」
青臭い臭いが口の中でも爆発する。頭を押さえつけられ、なすすべなく飲み下す。それでも飲み込めなかった分が逆流して、鼻腔や口元から溢れる。
（ああっ、あつくて、くさいのが……頭の中まで、入ってきちゃう……！）
「ん……ぷはぁ……っ！」
全身を内と外から白く染められ、肉棒から口を離す。零れた精液が胸元のエンブレムを汚した。
（何、だったの、いまの……あたまが、真っ白になって、ふわふわして……）
何もかもを、遠く感じる。愛歌は再び意識を手放そうとするが、そこに待ったがかかった。
「おっとフェザーちゃん。俺たちはまだ気持ちよくなってないぜ？」
「ぷぁ……はひぇ……っ？」
言葉すら紡げない女監察官に、次の剛直が迫る。順番待ちをしている男たちは、まだ何人もいた――。
あれから何時間経っただろう。絶頂させたペニスは、三十本以上になるだろうか。男たちは入れ替わり立ち替わり、時には一度達した男たちも交えて愛歌を慰み者にした。
「んぶっ!?　んちゅぷ、ぷはぁ……っ」

口内に汚濁が弾ける。愛歌はペニスに手を添えて、鈴口から残りを吸い出した。そうすると見ている男たちも興奮するのだと教えられ、実際にすると悦ばれた。

「あふ……いっぱい、出たぁ……」

離れていく肉棒と唇の間に、白い粘液の橋がかかる。それを目で追う監察官の口元は、だらしなく緩んでいた。

腰がひとりでにくねり、だらしなく広げたスーツの股間部には愛液の染みが広がる。一度指を抜かれたアヌスは絶え間なく痺れ、菊皺をひくつかせる。

「はぁっ、はひっ、ん……はぁっ」

仰向けに倒れ込んで愛歌は荒く息を吐いた。自分の呼気から精臭がして、もう臭いが落ちないような気がした。

「なぁ……これって本番いいんじゃね？　すっかり出来上がったしなぁ」

「っ！」

男たちの誰かがそう言って、屹立を見せつけてにじり寄る。何度もしゃぶらされたそれを目にして、愛歌の口の中でよだれが溢れた。

「ひゃ、ひゃめっ、やめてっ！　そんなっ！　私……っ！」

声が弱々しく掠れる。何度も目の当たりにした牡槍に処女を奪われることを想像して、恐怖を覚えたはずが。

こぷ、こぽぉ……っ。

「へぁぅ……！」

濡れて密着するボディスーツの内側で、期待に緩んだ秘唇が勝手に蜜を溢れさせ、肛肉にまで溶け込んでいく。

「ほら、足開いて……なっ！」

ベリリッ！

力の入らない足は男を拒めずに開いたままだ。スーツの股間ガードに男の指がかかり、皮膜ごと引きはがされる。

「やっ、だめ！　見ないで……っ！」

隠そうとしても、他の男に阻まれる。やがて男どもの前に、うっすらと赤毛で覆われた秘所が暴かれてしまった。

ぽってりとした肉唇は柔らかくほぐれ、ピンクの粘膜を牡たちに見せつけた。処女地は誰にも踏み荒らされたことのない清楚さを保ちながら、征服者を待つ従順さで奥の襞までさらけ出す。

「おお……きれいなマ■コじゃねぇかフェザーちゃん。やめてーとか言ってたけど、ほんとは欲しかったんだろ？」

「クリもぴんぴんだよな。この板っきれに押し当ててオナったりしてた？」

男たちが、愛液にまみれた小装甲を見せびらかす。ヒロインは首を振った。

「やめて、やめてよぉっ」

もちろんそんなオナニーなんかしたことはない。だが、一度意識してしまうと、自分から装甲板を押し当てて喜悦に酔う姿を想像してしまう。

誇りも何もかも投げ打って、女監察官は哀願する。だが好き勝手な論評を受けるたびに、壊れた体は喜悦の反応を見せてしまった。

「ま、そのくらいにしておいてやれよ」

やがて一人の男が愛歌の前に立った。しつこくアヌスをほじり、開発した男だ。彼だけが一度も満足していない。

「さて、さんざん我慢してたんだ。メインをいただくとしようかな」

「ひ……っ！」

言って男は、亀頭で秘唇をかき混ぜる。ぐちゅりと卑猥な音がして、愛歌の精神を被虐に追い詰めていく。

「――あ、やってるやってるぅ♪　でもぉ……そっちはだぁめ」

そこに割り込んできたのは、いつの間にかひと段落したレイカだった。腕に再装着されていた装甲の銃口から、パスッと気の抜けたような音がした。

「んごっ!!」

ペニスを誇示していた男が白目を剥いて卒倒する。男たちは倒れ込む仲間から飛び退き、レイカに目を向ける。

「お、おいっ、何するんだよ!!　俺たちは君の言う通りに」

「お姉さまのおマ■コは予約済みだからぁ、手出ししちゃいけないんだよ？　最初に約束したじゃない？」

言いながら、レイカが指を鳴らす。

ドゴンッ!!　ドガガガガガッ!!

倉庫の壁を突き破って、黒塗りにの高級車が突入してくる。さらにその後ろからトラックまで突っ込んできた。

「うお、なんだなんだ!!」

騒然とする男たちの前で、トラックの荷台からわらわらと全身黒ずくめの人影が溢れ出した。全体的な体型と口元は人間のそれだが、頭部の半分を占める複眼と額の触角が、自然界の生物ではないことを物語る。

「みんなに紹介するねっ。あたしの友達の、アントヘリアルのみんなだよ～」

ヘリアル。その言葉に男たちは青ざめ、愛歌と視線を行き来させる。動揺の上から畳みかけるように、レイカは愛歌を抱き起こしてウインクした。

「みんな、仲良くしてあげてね？　レイカからのお願い♪」

その言葉を合図に、アントヘリアルが男たちを包囲する。

「あ、あの人たちをどうする気!!」

「お姉さまは気にしなくていいの。ほらこっちこっち」

我に返る愛歌だったが、レイカに引き立てられて高級車の後部座席に詰め込まれる。隣に座るレイカがそのまま抱きついてきた。

「じゃあ、出してちょうだい」

「はっ」

レイカは助手席に座り、運転席のアントヘリアルに合図を出す。ヘリアルが喋ることに愛歌が驚く間も与えず、高級車はすべるように走り出した。

「い、一体どこへ」

「いいところに決まってるってばぁ。それよりも……真っ白なお姉さまをきれいにしてあげるね♪」

「ひぁっ、きゃんんっ！」

乳房にこびりついた白濁を舐め取られ、愛歌はたまらず声を上げた。

地下駐車場で車を降り、レイカの後を追う。乳房と秘所を手で隠しながら薄暗い秘密通路を抜けると、そこに広がるのは寒々とした一室だった。コン

ギャアッ!
ギャアッ!
心優しき自然保護官登場!
最新単行本
『エンジェリック・デザイア』
好評発売中!
エリートレンジャー
ソーニャ
SONYA The Elite Ranger
漫画 COMIC／おおたたけし
吸血コウモリか
他愛ない
さすが
ソーニャ君だ
日頃大型獣を
相手にしている
エリートレンジャーには
今回の任務は役不足
ですかな?
ムダ口はよせ
小動物が
目を覚ます
もう
この森の最奥だ
目的地が
近い

そう
そこに咲く絶滅危惧種とされる古代花
その種子の採取
つまらぬ仕事だが帝国植物園直々の命令だ
くれぐれも……
それに…
花は好きだ
かつて我が家の庭にもたくさんの美しい植物が…
手をぬくなと言いたいのか
愚問だな
さすがは元グリーンワルタの姫君雅ですな
帝国の命など断ると思っていたしたが…
滅んだ国だ
今は臣下として忠誠をつくすのみ
それ以上言えば通信機(マギフォン)をたたきこわす！
あ…

ここか……！
花々が月光に煌めいて星の中に居る様だ……
!?
この花粉は……!?
ドサッ
パキ
パキ
パキ
う…？
ギシ
バ…
こ…これは……!!?
ぬ
!?
豚猿（オークモンキー）!?

く…っ
何だ
コイツら…っ

ほ…っ 本部！
助けを…

おやおや
エリートレンジャーの
名が泣きますぞ？

あの花粉が
あらゆるメスを
マヒさせるという
伝承は正しかった
様ですな

何っ!?

あっ

さっ
さわる
なっ

至急
救援願い
ますっ!!

あっ

ひゃっ

くあああーっ

くっ
あっ
そんなぁっ!!
なるほど
力が入らぬ
ご様子
では皇帝陛下に
代わりましょう
ククク
元姫君よ
職務に励んで
いる様だな?
先ほどから
そなたの姿は
余の聖誕祭を彩る
よい余興に
なっておるぞ
ぴーー
宮殿の壁一面に
映しておるゆえ
下座の者にまで
はっきり見えて
おるそうじゃ
…!!
この花だが…
他の種族のメスに
卵を吐き出し
繁殖するという
伝承は真実かな?

陛下及び皆様
豚猿は触手花と
共生関係にあると
記録にあります

この花の実を
食べる為に
他種族のメスを使って
繁殖の手助けを
するのです

一級自然保護官の
身を挺した
貴重な映像を
ご覧下さい

くっ…

そっ
そんなっ

みっ

見る
なぁっ!!

ひっ

そっ
そこは…っ

んっ
うっ
ぐっ
くっ
そんなに
秘核を…っ
おおっ
くううっ
あっ
はっ
入って
きたぁ
あ…っ!!

おくっ
いきどまりっ
いきどま
あ――っ!!
はぁ
触手が卵を産みつけ始めた様です
なんか出てるっ
拡大してご覧頂きましょう！
おなかのおくなんかでてきてる――っ!!

あっ
あっ
失禁とは
みっともないぞ
元姫君
卵を産みつけ
られているメスの
臭いにつられて
豚猿共が
集まって
来ました
体の割に非常に
大きいペニスですが
肛門を犯すには
丁度良い様です
あっ!?
めりっ
めりめり
んあーっ!!

単行本1巻が
6月に発売予定!
公式サイトでキャペーン実施中!
イセリア英雄戦記
the Legend of the Icerya war
第19話 闇の女騎士
小説/狩野景 挿絵/牡丹
サーシャによる陵辱で倒れたセリーヌ。
彼女を助けたのはイセリアの調理長だった!
彼女の制止を振り切って進む女騎士を、
帝国の追撃が追いつめ、ついに訪れる
処女喪失の時――!

「く……っ、あう……」
奈落から浮かび上がるように意識が戻る。煮え滾るように熱い暗黒の汚泥に囚われていたような感覚が、セリーヌの肉体を渦巻いてた。
「ここは……？　確か私は、帝国の奴らに……。フィオナ……ッ!!　こうしてはいられないっ！」
バーンドベルグ帝国に捕らえられた皇女フィオナを救出すべく、セリーヌはエルスとともに兵を率い出立した。
しかし途中、帝国の皇女サーシャの待ち伏せに遭い、エルスと部隊を先行させるため単身足止めを買って出た青髪の騎士は、発情の薬物に蝕まれた肉体を敵兵たちに陵辱され、屈辱的な絶頂に意識を失ってしまった。
エルスたちは今どの辺りだろう。早く自分も追いつき合流しなくては。
焦る心で起き上がろうとする。
「んう……っ」
だが気だるい妙な火照りが、下腹を中心に全身へ広がっていた。
（こ、これは……。んくぅっ！）
力が入らない。それでも無理に踏ん張ると、にゅる、と熱いヌメリが脈打つ下腹の奥から股座へと滲み出てショーツの裏地をねっとりと湿らせた。
どうやらサーシャに嗅がされた媚薬の効果がまだ残っているようだ。
藁敷きの質素な簡易寝台に上体だけ起こし、頬を赤く染めて両脚を窄める。
今更のように周りを見回すとここはどうやら、森の中に建てられた作業用の丸太小屋のようだった。簡素ながら整頓された屋内には、食料などの蓄えや諸々の用具が備わっている。
（誰かが、助けてくれたのか……？）
まさかエルスがフィオナの救出を後回しにして戻ってきてしまったのではと、心配が胸を過る。しかし、
「あら、気がついたようね」
小屋の戸を開けて中へと入ってくる人物からかけられた声は、気高き槍騎士とは似ても似つかぬ柔らかさと遊び気を有した穏やかな響きをしていた。
「あ、あなたは……？」
朦朧とした意識の中で聞いた、いやそれ以前にもどこかで聞いた憶えのある声に記憶を掘りかえしつつ尋ねる。
燃えるような赤髪を腰まで伸ばす、長身の女性が、人好きのする笑みを満面に湛えていた。
（やはり、どこかで会ったことがある）
思い出せそうで思い出せない焦れったさに首を傾げる。
「私はドーラと申します、セリーヌ様。王城の兵士食堂で調理長を務めさせていただいております」
「あっ！　城の、食堂の……」
彼女の自己紹介に記憶が繋がった。見覚えがあるはずだ。王城に勤める兵士たちに毎日美味い食事を提供してくれる大食堂。その厨房を取り仕切るのが目の前の魅力的な笑顔が印象的な女性であった。
「失礼しました。つい失念してしまっていて。いつも世話になっておきながら。それに危ういところを助けていただいたというのに」
ドーラという名前すら知らなかったことに恥じ入る。しかし長い赤髪の料理長は気にした様子もなく朗らかに答えた。
「いえいえ、たまたま森の中で食材探しをしていたら、倒れていたセリーヌ様を見つけただけですから」
「それでもありがとうございます。小屋で休ませてまでいただいて。ところで私が倒れていた辺りに怪しい者たちがいませんでしたでしょうか？」
「さあ？　私が来た時には他には誰の姿もありませんでしたよ。ああ、でも大勢の人たちが逃げ去ったような足跡が残ってはいましたけれど。何かあったのでしょうか？」
「い、いや……」
やはりバーンドベルグの連中はエルスたちを追いかけていったのだろう。不甲斐なく堕ちた自分など、止めを刺す価値もないということらしい。
悔しさが胸に込み上げるがそれでも命があったことに感謝しなくてはいけない。自分にはフィオナを救い出すという使命があるのだ。
心配げに尋ねてくる料理長に言葉を濁す。まさか皇女が敵の手に落ちたなどと教えるわけにはいかない。
「お世話になりました。お礼は改めて必ずいたしますので」
まだ万全とはいえないが、エルスに追いつく頃には媚薬も抜けきっているはずだ。疼く子宮とヌメった股間の悩ましさをこらえながら立ち上がる。
「あらら、だめですよ。解毒はしたけれど、まだ完全には抜けきっていないんですから」
ドーラが慌てて止めにきた。再び寝台に戻そうとしてくる。
「私には、どうしてもやり遂げなくてはならない任務があるのだ。こうしている間にも……」
フィオナが屈辱的な仕打ちをされているかもしれない。真剣な眼差しで、料理長の手を振り払おうとする。
「それならばなおのこと、体調を万全にしておかないと。そんな状態で焦って飛び出して、もし敵と戦う羽目にでもなったら倒されてしまいますよ」
先ほどの陵辱を受けた感触が脳裏に蘇る。二度とあのような卑劣な手にはかからない。そう心に誓うのだが、発情薬の効果が残る状態で新たな罠を仕掛けられたら回避できるだろうか？
「心配はありがたいが、それでも私は行かなければならないのだ!!」
不安と焦りに昂る心を抑えながら、それでも強い口調でドーラを退けようとする。しかし女料理人は騎士団長の威圧にも臆した様子はなく、飄々（ひょうひょう）とした調子で小首を傾げた。
「困りましたわね。どうしてもというのなら、そうですね、私と勝負して勝てたら、というのはどうでしょう？」
「はあ……っ!!」
「その代わりセリーヌ様が負けたら、

体調が戻るまで安静にしていただきますからね」
　どういう冗談かと訝しんでいると、自信満々の様子でドーラが言う。引き締まった身体つきからしていくらかは剣術の嗜みがあるようだ。しかしいくら何でも一介の料理人が本職の騎士、それも公国一の名手と名高い第一騎士団長に刃が立つわけがない。たとえ体調が万全ではないとしてもだ。
「そんなことを言えば私が大人しく従うと思ったら大間違いだぞ」
　やれやれと溜め息を吐きながら困り顔を浮かべる。まさか本気ではないだろうと、小屋の外へ向かおうとした、
　だがドーラは囲炉裏にかかった鍋から柄の長い鉄製のお玉を手に取り、ブンブンと軽く振って汁気を飛ばすと、丸い先端を騎士団長に突きつけて言う。
「私はこれでお相手しますので、セリーヌ様はどうぞ剣を抜いてください」
　にこやかな笑顔に、困惑が高まる。
「ならば遠慮なくやらせてもらう。行くぞっ！」
「どうぞ～♪」
　これ以上冗談に付きあっている暇はない。一瞬で片を付けて一刻も早くフィオナを助けに行く。
　暢気に微笑む赤髪の料理人へと闘気を叩きつけ、魔剣を抜き放つ。素人ならばこれだけでもう身が竦んでしまうはずだ。軽く当て身でも食らわせて気絶させればいいかと踏み出した途端、
「はい♪」
「ッぁっ!!」
　目にも留まらぬ勢いで跳ね上がってきたお玉の柄に、剣を握る手を強かに打ち据えられた。骨にまで響く痛みにたまらず愛剣を取り落とす。
「そ……そんな、まさか……」
　思いも寄らなかった敗北に、愕然と立ち尽くすセリーヌへ、笑顔のドーラが告げた。
「はい、勝ちましたよ～。約束通り横になってくださいな」
「くっ!!　た、確かにあなたの勝ちだ。しかし、約束を違えることになって申し訳ないが、どうしても私は行かなければならない」
　油断はあった。しかしそれとは関係なく、この女料理人の技量はセリーヌの予想を遥かに上回っていた。
　敗北を認めつつも、使命を果たすべく強引に押し通ろうとする。しかし、
「約束は約束ですから。でもどうしてもというなら、気が済むまでお相手しましょう」
　お玉の先を突きつけて、ドーラが通せんぼする。
「そうか……。ならば仕方ないな。せいやぁあああああぁっ！」
　もう侮りなどしない。今度は全力でゆく。剣を拾い上げるとセリーヌは、裂帛の気合いを放って笑顔の女料理人へと斬りかかっていった。
「はい、またまた勝負ありですね。そのまま大人しくそこで身体を休めてくださいな」
　完敗だった。どれほど素早く斬りかかっても、ドーラの流れるような動きに翻弄され、空回りさせられたあげく、セリーヌは素手で手首の関節を極められ、寝台の上に仰向けとなるように投げ飛ばされてしまった。
「私はっ、どうしても行かなくてはならないんだっ！」
　飛び起きようとするが女料理長がそれより早く覆いかぶさってきた。
「ド、ドーラ!?　ひうっ！」
　面食らうセリーヌの股間へと手を滑り込ませる。ショーツの上から緩みほぐれたワレメをなぞられ浮き立つ快感が走った。濡れた布地にさらに熱いヌメリ汁が溢れ出て、ぬちゃ、という指先に捏ねられる音色が淫靡さを増す。
「やめ……あ、あぁぁ、変なところ、さ、触る……なっ」
　そのままショーツの布地を秘裂にめり込ませながら、ドーラの指先が溝壁をかき穿り埋まってきた。
　疼きが密度を増して陰部を熱く火照らせ、細かい痙攣を誘発する。
「戦いの場において敵の弱点を攻めるのは定石。当然女騎士は男たちから淫らな仕打ちをされる。なのにあなたはあっさりと罠に嵌まり、しかも抗うこともできず敗北を喫した。今もこうして敏感なところを弄られただけで、何もできなくなってしまっている」
　返す言葉もない。まったくその通りだった。先ほどの丁寧な言葉遣いとは打って変わって、まるで出来の悪い生徒を叱るような厳しい口調となったドーラに歯を食い縛って悦感を耐える。
　しかし狂おしい惑美はそれだけで終わらなかった。
「これだけ言っても、あなたは向かおうとするでしょう。でも今度敵に捕らえられればどのような目に遭わされるか、私が身をもって教えてあげる」
「な、何を……？　ふぇあぁっ！」
　陰核を割れ目の溝から穿り返すように爪の先で引っかかれ、あられもない嬌声を張り上げ悶えてしまった。
「い、今のは……。でも、そんなところを、そんなに、強く、されたら……」
　鋭敏な小粒への刺激にせっかく収まりつつあった子宮の疼きが尋常じゃないほどに脈打ちを強めていた。
　絶え間なく熱い雫が滲み出て膣壁を熱く渦巻かせ、お尻の穴までがひゅくひゅくと窄まって心許なさを煽り立てる。しかも尿意のような感覚が膀胱を切迫させ、集中力を混乱させていた。
「イセリア英雄公国の騎士団長を務める者ならば、子宮に精を注がれ、絶頂に苛まれながらでも敵を皆殺しにするくらいできて当然。なのに陰核をお遊び程度に刺激されただけで、されるがままになってしまうなんて、不甲斐ないにもほどがあるわ。せめて女騎士を堕としたと勝ち誇る相手の油断を突いて、反撃に転じるくらいのことはやれないのかしら？」
「そんな……こと……っ。ふぇっ、は

著者近況　完全読者モードで楽しんでいた所に、まさかの依頼で不意を突かれました。作品世界を壊さないようにと気をつけたつもりが、書き上がってみるとやりたい放題な内容に。楽しんでいただけると良いのですが。

う、あ、あぁぁ、んあっ！」

淫裂を人差し指で穿りながら、親指の腹で陰核を押し潰すようにくりくりと転がしてくる刺激に、脳裏が点滅するほど過剰な快感が押し寄せる。

これだけでももうどうしようもないのに、絶頂するほどの悦楽をもたらされたら反撃どころか意識を保っていられるかどうかさえ危うい。

だがドーラは、それを物ともせぬ精神力と技巧がなければ、公国の騎士団長を務めるには足りないかのような口ぶりで、セリーヌを追い詰める。

「今回は無事だったようだけれど、またバーンドベルグの連中に辱められたら、次こそは処女を奪われるかもしれないわよ」

「しょ、処女……を……」

純潔を敵の手に無理矢理奪われるかと思うと、おぞましさに身が震える。

その途端ドーラは慣れた手つきで鎧の留め具を外して女騎士の胸当てを脱がしてしまった。

「そ、そんな、あぁっ！」

大きなカップをぎゅうぎゅうに満たして詰まっていたたわわな熟れ房が、思いがけない解放の喜びに派手に波打って弾け出た。強固な甲冑の内側で火照る体温に蒸されて熟成した、濃厚汗の甘酸っぱいにおいがむんと立ちのぼる。

「ん、ちゅぱっ、れろろ」

「はひっ！　ふぇえ、あ、あぁっ」

仰向けでも形の崩れない張りのある膨らみの頂上で充血に赤く染まってそそり勃つ乳首に、唾液でぬめった唇が遠慮なく吸いついてきた。

「ふぉんなところを硬くひへ……。私が鍛えへあげりゅはら、快感に流さりぇないように、身体を慣らしなふぁい。くちゅ、ちゅぱぱ。ぺろ、れろろん」

「ひっ、あぁぁ～っ！　そんなところ、を、んくぅっ、こ、の……んあッ」

悔しさに力を振り絞りドーラを押しのけようとするが、翻る舌に粒勃ちを転がされるとへなへなと両腕が萎えてしまう。軟体動物のように蠢くベロ肉の表面が円を描くように乳首の側面をなぞり、蠱惑を煽り立てた。

「あふっ!!　変な舐め方、するなぁ！」

火照る肢体をくねらせて、あられもない嬌声を零す。

早鐘のように鼓動する子宮から、こらえようもなくとぷとぷと牝蜜が溢れ出る。ショーツの上から愛撫していた指が布地の中に滑り込み、ぬかるみきった淫裂を直に刺激してきた。

「へぁぁッ!!　お、お、おぉ、ああっ！　そ、こ、触っちゃ、だ、めえっ!!」

ただでさえ鋭敏極まりない肉花弁が、自身で噴き零した甘ツユにふやけて剥き身のように無防備となっている。

「いくら媚薬の毒が抜けきらないからって快感に惑わされすぎよ。イセリアの騎士ならばこの程度、意識と感覚を切り離して理性を保ちなさい」

「そ、そんな、私、は……はひっ！」

ドーラの言葉すべてが、騎士として失格だと責めているように聞こえる。

濡れすぎだと呆れられたばかりなのに、ますます、じゅん、と膣壁が熱く潤み新たな雫を滲ませる。そのことを知られたくないのに、ドーラは蕩けた肉ビラをかき分けて割れ目に埋まりくると、物欲しげに収縮を繰り返す膣口に指先をぬぽっとめり込ませた。

「だ、だめっ、そッ、そこおっ！　はうっ、お、おおぉっ、抜い……て、はうっ、あ、んんぁあああッ!!」

ぬめりふやけた穴中の粘膜に異物が触れた衝撃で、腰から下が熱せられた飴のように溶け崩れるような虚脱に見舞われた。そのちっぽけな指先にすべてを支配され、何ひとつ抗えない。

（わ、私は……、何と不甲斐ないッ）

己の未熟ぶりに歯噛みするが、咥え込んだ硬く細い感触が波となって幾重にも脳裏に押し寄せ、どうにもならない。穴口が為す術もなく窄まって指先を締めつける。抜いてと訴えながら、もっと奥へと求めるように腰が迫り出すのを止められない。

「指の先だけなのにもうこんなに絡みついてきて……。これじゃ襲われたら敵の言いなりになるだけね」

窄まる膣口をほぐすようにかき回しながら、厳しいダメ出しが続けられる。

「そ、そんな、ことっ。私、はッ」

耐えきれると意地を張る。

「じゃあ、どうしてこんなところまでヒクヒクさせているのかしら～？」

だが見逃さぬとばかり、膣口には親指を宛てがうとドーラは女騎士団長の後ろの穴に、愛液でヌルヌルになった人差し指と、さらには中指まで揃えて一気に突き込んできた。

「くふぉおっ！　そこッ、んんんっ!!　ど、どぁめえっ！　きゅひっ、きひゃな……お、おおおぁぅうンッ!!」

大慌てで括約筋を引き締めて侵入を阻止しようとしたが、密着度が強まる。急上昇した刺激に驚いて取って返すように緩ませた肛門を押し開き、指二本がムリムリと軋みながら埋まりくる。

（あ、あああっ、お尻にッ、い、挿入られたぁあっ、ひうっ、太ぉおおっ!!）

途端に排泄を催す異物感が渦を巻いて膨れ上がり危うい気分に苛まれた。

男根とは違った硬い感触が、太さ以上の存在感で直腸を満たす。膣口をくじられ続け抵抗できなくされた身体を、さらに楔を打ち込むかのように狂おしすぎる激感が支配した。

「あら、こっちは前よりもずっと慣らされていて感じやすくなっているようね。あっさりと埋まり込んじゃったし、嬉しがってほら、穴から壁まで私の指をギュッとしてくる」

指の腹で腸内を探り尽くすように、襞壁をなぞってくる。

女同士のため、完全に性感帯を把握されていた。感じやすい箇所にピンポイントで絶妙な強さの刺激を与えられ、否応なしに女体が疼き狂う。

「ひぃあ、は……ふぉ、ンンンッ、お、おお、おぉ……」

著者近刊　『ツイてる勇者さま！』『換身の騎士アルベルト 淫靡な魔女と入れ替わった肉体』『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた1～3』『僕のモテ期はただの勘違いだったのかもしれない』『ピルグリムメイデンⅠ～Ⅲ』『クールに熱愛っ！ 恋する完璧少女』　好評発売中！

勝手に収縮してドーラの指を歓待してしまうアナルが情けなくてたまらない。恥ずかしさに呻きながら何とか気を散らそうとするが、女料理長は滲み出る腸液の潤滑に任せて二本指をストロークさせ始めた。
「ふあっ！　やっ、ああっ、動かさ、ない……でぇ‼　んぉおおっ、ふぉほっ！　くぅッひッ、あああぁぁっ‼」
ずぶっ、ぐち、ぎちち、ぬぶぽッ。
菊穴を出入りされる感触も悩ましいが、軽く曲げた指先に腸襞を軽く穿られると、灼熱の惑感が膨張してたまらず泣き出しそうになる。
「気持ちイイのね。お尻の締めつけが激しくなった。前のほうからのおツユもますますたっぷりになってきたし」
「ひうっ‼　私……は、ほぉああぁぅっ！　ひゃめっ、ふぁはぁぁっ‼」
口に出さなくても身体の反応でバレてしまう。お尻と膣に指を嵌め込まれていて何も隠し立てできない恥ずかしさに絶句するが、ぐりんと菊穴のとば口付近をえぐるようにかき乱され、あられもない嬌声をあげさせられた。
「この程度の快感で心を乱さないようにしなさい。騎士ならば、敵が我を忘れて夢中になっちゃうような技を身につけて、隙を突くくらいのことはできないと」
「そんなッ、うごっ、動かしちゃぁ～～っ‼　んくぅうっ、もうッ！」
このような淫らな手段を戦いに用いたくなどない。正々堂々と剣の技で勝利を勝ち取るのが騎士たる者の戦いだ。
しかし実際には何度となく敵の男どもに感じやすい肉体を弄られて、抗うこともできず絶頂させられてきた。
（私はっ、ああっ！　こんなこと、イヤ、なのにっ‼）
これまで受けてきた辱めが次々と脳裏に蘇り、嫌悪と屈辱に胸がかき乱される。剣の腕前だけではどうにもならない。汚らわしい行いを含めたすべてが戦いなのだ。ドーラの淫技によって、セリーヌは今まで顔を背けてきた事実に向きあわせられた。
後ろ穴をストロークさせる勢いで、膣口にめり込ませた親指までもが、出たり入ったりを繰り返し、どうにかなりそうなもどかしさを昂らせる。
軽やかな口調で辛辣な言葉を投げかける合間合間に、ちゅぱ♪　れろ♪と乳首を吸い転がしてくるので、ねっとり濃密な汗に塗れた肢体が感電したように痙攣を繰り返す。
腸奥に届くほど深くまで埋まりきったかと思うと、抜け出る寸前まで引き抜かれる二本指の抽送に、切迫と焦燥が交互に湧き上がり気が変になる。
「お尻の穴、とろとろ。これじゃ男はひとたまりもないわね。すぐに濃厚なのをどぷどぷ漏らしちゃうでしょね。なのに、このお尻穴を有用な武器として使えないあなたは、騎士としてまだまだ未熟です」
「く、うううぅ……ッ‼」
ドーラの辛辣なダメ出しが心をえぐる。その最中にも甘美は尋常ではなく昂り狂う。
「そろそろ一度イってくださいな。今は何よりも身体を休めないと」
すっかり緩み呆けた顔で涎を垂らしながら啜り泣くような喘ぎを繰り返すセリーヌへ止めとばかりに、揃えていた人差し指と中指を大きく広げて肛門を拡張させてしまった。
排便をうながされるような焦燥と羞恥が押し寄せ、こらえる気力をこそげられる。
「ひゃうっ！　ふぁわっ、だめっ‼　あ、ああっ、広げッ、広げちゃイヤぁああっ！　はふぅうっ、おぁああっ、恥じゅかし、ひぅ、ん……くっ、ふぁああああぁ――――っ！」
びじゅっ、ぷしゅしゅ、ぶっじゃ～～～～～～～～ッ‼
不浄でみっともない部分を押し広げられ、その中を晒されているかのような恥辱がセリーヌの理性を弾き飛ばした。無防備となった肉体を狂おしい快感が怒涛の勢いで駆け巡り一気に絶頂へと精神を押し上げる。
こじ開けられた肛門を震わせながら、連動する膣穴をキュンと窄ませて、イセリア英雄公国第一騎士団団長は潮液を激しい勢いで噴き上げた。
「ふえっ、あ、はあっ、んぅおお、お、あ、はぁあぁ……」
太い余韻が大蛇のように体内をグルグルと巡回し続けている。
（くふぁ……もう、だ、め……ぇ）
許容を超えた甘美に耐えきれず、セリーヌは最後に大きくビクンと打ち震えると、意識のスイッチが切れたかのように暗闇へと落ち込んでいった。
「あらら、ちょっとやりすぎちゃったかしら。けれどこれで自分の未熟さを思い知ってくれたでしょうし、それに媚薬の発情も収まるはず。薬の効果が消えても一度火照った身体はきちんと絶頂させないと、いつまでも悶々としちゃうからね♪」
ぐったりと横たわる青髪騎士の二穴から抜き出した濡れ指をちゅぱちゅぱとしゃぶり清めながら、ドーラが悪戯めいた笑みを浮かべた。
「さてと……。そのままぐっすり眠って疲れを取りなさいな。起きたら元気に動けるように、滋養たっぷりのスープを飲ませてあげるから」
寝息を立てる彼女に優しく告げると、料理の材料を採取に行くのだろう静かに小屋を出ていった。
「フィオナッ‼」
悪夢にうなされ飛び起きた。
一番の友であり、命に代えても守らねばならぬ皇女が目の前で辱められているのに、助けるどころか声をあげることも指一本動かすこともできないという最悪の夢……。そして可憐な命が散らされようとするその寸前で目が覚め、セリーヌは荒い呼吸を繰り返しながら寝台に身を起こし呆然としていた。
全身が汗びっしょりだ。悪夢に滲み

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/